清　水　遺　跡

— 弥生時代後期，古墳時代前・中期，平安時代の集落址，方形周溝墓群 —

1976.11

建設省天竜川上流工事事務所
長野県飯田市教育委員会

清　水　遺　跡

— 弥生時代後期，古墳時代前・中期，平安時代の集落址，方形周溝墓群 —

建設省天竜川上流工事事務所
長野県飯田市教育委員会

序

一般国道152号線の天竜川にかかる水神橋架換工事に関連して，飯田市松尾清水地先に新橋の取付道路が設けられることとなりましたが，かねてよりこの地先には清水遺跡の存在が確認されていたので，文化財保護の見地から，工事実施に先だち飯田市教育委員会に委託して遺跡の発掘調査を行ったものであります。

今回の調査によって予想以上に多くの成果が得られたが，なかでも天竜川の河面に近い低い位置の段丘に弥生後期から〝生活〟があったことが確かめられたり，それが数次にわたる層になって出土したこと，あるいは水神への祈りが行なわれたと考えられる場所や祭器類が発見出来たこと等は我々門外漢にとっても非常に興味深いことであります。

報告書が出版されるにあたり，改めて文化財保護の意義をかみしめるとともに，佐藤調査団長はじめこの調査に当たられた関係各位のご努力に厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和51年11月

建設省天竜川上流工事事務所長

小　島　忠　幸

例　　言

1．本書は昭和49・50年度の天竜川護岸工事と国道152号付替に伴う清水遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は豊富な資料と，その多岐にわたっているため報告書作成の期限延期を申請し執筆してきたが，調査結果についてまだ充分な検討・研究に至らず，資料提供に重点をおかざるを得なかった。

3．編集は佐藤・今村が担当し，自然的環境を矢亀勝俊，歴史的環境を大沢和夫に執筆依頼し，文末に文責を記し，それ以外は佐藤が今村の所見を加え執筆にあたった。

4．遺構・遺物の作図及び遺構写真は佐藤が担当し，遺物写真は木下平八郎に依頼した。製図は中平一夫田口さなえに労をわずらわした。

5．遺構実測図のうちピット内，または横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし，縮尺は図示してある。

6．遺物は飯田考古資料館に保管してある。

目　　次

序 …… 3

例　言 …… 4

目　次 …… 5

I　環　　境 …… 8

（1）自然的環境 …… 8

（2）歴史的環境 …… 10

II　発掘調査経過 …… 15

III　調査結果 …… 20

（1）遺　構 …… 20

1．住居址 …… 24

(1)　弥生時代後期 …… 24

(2)　古墳時代 …… 31

(3)　平安時代 …… 36

(4)　中　世 …… 41

2．柱列址・柱穴群 …… 42

3．土坑・土器集中坑 …… 44

4．方形周溝墓 …… 47

5．水路址 …… 58

（2）遺　物 …… 58

1．弥生時代後期 …… 58

2．古墳時代 …… 60

3．平安時代 …… 62

4．中　　世 …… 62

V　まとめ …… 64

調査組織 …… 66

おわりに …… 68

遺物図

図　　版

図１　清水遺跡位置・地形図及び周辺遺跡図　（１：25,000）

遺　跡

松　尾　1.妙前　2.発向　3.鳥屋場　4.寺所集会所付近　5.明公民館分館付近　6.八幡原
7.代田獅子塚付近　8.清水集会所付近

毛　賀　9.照月寺付近　10.石打場　11.妙上　12.御射山　13.浜井場　14.大垣外　15.緑ヶ丘中
16.塚越　17.田圃　18.田屋 19.毛賀堀割　20.南ノ原

駄　科　21.北平　22.塚越　23.安宅　24.権現堂　25.宮城　26.大島　27.城陸

下久堅　28.北原上ノ平　29.竹ノ下　30.番場　31.司馬垣　32.屋敷　33.のいわ　34.主膳
35.内御堂　36.馬出し　37.坂下　38.五輪原　39.川原　40.京田

古　墳

松　尾　A.御射山獅子塚　B.おかん塚　C.上溝天神塚　D.姫塚　E.羽場獅子塚　F.妙前大塚
G.坊主塚　H.水城獅子塚　I.八幡山古墳　J.代田山狐塚　K.代田獅子塚

毛　賀　L.照月庵古墳　M.戦争塚

駄　科　N.平塚　O.塚越古墳　P.安宅古墳　Q.権現堂一号墳　R.番匠塚

下久堅　S.塚越古墳　T.塚平古墳

図２　清水遺跡詳細地形図

（１：7,500）
（Ⅰ～Ⅴは調査区）

I 環　　境

(1) 自然環境

清水遺跡は長野県飯田市松尾地区の天竜川に近い清水区にある。ここには国道152号線が南北に通じ，南に行くと水神橋の方向へ東方に曲っていて清水区を貫いている。この遺跡の西は順次高くなる松尾の段丘に続いており，八幡原を経て木曽山麓には凡8㎞の距離がある。また東は眼下の天竜川を経て下久堅の知久平から赤石山脈の前山である伊那山脈の麓まではこれまた8㎞乃至10㎞の距離がある。南北は開けて北は天竜川の河谷が遠く上伊那方面にまで開いており，南方は南原の狭隘を経て天竜峡に至る。この地は天竜河谷中で伊那盆地の南部にあたる飯田盆地の中心部に当っている。従って盆地の底の部分であり，周囲の村々に対して中央的位置にある。しかしこのように位置には恵まれているが，天竜川に接しているために遠い地質時代以降洪水によって数えきれない程の侵蝕，堆積が繰返されていたことは当然である。即ち鮮新世から洪積世にかけて，東西の伊那山脈と木曽山脈は上昇して，地溝が出来て中央部は低くなり，伊那盆地となるが，当清水遺跡のある地も基盤の花崗岩の上にあって天竜川によって削られ，また土砂が堆積するなど繰返されていた。

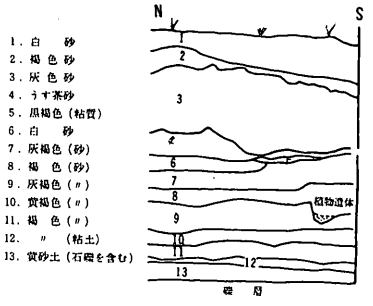
さて清水遺跡の地を調査の関係上，一つは国道西側の平坦な南北に続く広い段丘面と，国道東側の今回発掘の行われた一段低い段丘面とにわけて説明することにする。

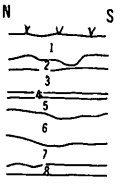
先ず東側の地は天竜川の河床に近い標高は386㎜前後の低い土地で，東の天竜川に近いところには岩石が出ており，西方は天竜川の河床のあとがあって共に天竜川によって侵蝕を受けまた砂礫の堆積が何回も繰返された地である。

東側の岩石は下久堅側や天竜川の河中にある弁天島の岩石と同じ花崗岩で一連のものである。従って最近鉄橋のかかる前までこの岩石を利用して水神橋が架けられ東西の村を結んでいたことは一般に知られている。岩石は天竜川によって相当攻撃されても根本まで侵蝕されないので，古来住居地として天竜川岸に立地するすることができたのである。天竜川の岸近い遺跡地はその西側よりもやや高いのは，小規模な岩石丘であることと，どこの河岸にも見られる自然堤防的な砂が岩石によって保護されていることによると思われる。ここでは砂中に楼閣とはいわないが立派な住居址が発掘されていて興味が深い。既設の水神橋は36年出水の時に橋上に水があふれる位で危険であるので，100㎜余上流の今回発掘した小高い遺跡の地から橋面をかさ上げして新しい橋をかけ，これにともなって国道のつけかえが行われることになっている。

この遺跡の西側は1㎜弱低い地で，36年の洪水の時は天竜川の氾濫のあった所である。記憶にある所では昭和20年にも一部は水浸を受けている。この附近一帯は粘土質，砂質など，その時の運ばれた土砂によって堆積された地である。北から南にかけて僅かの段丘崖が見られ，且ての川の流路がうかがわれる。従って湿地が多く，地下水層は地面から比較的高く今回の発掘に際しても水中にあった木が保存されている程である。

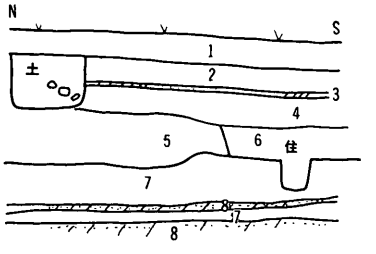
天竜川に接す東端部地層断面図





方形周溝墓Ⅳ　北溝南側地層断面図

第Ⅲ調査区　農道切採り断面図



第Ⅳ調査区トレンチ１～４断面図

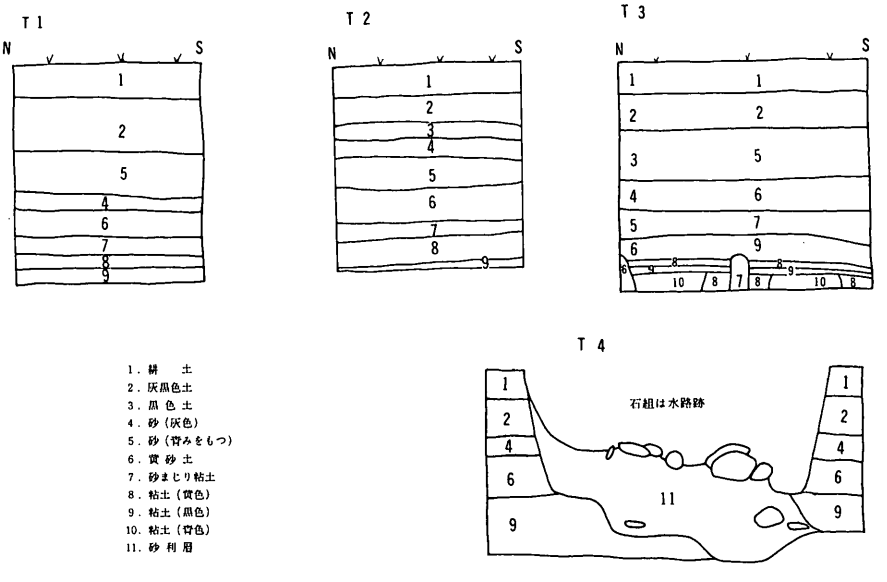


図３　地層断面図

次に国道西側の広い段丘面は天竜川によって作られた低位置段丘面で，段丘が形成された以後は天竜川からは相当な距離にあるので川に対しては安全地帯である。加えて城部落や緑ケ丘中学校の下から毛賀に至る段丘崖の下には豊富な湧水があるため住居としては好適な地である。現在は水田が多く未だ発掘の段階にならないが，今後発掘の機会があれば住居址や遺物の出土など希望の持てる場所である。

（矢亀勝俊）

（2） 歴史的環境

清水遺跡は飯田市松尾にあるが，対岸は飯田市下久堅知久平であり，南は飯田市竜丘駄科となっている。それで清水遺跡を中心とした飯田市松尾・毛賀，飯田市下虎岩・知久平，飯田市駄科の歴史的背景を考えてみたい。

以上の5区には今までのところ旧石器時代の遺物は発見されていない。縄文時代の遺跡はかなり多いが最近に発掘されたもの以外に大きいものは少ない。しかしこれらの遺跡よりは弥生式土器や土師器・須恵器などがともに出土し複合遺跡となっているものが多い。それはこの地区は下伊那地方でも最も早く開発された地方なので，遠い昔に遺跡が破壊消滅してしまったことも考えられる。

ただし最近道路開さく，農業構造改善事業等による発掘調査したところより多くの住居址が発見されたことより考えると遺跡の多くが地下深く埋もれているとも考えられる。

この5地区の遺跡のうち主なものを挙げるが，古墳のことは後に述べる。

遺跡

飯田市松尾（旧松尾村）

この地区は天竜川に面した5段の段丘より成っているが，段丘崖に近い段丘面に比較的遺跡が多い。その主なるものは次の通りである。

新井　妙前　　ここには多くの古墳があるが，その一帯より縄文中期の土器，石器，弥生式土器・石器，土師器，須恵器など多く出土している。

寺向　発向　　縄文中期後期土器，弥生式土器，打石斧など多く発見されている。

寺所　鳥屋場　　縄文土器もあるが，ここより出た弥生式後期土器が松尾小学校に保管されている。

寺所　集会所付近　　昭和43年1月と46年3月に一部の発掘調査が行なわれた。そして弥生式中期前葉の土器が多く発見されそれを基として寺所式という様式が決定された。多くの弥生式土器や石器が発掘され，木器も泥中より発見された。それで学会ではこれを寺所遺跡と呼称している。

明　公民館分館付近　　下伊那の先史及原史時代図版によればここより押型文土器と水神平土器の出土を報じている。打石斧や土師器は出土している。

八幡久井　八幡原　　広い段丘面であるが，所々より打石斧，土師器が出ている。

代田　獅子塚付近　　古墳付近より縄文土器，打石斧，磨石斧，石棒，土師器高坏が出土している。

清水　集会所付近　　今回発掘した清水遺跡に最も近い遺跡であり押型文土器と有肩扇状石斧の出土を

報じられている。

飯田市毛賀（旧松尾村）

清水遺跡のある面より一段高い段丘面やそれ以上の地である。

上毛賀　照月寺付近　　円墳があるがその付近より縄文中期土器，石鏃多数，須恵器の出土を見る。

上毛賀　石打場　　国道をはさんだ両側の地であるが，縄文中期・後期・晩期の土器が出ており，特に晩期土器は四角形の口縁をもっている。打石斧・小形磨製石斧・石剣・石棒・臼形耳飾・スタンプ状耳栓が出土している。やや離れた地点より緑釉陶片も発見された。

上毛賀　明上（みょうがみ）　　縄文中期土器と弥生式石剣が出土した。

上毛賀　浜井場　　縄文土器・弥生式中期土器（筒形）が出ている。

上毛賀　御射山　　縄文後期土期，打石斧・石錘が出土していたが，昭和51年の発掘により縄文期の住居址や平安時代住居址・中世住居址や柱列が発見された。布目瓦の出土は本村としては最初である。

下毛賀　緑ヶ丘中学校校庭　　工事最中に縄文中期の土器が出土し，松尾小学校に保管されている。

下毛賀　塚越　　阿島式土器，石棒が出土した。このあたり一帯昭和41年に農業構造改善事業が行なわれた。その際縄文後期土器，石鏃，環状石斧，弥生式中期・後期土器，多量の土師器，須恵器など多く出土した。ブルトーザーのあとを追うような形で十分な調査はできなかった。

下毛賀　田圃（石田塚付近）　　石鏃・石匙・石棒・打石斧・石包丁・管玉・土師器，須恵器が発見されている。このあたりも構造改善事業が行われた。

下毛賀　田屋　　石鏃・打石斧・磨石斧・石棒・石皿・石錘，磨製石鏃・太形蛤刃石斧・石包丁などの縄文時代のものや弥生時代のものをはじめとして土師器，須恵器等も出土した。

下毛賀　掘割　　旧飯田本郷線が地面を掘り下げて通っているが，そのあたりより打石斧・磨石斧・石皿・石剣が出土した。籾あとのついている土師器も出土している。

上毛賀　大垣外　　昭和42年このあたり一帯農業構造改善事業が行なわれ，その一部を工事前に発掘調査をした。そして多くの須恵器を発見した。祭祀遺跡かと思われる所もあったが明にし得なかった。

飯田市下虎岩（旧下久堅村）

天竜川に向かって段丘をもって下っている地区であるが，松尾と比べると段丘の幅が狭く，したがって傾斜地が多い。

北原　上の平　　比較的高い所にある遺跡で石皿・打石斧が出ている。

竹の下　　天竜川の氾濫原に面した最も低い段丘面に立地し，縄文中期土器，打石斧・石鏃，弥生式土器が出土している。

番場　　下虎岩公民館のある段丘面で，縄文中期土器，打石斧，須恵器が発見されている。

司場垣　　番場につづく地で縄文中期土器，打石斧，平安時代の須恵器，灰釉陶器，山茶碗，青磁が出土しており，古代より中世にかけて開けていた地である。

屋敷　　司馬垣につづく所で縄文中期土器，打石斧・石鏃・石錐，弥生式後期土器も出土し，弥生時代の住居址も発見されている。番場・司馬垣・屋敷の一帯は平坦地で弥生式土器も出土し，古墳もあり，平安時代の陶器も発見され，古代中世にわたる集落地帯であったと考えられる。

のいわ　　以上の遺跡より一段上の地で縄文中期土器，弥生式土器，抉状打石器が発見されている。

知久平（旧下久堅村）

清水遺跡の東にあたる地帯で，比較的平坦地が多い。

主膳　清水遺跡と天竜川をはさんで対峙している遺跡で，縄文中期土器，打石斧，平安時代の須恵器が出土している。

内御堂　下久堅小学校を中心とした地帯で縄文中期土器，打石斧，須恵器，土師器が出土している。ここに知久平城があった。

馬出し　内御堂の南につづく地で，須恵器，土師器片が多く採集することができる。

坂下　知久平神社の西にあたり，縄文中期土器，土師器，須恵器が出土している。内御堂，馬出し，坂下にわたる地帯は知久平城の工事で破壊されたところもあるが，縄文より弥生・古墳時代より中世に及ぶ遺跡である。

五輪原　ここは南原区で知久平ではないがついでにあげておく。文永寺前の平坦面で縄文土器，土師器，須恵器も出土しており，古瓦も発見されている。

川原　清水遺跡と直距600 m にすぎず，海抜もそれと同じ位で天竜川にごく近い遺跡で，昭和44年暮れから45年正月にわたり発掘調査された。地下 2 m 下より縄文中期土器が出土し，それより上へ後期・晩期，更に弥生式土器が出ていて住居址も発見された。その位置が天竜川にごく近いことと縄文晩期土器は注目されている。

飯田市駄科（旧竜丘村）

この地区は清水遺跡より20 m 以上高い段丘面であるが，直距離は1000 m ～1500 m と近い。臼井原や新井原は遠く離れているから略す。

北平　昭和50年12月に発掘調査され，縄文中期住居址 2，平安時代住居址19，中世住居址 3 の外，柱列址・土坑も発見されたが堂址の発見は注意される。

塚越　前方後円墳塚越古墳の近くより，打石斧・磨石斧が発見されているが，古墳時代の遺物も発見される。

安宅　古くより縄文時代の土器石器が発見され古墳も存在しているが，国道151号線の付替工事に先立って昭和44年発掘調査が行なわれ，弥生時代住居址 8，土師時代住居址16，その他が発掘された。その外この付近より縄文中期の土器や土隅も発見されている。けだしこれより東へ権現堂，宮城とつづく一帯は縄文時代より古墳時代へと続く大遺跡であろう。

権現堂　前方後円墳を中心とした一帯より縄文中期土器や石器が発見されている。

宮城　農業構造改善事業に先立ってこの一帯が昭和48年に発掘調査が行なわれた。そして縄文中期住居址 3 が発掘された外，かつてこの地に存在した神送塚はじめ 3 基の古墳の湟あとを発見した。これより東南へつづく長野原地籍の御殿塚古墳附近・西原遺跡も大きい遺跡である。

城陸　鵞竜峡にのぞむ高台であるがここより縄文土器，打石斧・石皿・磨石斧・磨製石鏃などが採集されている。

大島　国道151号線がホッキを通る道との分岐点に近い所で，昭和44年に発掘調査が行なわれた。縄文期の打石斧は多く出たが住居址は発見できなかった。しかし平安時代から中世にわたると思われる竪穴・土坑などが発見され，川端遺跡よりは中世の竪穴と土坑墓が発掘された。

古墳

下伊那史２巻により旧松尾・旧下久堅・旧竜丘の３村における古墳数を挙げてみると，

旧松尾村　　65（８）

旧下久堅村　　12（０）……下虎岩・知久平のみ８（０）

旧竜丘村　　138（９）……駄科のみ　　27（２）

となっており，竜丘に特に多いことがわかる。この内前方後円墳を（　）の中に記すと竜丘・松尾が全県中でも多いことがわかる。しかしその後の開発によって消滅したもの多く，今日墳丘の残っているものは多くない。

松尾では前方後円墳８基あり，御射山獅子塚・上溝天神塚・姫塚・水城獅子塚・代田獅子塚は今日墳丘がそのまま残っているが，あかん塚・羽場塚・代田山狐塚は前方部を失ない，後円部だけ残っている。このうちおかん塚は後円部のほかに前方部にも石室があり本郡としては珍らしい形態のものであったが昭和41年に前方部は破壊されてしまった。

円墳として墳丘を保っているものの中で八幡山古墳と妙前大塚・坊主塚などがある。妙前の古墳群は妙前の十六塚と称されているが破壊が甚しく，下伊那史には墳丘ありと記されているのに今日発見できぬものがかなりある。ただ妙前大塚は昭和46年墳丘の頂部が発掘調査され，眉庇付冑・鉄鏃多数・剣・大刀等が発見された。けだし本地方最古の古墳であろうと推定されている。

毛賀には消滅してしまった古墳も多く，今日照月庵古墳・戦争塚が墳丘を残しているのみである。

下虎岩には天竜川に近い段丘上に北原の塚越古墳，南組の塚平古墳が墳丘を察知できるのみである。塚平古墳では石室の残骸が巨石として残されている。

知久平では清水遺跡の対岸に主膳古墳があったが，塚穴古墳とともに消滅してしまった。ともに遺物の出たことは伝えられているが，今日何も残っていない。

駄科には新川に面した台地上に多くの古墳があり，それは長野原へと続いていたが，今日墳丘の残っているものは僅かである。その中には前述の如く農業構造改善事業に伴う発掘により　あとだけ発見されたものもある。

この地区の現存する古墳について述べる。

前方後円墳は２基ある。その１つ塚越古墳は横穴式石室を持ち，内部に入ることもできる。他の１つ権現堂第一号墳は長さ60ｍに及ぶもので，大正時代に冑・直刀・甲・馬具等多く発掘された。筆者はこの古墳より形象埴輪２片の出土したことを確認している。

円墳で今日墳丘を保っているものに鈴岡公園下にある平塚，木下氏宅にある安宅古墳，番匠塚などがある。六鈴鏡や陶馬を出した神送塚は今日その跡形は全くない。

清水遺跡よりは古墳時代の前・中・後期の住居址が発見されているが，それらが以上述べた古墳とどういう関係にあるか古墳出土物が明らかでないので正確には言えないが，古墳時代に天竜川に近いこの地が住居に適していたことだけは明らかである。それは更に平安時代より中世へとつづくものであったことは

今回の発掘で明らかになった。

城端

清水遺跡のある天竜川に面した地を城端(じょうばな)と呼んでいる。けだし中世に防備的設備があったのでその名がついたと考える。室町時代には西の台地上に松尾城があり，それと毛賀沢川を挾んだ台地上に鈴岡城があり，ともに小笠原氏の居城であった。天竜川の東の知久平城に知久氏がおって竜東に勢力を張っていた。小笠原氏と知久氏は天竜川を境として対抗していたことは明らあである。そしてそれを結ぶ道が大体今の国道152号線に近い位置であったと考えられる。天竜川の川幅が狭く，しかもその中間に水神を祭った小島があるからここに渡船場か川渡しの構造があったと考えていい。だから交通の要衝にあたる清水遺跡の先端に防御用の施設を小笠原氏が作った。だからこれを世人は城と呼んだのではないだろうか。即ち城端は中世の名前である。今回の発掘では防御施設と確認できるものは発見できなかったが，発掘した道路敷以外に存在していると思われる。

付　釜岩

清水遺跡の北端天竜川が花崗岩の岩磐につきあたる所を釜岩と言う。かつては天竜川がこの岩盤の下に大きい淵を作っており，子供達の水泳場となっていた。その後流路の変遷でこの淵も砂で埋められてしまった。ところが昭和51年になり建設省による堤防改修事業の際に再び姿をあらわした。この岩盤に「釜嵒」「不績巌」と陰刻され，「大正三年四月六日　福島唯吉命名刻」と刻まれていたことを発見した。しかしこの岩磐の字のあるところを切りとり，新堤防上に保存することになった。

（大沢和夫）

II　発掘調査経過

飯田市松尾清水地域は昭和36年伊那谷大災害の被害の大きなところで，現水神橋の上まで洪水がのり上げている。このため天竜川河川改修目的とこれに併せた国道152号の改修のため，新水神橋の架橋・道路付替えと同時に水神橋西岸の護岸工事が行なわれることになった。この地域は天竜川に接する地点まで弥生・古墳・歴史時代にわたる遺跡であり，伊那谷最低位に立地する遺跡として注目されているところである。このため建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所の委託により，飯田市教育委員会が受託し発掘調査を行うことになったものである。

昭和49年度は橋脚建設部分のみの用地内300㎡を，昭和51年度は堤防用地内と道路用地内調査を行なうことにした。49年度調査は12月16日から23日までの調査で連日の寒波のため表土を排除した下層の粘質土は上溶けによって泥となり思わぬ労苦を要し，遺構検出も十分に行なえない状態であった。

50年度調査は５月17日から８月12日にわたる調査で堤防用地内と東から道路中心杭No.32までをⅠ調査区No.32～No.30の道路中心杭間をⅡ調査区，No.30～No.24間をⅢ調査区，No.24～No.17をⅣ調査区，No.17～現国道をⅤ調査区とした。Ⅰ～Ⅳ調査区は昭和36年災害の被害地帯で，処によっては上層が流され，また深く砂をかぶる状態であった。No.18～No.24道路中心杭間は低地帯で，特にNo.21～No.24間は常時両側の水田からの水が溜っており，調査不能であり，No.18～No.21間はトレンチ調査に終わったが，他は一部分を除き全面調査となり，多くの遺構が検出され，多量の遺物の出土をみている。しかし，Ⅱ調査区は氾濫地帯で白砂の堆積は深く，遺構の発見がみられなかった。

発掘調査日誌

昭和49年度

月・日	天　候	日　　誌
12・16	晴	天竜川上流工事事務所・工事請負者と立合，調査区域を決定 ブルトーザによる表土排除，器材運搬，テント張り，グリッド設定
17	晴	方形周溝墓Ⅰ・1号住居址検出 旧天竜川流路を発見 ― 表土黒土（50㎝）下は粘質の黄砂土となり，平らな礫面があり，急角度（45°）で礫層は東に落ちていく．
18	雨	作業不能
19	晴	◦方形周溝墓Ⅰの調査 ― 南溝に遺物多し 西溝・東溝北側は用地外 ◦1号住プラン検出 北は用地外 ◦2号住検出
20	晴	調査掘上げ ― 実測 ◦方形周溝墓Ⅱ検出 1・2号住掘上げ実測 ◦3号住検出
21	晴	調査 ― 南・西溝は区域外，掘上げ，実測 ◦土坑1号～6号検出，調査 調査，掘上げ，実測
22	晴	掘上げ，実測　　3号住床面下に黒土の深い落ちこみ……調査，生活面発見できず（50年度調査で，方溝Ⅳ東溝とわかる）
23	晴	全体測量，器材徹収，現場調査を終わる

その後，図・遺物の整理をなし，調査概報を「伊那」1975，3に発表するが，その時点では十分な検討もなされず，多くの誤りをもち，50年度調査によって解明されてきたものである。

昭和50年度

月・日	天　候	日　　誌
5・12	晴	飯田市教育委員会で調査打合せ会
15	晴	天竜川上流工事事務所と用地の確認
16	雨	作業不能
17	朝雨 晴	器材運搬，テント張り，梅の枝片付け，グリッド設定
18	晴	日曜日　休み
19	雨	終日大雨　作業不能
20	晴	方形周溝墓Ⅰの未調査部 ― 北側の全面排土作業 黄褐色土層まで掘り下げ　北東コーナーを出す
21	晴	東周溝北・北周溝検出掘上げ，4号住居址検出
22	晴	周溝断面調査　　掘上げ　5号，6号住居址検出 掘上げ
23	晴	測量　　掘上げ，測量 堤防用地南側の表土排除作業，柱穴群，またいくつかの住居址とみる黒土の落ちこみあり
24	晴 くもり	方形周溝墓Ⅲの検出　　7号・8号・9号住居址を検出
25		日曜日休み
26	晴 午後雷雨	調査　　調査 天竜川に接すトレンチⅠを設定 ブルトーザーで宅地跡のコンクリートをはぐ
27	晴	調査　表土排除作業　トレンチⅠの掘りこみ 7号住掘上げ，実測
28	晴	周溝を掘る　柱列址Ⅰを検出　掘上げ（深さ1.8m ― 地層調査） 9号住掘上げ，測量　8号住，柱穴群調査
29	晴	掘上げ　10号住検出，調査　掘上げ
30	晴	測量　掘上げ　柱穴群・8号住測量 11号住検出調査
31	晴午後 にわか雨	12号住(？)　13号住・14号住・15号住検出調査 遺物多し　掘上げ
6・1		日曜日休み
2		調査　掘上げ（3分の1用地外）　調査 方形周溝墓Ⅰの西周溝検出のため 排土作業　調査
3	晴午後 雷雨	調査…遺物多く　作業　掘上げ 深く落ちこみ東にのびる　11号・13号住測量
4	晴 くもり	V字形の溝となる　作業　14号・15号住測量 幅2.4m，遺物多し
5	午前雨 午後くもり	午後より作業

月・日	天　候	日　　誌
6・6	晴 くもり	12号住は方形周溝墓Ⅳとなる 全面排土作業，調査 17号住・18号住検出 宅地跡コンクリートをこわして調査　19号住検出
7	夜来の雨朝まで大雨 晴	遺構水びたし，排水作業 方形周溝墓Ⅳ南溝，東コーナーより南にのびる溝（方溝Ⅵとなる）検出 方形周溝墓Ⅰ南溝の西にのびるを，ようやく検出（Ⅳの北溝となる）
8		日曜日休み
9	晴	方形周溝墓Ⅳ南溝上層調査 17号住掘上げ，測量 18号住，19号住調査
10	晴　午後雷雨	遺物多し 掘上げ，測量
11	くもり	〃　方形周溝墓Ⅰ　西溝検出　墓地北側にはいる ◦Ⅱ調査区グリッド設定，飯田市公民館主事，松尾，下久堅，竜丘小学校児童緑ケ丘中学生徒有志により調査
12	晴 雷　雨	前日に続いて調査。砂層氾濫跡にて遺構なし。打製石包丁２こと土器小片数点のみ 南東コーナー部調査，北溝上層調査，方形周溝墓Ⅰ西溝掘上げ
13	晴　午後にわか雨	方形周溝墓Ⅳ南・北溝中層調査　遺物多し ◦ブルトーザにて方溝Ⅵの上層宅地跡の排土 ◦Ⅱ調査区排土　調査
14	くもり	調査　北溝から南にのびる西溝検出 方形周溝Ⅵの調査……排土作業
15		日曜日休み
16	晴 あつい	調査　遺物多く（ダンボール箱７こ）
17	晴 あつい	調査　　北・西溝下層は遺物少なく，底部に至る
18	くもり 雨	作業午後不能　遺物整理 調査
19	晴 あつい	調査　北・西溝掘上げ，実測　方溝Ⅴを検出
20	くもり	南溝a　～bを西境まで掘上げ（底部より弥生遺物多し）　遺構なし
21	くもり	南溝掘上げ　方溝Ⅵの調査にかかる。Ⅳ・Ⅵの間は陸橋状に切れる。16号住がⅥの上部にあったが宅地跡をブルトーザで削り採った際，僅かに痕跡を残すのみ
22	雨	日曜日休み
23	晴	南溝測量，　方溝Ⅵ調査　溝上部に住居址を認めるが，一部を残し破壊される（12号住とする）
24	くもり 雨	午後作業不能　調査　調査
25	くもり 雨	主体部検出のため用地内の材木片付け　調査　調査
26	くもり 晴	主体部検出と，東溝調査のため宅地跡をブルトーザで排土　調査　南は盛土のため一時中止，測量 Ⅵの西側に方溝Ⅶとみるを検出
27	晴	主体検出のため排土作業 Ⅶとみる溝は荒地のため不明（宅地跡） ◦20号住検出　掘上げ，測量
28	雨	作業不能　遺物整理
29		日曜日休み

月・日	天候	日誌
6・30	晴終了時に豪雨	調査　東溝検出作業
7・1	晴	方形周溝墓Ⅳ東溝調査　遺物多し 主体部をさがす周溝内側の全面排土　方形周溝墓Ⅱの49年度調査部調査も行う
2	晴	調査　―東にのびる方形周溝Ⅷを検出―　完形坩数点出土 土坑10号検出掘上げ　測量　方溝Ⅱ検出困難
3	晴 くもり	方溝Ⅳ掘上げ　Ⅷ盛上まで掘上げ測量　方溝Ⅱは宅地跡で削られたか十分な調査不能 主体部検出できず Ⅲ調査区の調査にかかる。21号住検出
4	大雨	作業不能　周溝は全面満水となる　遺物整理
5	晴　終了時雨となる	満水の周溝に安全対策のためロープ張り Ⅲ調査区調査　22号・23号住検出掘上げ 21号・22号住の下にさらに住居址の存在を認める
6	雨 くもり	午前作業不能　遺物整理 午後排水作業
7	雨 くもり	午前作業不能　遺物整理 午後22号・23号住　測量　24号・25号住検出
8	くもり 晴	21号住掘上げ　測量　調査…住居址を切る溝検出 下部にある25号住調査。土坑11号，12号検出，掘上げ測量
9	晴	掘上げ測量　24号住を切る溝調査 Ⅲ調査区道路西側の草刈作業
10	雨	作業不能　遺物整理
11	朝雨 くもり	柱列址Ⅱ検出掘上げ測量　26号住・土坑13号検出
12	雨	作業不能　遺物整理
13		日曜日休み
14	くもり 晴	27号・28号住検出調査　調査掘上げ，測量　溝調査
15	朝雨 晴 あつい	掘上げ　29号住検出調査　溝調査…新しい耕作溝とわかる 農道西，ブルトーザー排土　（石を埋め，排水用のもの）
16	晴 あつい	掘上げ測量 グリッド設定　30号～36号住検出
17	晴 あつい	30号・31号・32号・33号・34号・35号住プラン検出　31号住掘上げ
18	晴 あつい	調査　33号住掘上げ　36号住検出　測量
19	晴 あつい	調査　30号・36号住掘上げ　測量　配列石―水路址Ⅰ検出
20	晴	日曜日作業休み　遺物整理　整理箱作り
21	晴	調査　34号住掘上げ　37号住検出調査　掘上げ　写真のみ ブルトーザーで方溝Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷを危険防止（水が溜ったまま）のため埋め，Ⅵ・Ⅷの未調査部の盛土排除
22	晴終了時大雷雨	調査　37号住掘上げ　34住・37住測量　方形周溝墓Ⅸ検出 Ⅴ調査区傾斜面の草刈，グリッド設定　―　調査
23	晴 猛暑	前夜豪雷雨で水びたし　午前中排水作業　土坑17号検出　掘上げ　測量 方溝Ⅵ・Ⅷの延長部調査
24	晴 くもり	調査Ⅷは旧秋葉街道にあたり，砂利層をはがし調査　傾斜面は耕作で荒れ調査断念 Ⅵは遺物多し
25	晴	調査をすすめる
26	晴	調査　Ⅷは旧水神橋吊橋架橋のため荒れており調査を終える。東は天竜川浸蝕で切られる。Ⅵは南と東とに分れる
27	晴 くもり	日曜日作業休み　遺物整理　整理箱作り

月・日	天候	日誌
7・28	晴 猛暑	Ⅵ調査区　宅地跡にテント移動。　道路中心杭No.19～20にトレンチ設定 （1～4）調査 方溝Ⅵ　調査続行 ― 南端部トレンチ調査
29	晴 あつい	Ⅴ調査区上段面をはじめる　ブルトーザ表土排除，調査　調査　T_2 拡張する （弥生遺物検出により） 調査……遺物多し
30	晴 猛暑	Ⅴ調査区　墓坑群検出 ― 調査　T_4に配石検出―水路址Ⅱ ◦東・南に分れる溝は天竜川浸蝕によって切られる　掘上げ ◦飯田高校クラブテント設営準備
31	晴 あつい	測量　方形周溝墓Ⅺの調査　方溝Ⅹ西溝検出　トレンチ地層断面調査 墓坑群調査　（◦飯田高校，阿智高校クラブ今日より参加）
8・1	晴 猛暑	方形周溝墓Ⅸ　Ⅹ西溝調査―南溝検出　墓坑群調査 土器集中坑検出調査　上部石組測量
2	晴 あつい	調査　調査　掘上げ，土坑18～24号 （阿智高校クラブ終わる）
3	晴 あつい	日曜日 ―般作業員休み　飯田高校クラブⅠ調査区北三角点調査　遺構なし
4	晴 あつい	方溝Ⅸ周溝掘上げ　方溝Ⅹ調査遺物多し，土器集中坑断面調査 Ⅲ調査区東道路沿いの水田調査にかかる
5	晴 あつい	周溝測量　方溝Ⅹ西溝掘上げ測量　38号・39号・40号・41号住検出
6	くもり 午後 雷雨	南溝調査　43号住検出　調査―38・39号住掘上げ測量
7	くもり 雨	Ⅳ調査区　危険防止のためトレンチ埋戻し作業 午前作業打切り　午後遺物整理　（飯田高校クラブ引上げ）
8	晴	埋戻し作業　方溝Ⅹ南側　41号住排水作業……調査 43号住　掘上げ　土坑25・26号検出掘上げ
9	晴 涼しい	方溝Ⅹ南掘上げ　43号住　土坑25・26号ともに測量 40号・41号住調査　42号住検出　方溝Ⅸ主体部検出作業
10	はれ くもり	掘り上げ　測量　掘上げ　3この主体部とみるが，1こは土坑14号(中世) 柱列址Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ検出調査　うち1こよりガラス玉を検出
11	晴	掘上げ　測量　測量　ガラス玉42こ（2こはこわれ）検出 ◦方溝Ⅹ南溝の埋戻し（危険防止）
12	晴	方溝Ⅸ測量……全調査区の調査完了 方溝Ⅹ南溝，Ⅵの延長部埋戻し（危険防止） 器材，テントの徹収，現場作業を終了する

現場調査後，工事中のパトロール，地層調査をなし，多量な出土遺物の整理，復元作業，遺構図の整理遺物実測，製図，原稿執筆に予定外の時間を要し，昭和51年10月に至ってようやく印刷にまわすこととなった。この間，遺構，遺物，地形，地質について各分野の方々の指導，助言，協力をえている。

III 調査結果

(I) 遺　構

清水遺跡で発掘調査した遺構は（図4.5.6.7.8）次のようである。

住居址

弥生時代後期　15住居址（2.4.5.7.8.9.10.11.15.20.25.28.29.37.38号）

古墳時代　14住居址（1.3.14.16.17.18.19.21.22.24.25.26.43号）

平安時代　14住居址（6.23.27.30.31.32.33.34.35.36.39.40.41.42号）

中　世　1住居址（13号）

柱列址4（I，II，III，IV）

方形周溝墓，方形周溝9（I，II，III，IV，V，VI，VIII，IX，X）

土坑26　土器集中坑1　水路址2

I調査区は天竜川に接す地帯で全面発掘を行なった。上層は洪水によって流され，また宅地跡で荒らされており，遺構検出には苦労した。方形周溝墓IVを主体にしてこれより分かれる方形周溝は天竜川の浸蝕によって削り採られているものもあり，宅地跡のコンクリートをブルトーザではがしての調査のため未確認のものもあり，住居址の検出も十分に行なわれなかったものもある。住居址は弥生後期，古墳時代中期を主体とし，平安時代，中世各1のみが検出されているが，用地外の墓地からその西にそれらの集落が存在したものとみられ，また中世の遺物は全面の上層にみられた。

II調査区は氾濫砂土の堆積で，遺構発見はできなかったが，氾濫前には遺構の存在が地形上予想されるところである。

III調査区は水神橋から弁天橋に通じる市道で東と西に切られており，昭和36年災害に天竜川洪水の流路となったところであり，部分的には荒れていた。全面発掘を行ない，道路東側では弥生後期，古墳時代中期の住居址が主体となり，西側では平安時代の住居址が主体となっており，西端部近くで方形周溝墓IXが発見されている。

IV調査区は，III調査区より一段低くなり，高距70cmを測り，この地帯の東半分は常時両側の水田より流れた水が溜っており，調査不能。西半分も雨が降れば水が溜るところで，トレンチ調査に終わる。かつては湿地帯または沼地状であったとみられた。平安期とみる水路址が発見されたが，水が溜り，部分的調査に終った。

V調査区は，一段高い高距4 mを測る段丘面にあり，段丘崖は緩い傾斜面の畑で，この部分はグリッド調査を行なうが，耕作で荒れており，遺構検出にはいたらなかった。段丘面は全面発掘により，方形周溝，中世墓坑群等を調査しているが，現国道152号より西に，弥生時代，古墳時代の集落が展開していたもの

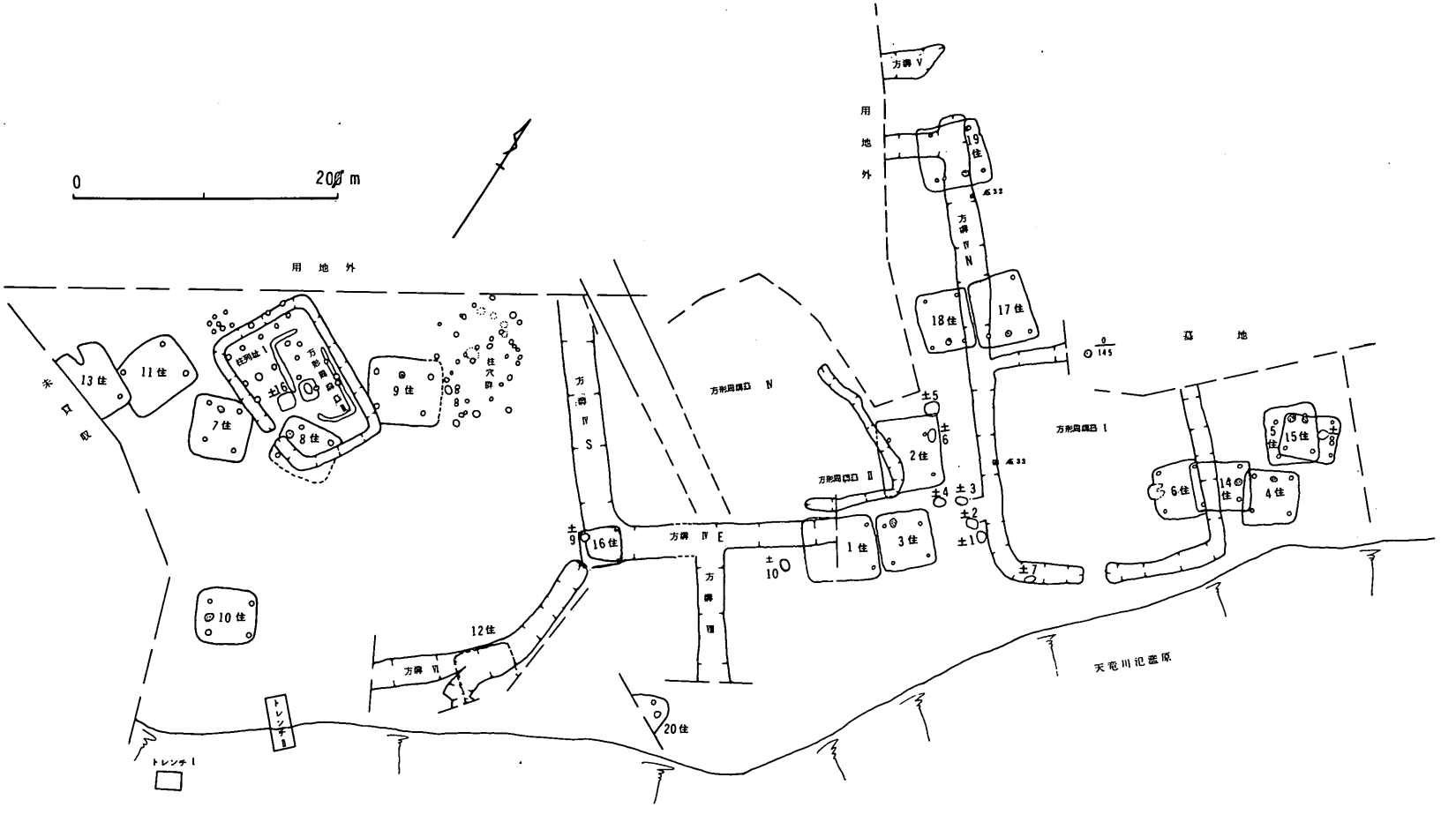


図4　清水遺跡第Ⅰ調査区遺構図

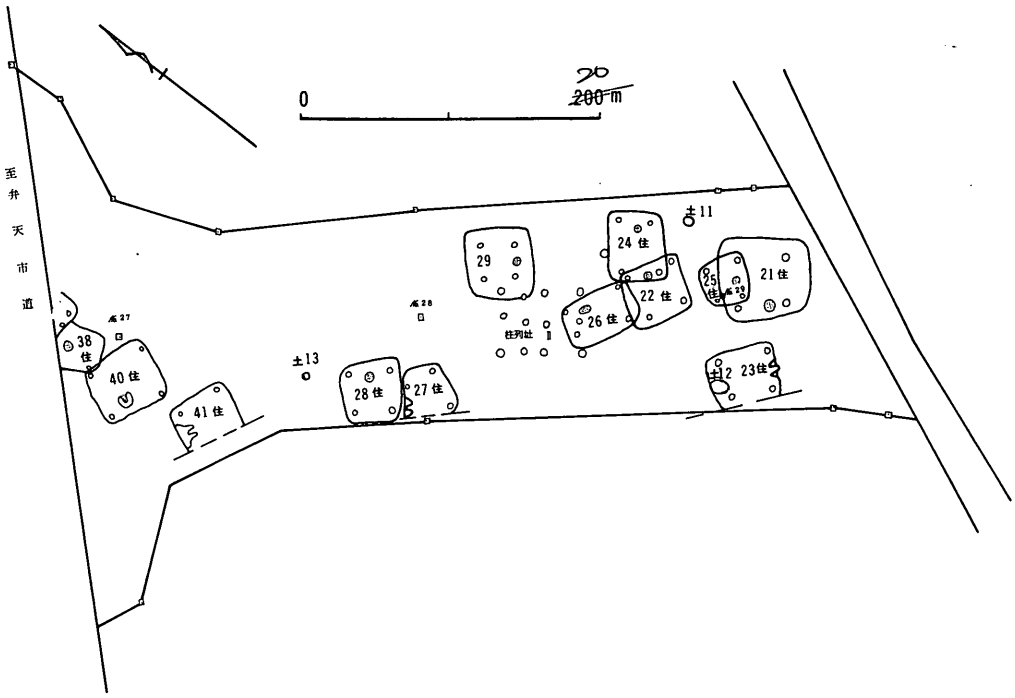


図５　清水遺跡第Ⅲ調査区東遺構図

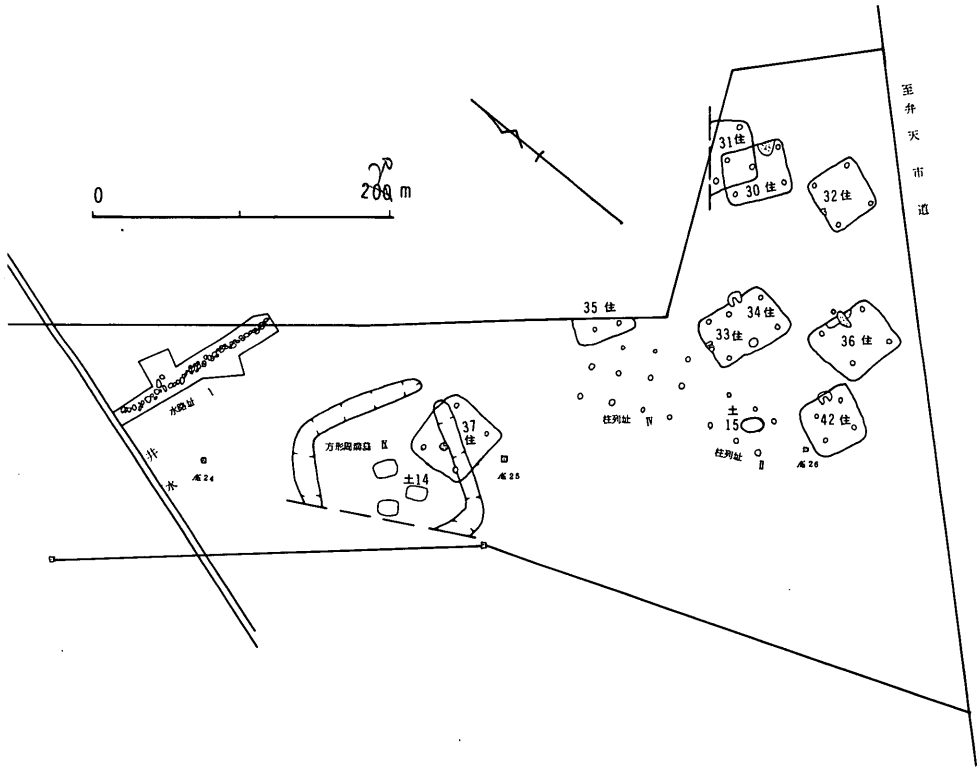


図６　清水遺跡第Ⅲ調査区西遺構図

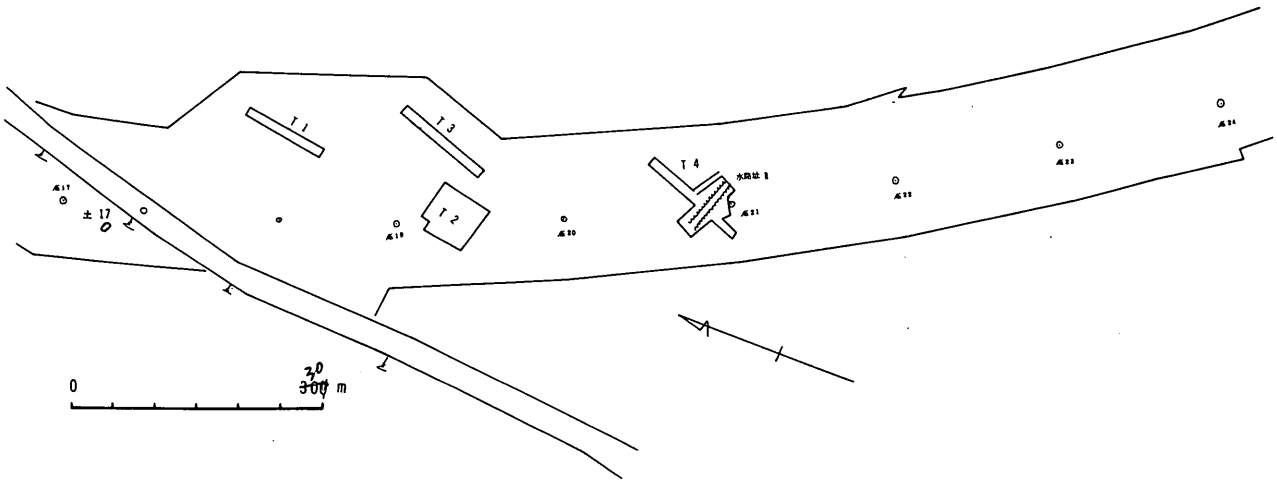


図７　清水遺跡第Ⅳ調査区遺構図

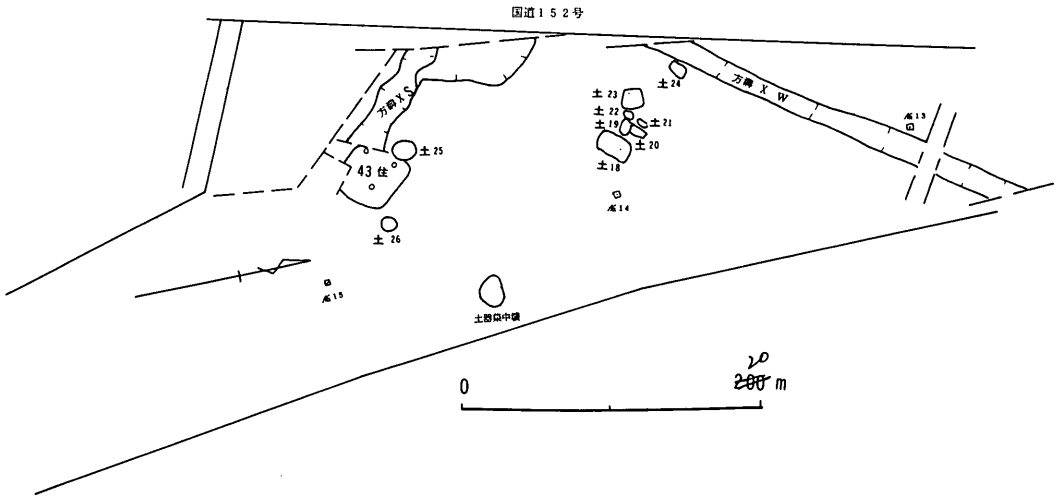


図８　清水遺跡第Ⅴ調査区遺構図

と予想された。

Ⅰ．住居址

（Ⅰ）　弥生時代後期

2号住居址（図９）

49年度調査で発見され，南北4.7 m×東西5.5 m の隅丸方形，15～20cm砂層に掘りこむ竪穴住居址である。方形周溝墓Ⅱの周溝コーナーが南東隅にあって南壁に沿って斜めに切っているため，主柱穴４こ中１こと主柱間にあるとみられる炉址を失っている。遺物（図54の１～７）の出土量は少なく，中島式と欠山式土器片と打製石包丁２この出土をみており，中島期の住居址とみられる。

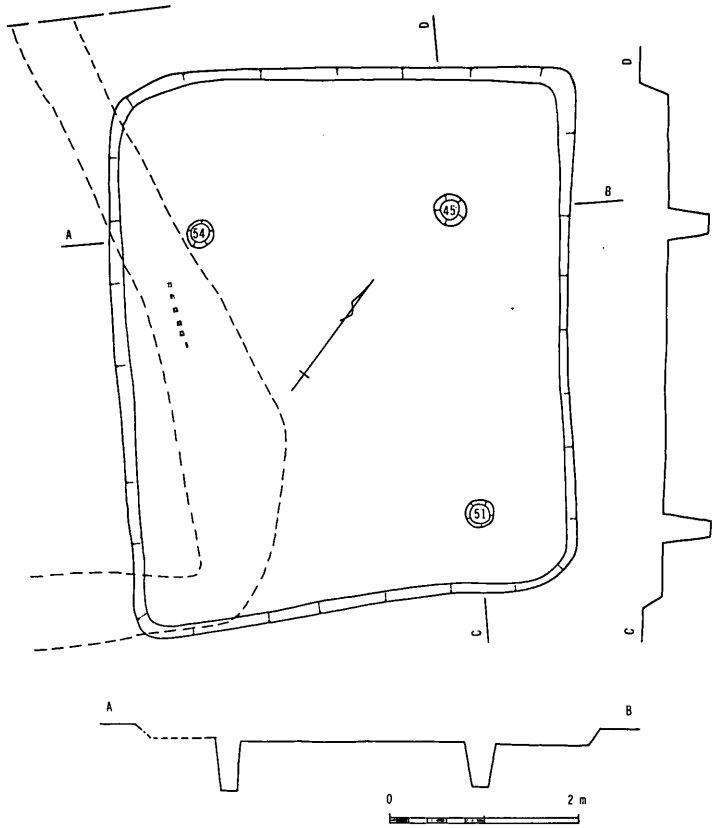


図９　清水２号住居址

4号住居址（図10）

方形周溝墓Ⅰの北周溝の北1.5 m にあり，14号住居址が，南側の上層にかかっている。南北4.1 m × 東西４ m の隅丸方形，砂層に20cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は暗黒色砂土，床面は黄褐色粘質土となって堅い。主柱穴は４こ整った配置にあり，西側の柱穴間の中央に浅い掘り凹みをもつ地床炉がある。遺物（図54の８～10）は少なく小片のみではっきりしないが，座光寺原式の要素をもつものがみられるが，中島式前半の時期と考えたい。

5号住居址（図10）

４号住居址の西１ m にあり，15号住居址の上に建替えられたものとみられる。南北3.95 m ×東西4.2m の隅丸方形，西壁で24cm，東壁で15cm砂層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ整った配置にあり西側柱穴間の中央部に南に枕石１こを置く浅い掘り凹みの地床炉をもつ。床面は堅く，15号住居址の上は張り床となっている。遺物（図54の11．12）は少なく，座光寺原式，欠山式土器片があり，中島式とみる小片数点があり，中島式前半期と考えられる住居址である。

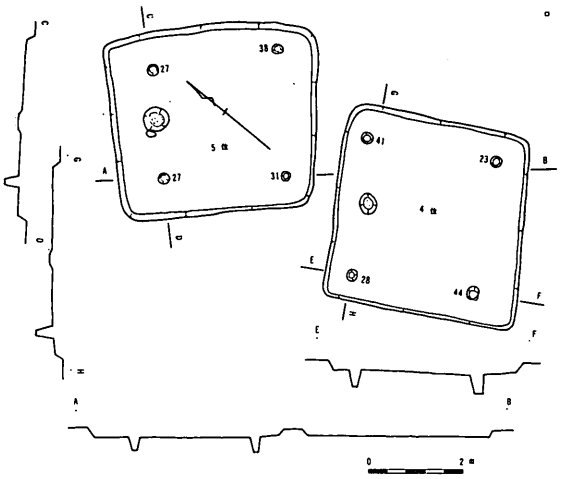


図10　清水４号・５号住居址

７号住居址（図11）

Ⅰ調査区の南側で，方形周溝墓Ⅲに北隅を切られており，壁の大部分は洪水によって削られ，僅かに壁の痕跡を残しているにすぎない。南北4.6ｍ × 東西4.32ｍの隅丸方形の竪穴住居址である。床面は堅く，僅かに残る壁と床面によって，そのプランを検出したものである。主柱穴は４こ，炉址は西側の柱穴間のやや中央より南に寄ってあり，浅い掘り凹みをなす地床炉である。遺物（図54の13～19）には中島式の甕形土器片，打製石包丁４こがあり，中島式後半の住居址である。

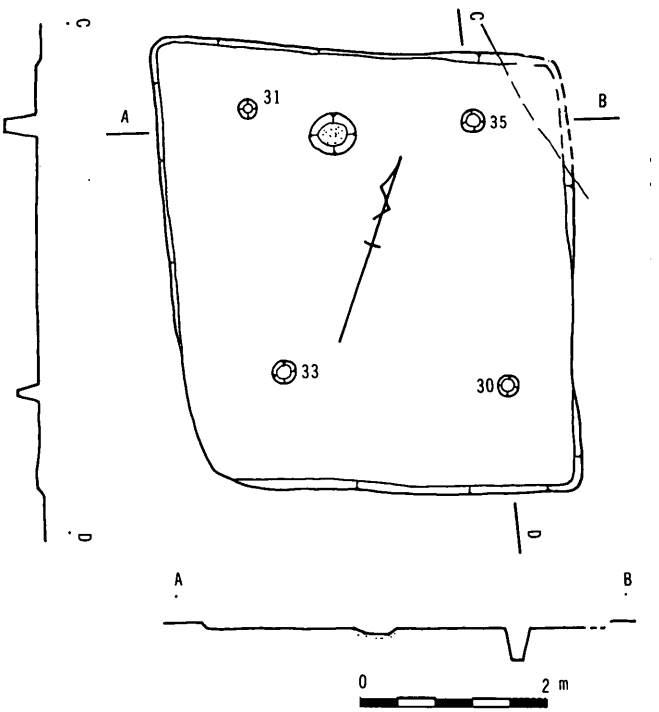


図11　清水７号住居址

８号住居址（図46）

南東２分の１は方形周溝墓Ⅲによって切られ，さらに南東端部は宅地跡の石垣で削りとられている。東西4.5ｍの隅丸方形をなし，北壁で20cm砂層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４ことみられ，炉址は西側の柱穴間の中央よりやや西に寄ってあり，両側に枕石を置く浅い掘り凹みの地床炉である。遺物（図54の20～27）には中島式，欠山式の土器片と打製石包丁２こがあり，土器出土量は少ないが，中島式前半期の住居址とみたい。

９号住居址（図12）

方形周溝墓Ⅲに南隅は切られている。表土15cmを排除したすぐ下は床面となり，グリッド調査の際，床面を掘りこむ誤ちも犯した。埋甕炉が発見され住居址の存在を確かめ，さらに周溝が発見され，そのプラ

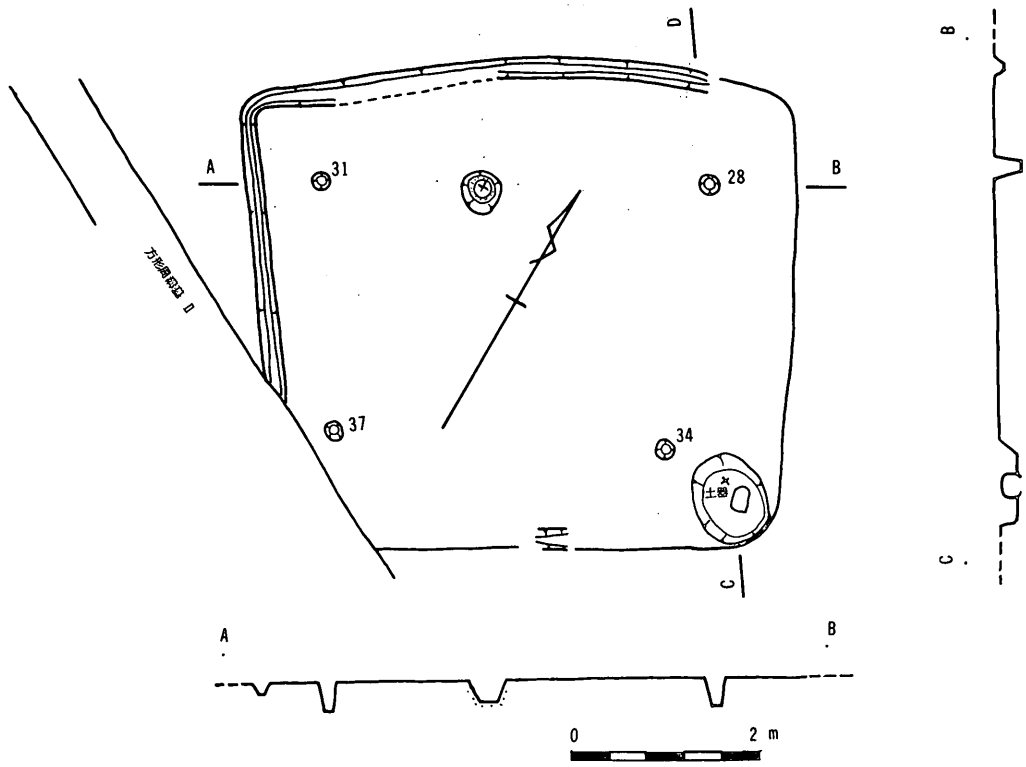


図12　清水９号住居址

を知ることができた。南北5.6ｍ×東西5.1ｍの隅丸方形，壁は洪水によって流されているが竪穴住居である。周溝は西・南と東は一部分を残しているが北側は削りとられたともみられる。主柱穴は４こ，炉址は西側の柱穴間の中央よりやや南に寄ってあり，埋甕炉である。埋甕はグリッド調査の際，破壊され十分な調査はできなかった。住居址の東隅に貯蔵穴が掘りこまれており，壺，高坏，器台片が一括出土している。遺物（図54の28～33）は，貯蔵穴出土の他に埋甕炉の台付甕があり，中島式前半期とみられるものである。

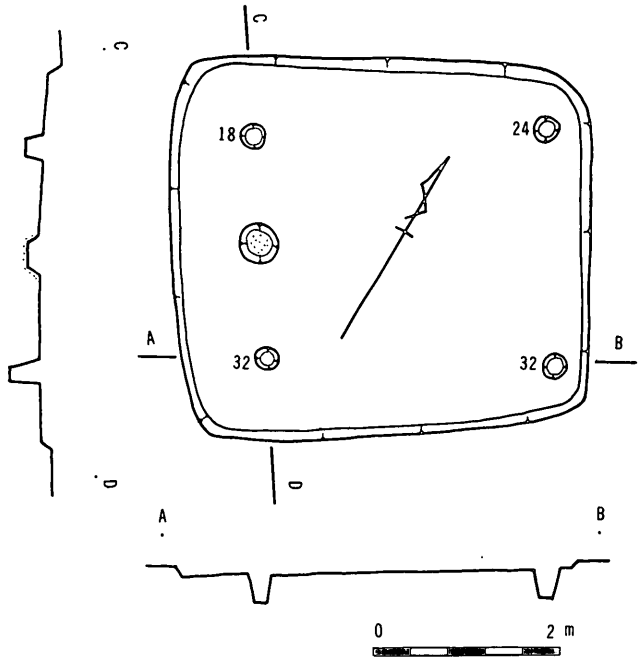


図13　清水10号住居址

10号住居址（図13）

段丘面の先端部にある。この先端は石垣があってさらに低位面となり，天竜川に接している。７号，８号住居址の南東9.5ｍにあり，その間は昭和36年災害の被害の大きかった所

で，方形周溝Ⅶとみるを一部検出したが，その確認はできず，この一帯の遺構は洪水により削り流されたと推定される。

本址は南北4 m × 東西4.5 mの隅丸方形，砂層に15cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は4こ整った配置にあり，西側柱穴間の中央に掘り凹みの地床炉をもつ。遺物（図54の34～37）は少なく座光寺原式土器片，打製石包丁片1こと数点の小片をみたにすぎない。

上層より図87の58，59の用途不明の青銅器と石製模造品の有孔円板の出土をみているが，上層にあったとみられる遺構は，地層が荒れており，十分な調査はできなかった。

11号住居址（図14）

方形周溝墓Ⅲの西1.8 mにあり，南の一部分は13号住居址で切られる。南北5.5 m×東西4.6 mの不整形な隅丸方形，北壁で24cm，南壁で15cm砂層を掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅いが，ブドウ畑になっていたため耕作の荒れは甚だしい。主柱穴は3こ発見されているが4こ，炉址は発見できなかった。遺物（図55の1～3）は少なく，高坏片，打製石包丁片1，この他中島式の小破片数点がみられ，中島式の住居址とみたものである。

15号住居址（図15）

5号住居址の下にやや東によって造られ，5号址は建替えとみられ，張り床となっている。南北3.4 m×東西4.2 mの隅丸方形，5号址よりさらに14cm砂層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ，炉址は北側の柱穴間の中央より西に寄ってあり，掘り凹みの地床炉である。東壁中央部から住居址の3分の1入った所に平安期の土坑8号が掘りこまれている。遺物（図55の4～9）には欠

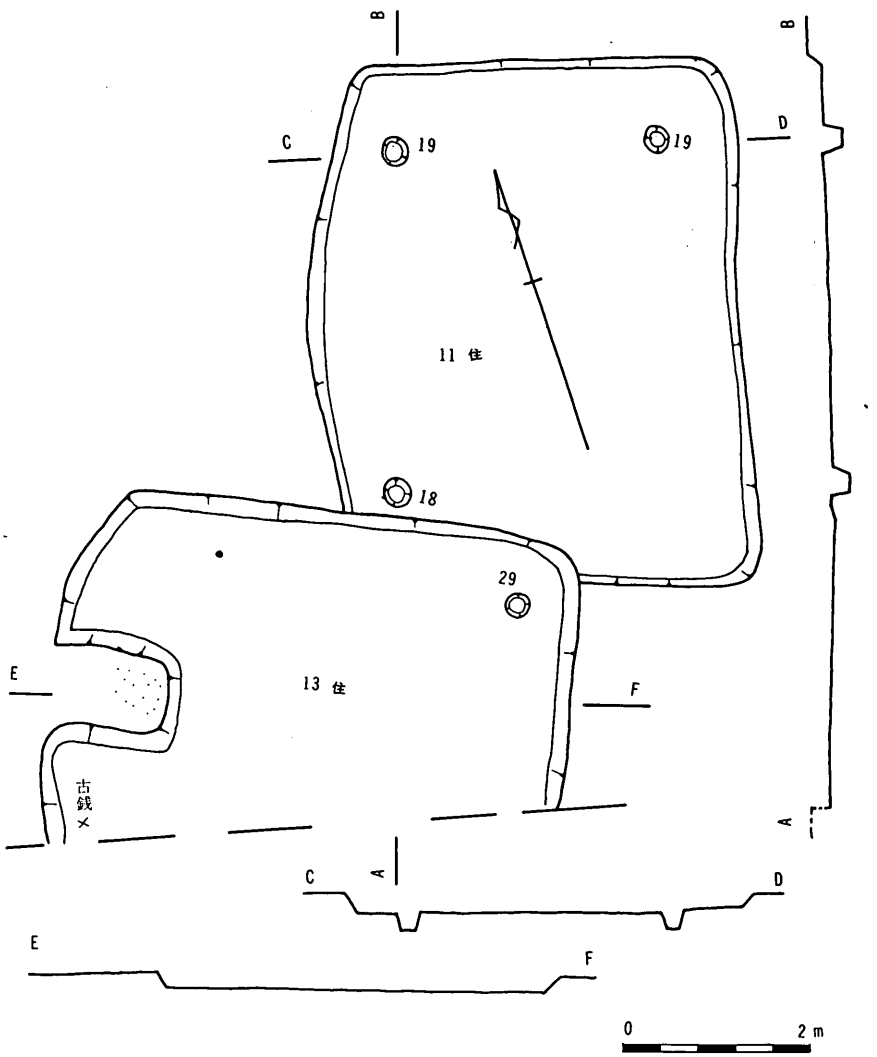
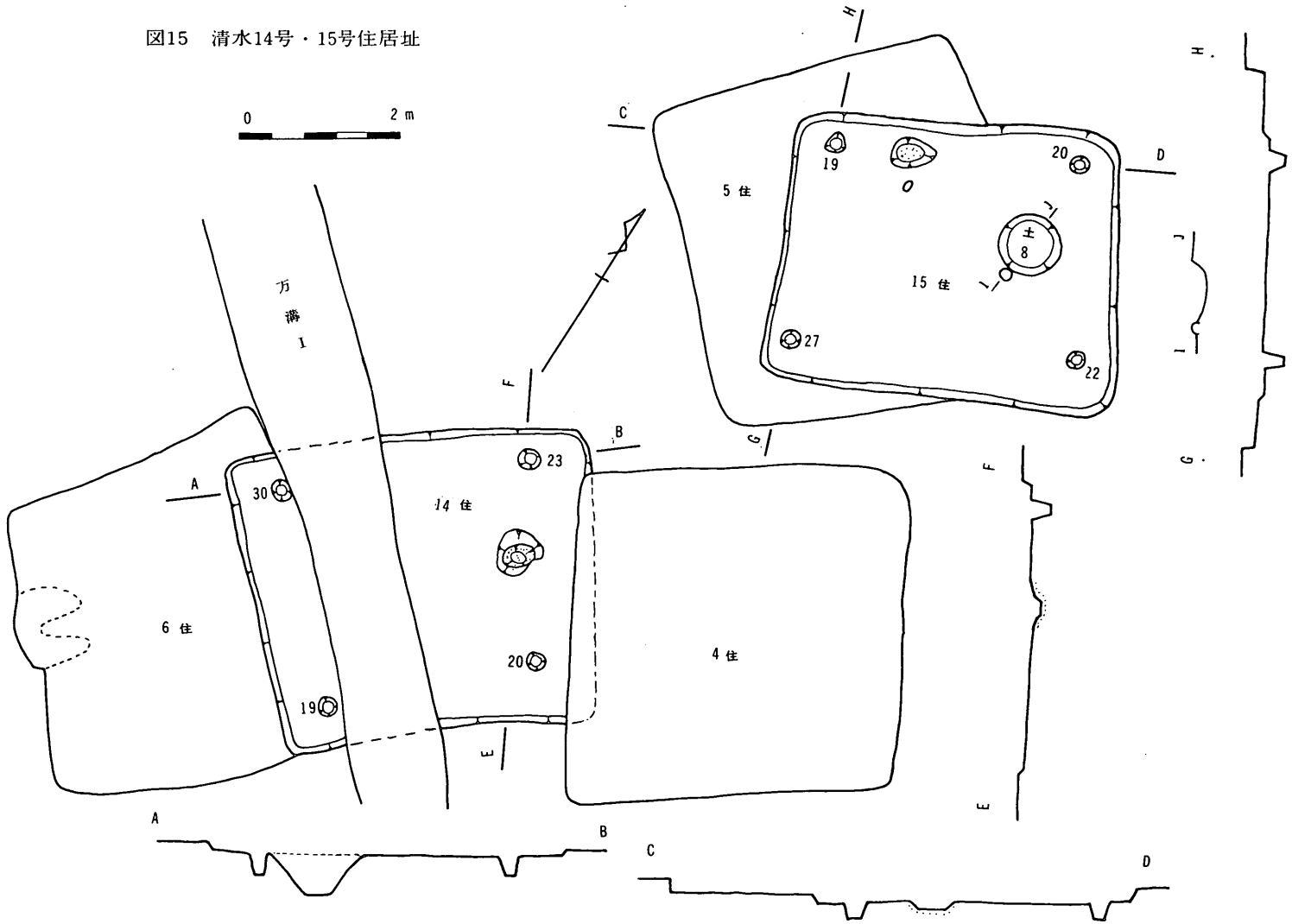


図14　清水11号・13号住居址

図15　清水14号・15号住居址



山式の台付甕，座光寺原式の要素を含む土器もみられるが，中島式前半の住居址とみたい。

20号住居址（図47）

Ⅰ調査区の東端部にあって方形周溝墓Ⅳの排水のためブルトーザで土盛を切って排土の跡に発見され，南側の土盛のため僅かに北東コーナーを検出し，柱穴1こと貯蔵穴とみる掘りこみを調査したにすぎない。そのため住居址の規模は不明であるが，砂層を15～20㎝掘りこむ竪穴住居址である。遺物（図55の10～15）には甕，高坏，器台等の土器片と，磨製石包丁，打製石包丁各1があり，中島式後半の住居址とみられる。

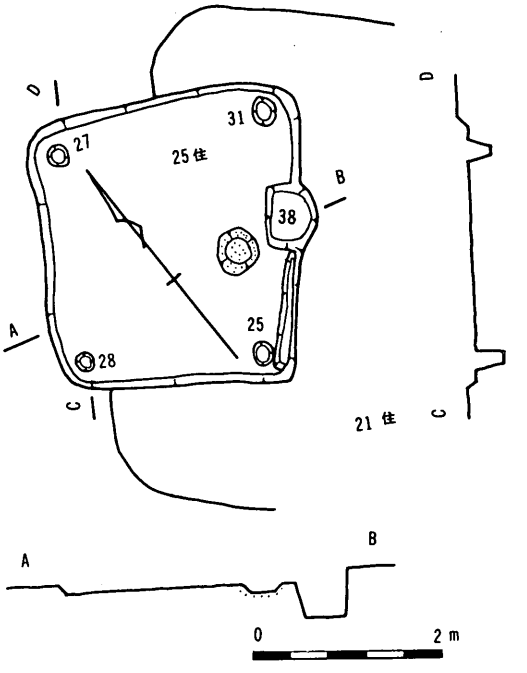


図16　清水25号住居址

25号住居址（図16）

Ⅲ調査区，21号住居址の西側3分の1にかかって，その下層に造られている。南北3ｍ×東西2.9ｍと小型の隅丸方形，砂層に10～15㎝掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ，炉址は東側柱穴間の中央よりやや南西にあって，浅い掘り凹みの地床炉である。東壁のほぼ中央部にえぐりこんで貯蔵穴が掘られ，それより南に壁に沿ってこの部分のみ周溝が掘られている。遺物（図56の1～7）には中島式の壺形，座光寺原式とみる甕形片，山中式とみる器台脚部があり，石包丁とみる横刃形石器，大形の不定形打石斧がある。中島式前半期の住居址とみたい。

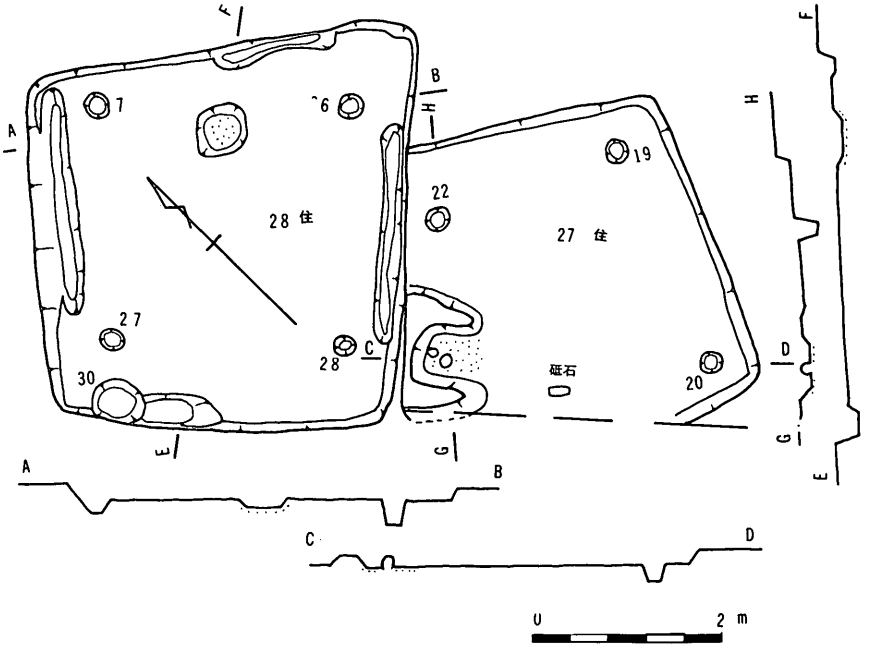


図17　清水27号・28号住居址

28号住居址（図17）

Ⅲ調査区，No28道路中心杭より西3.2ｍにあり，南は道路境界に，東は27号住居址に接している。南北4.1×東西3.95ｍの不整形な隅丸方形，砂層を20㎝掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は4こ，北側の柱穴間のほぼ中央に掘

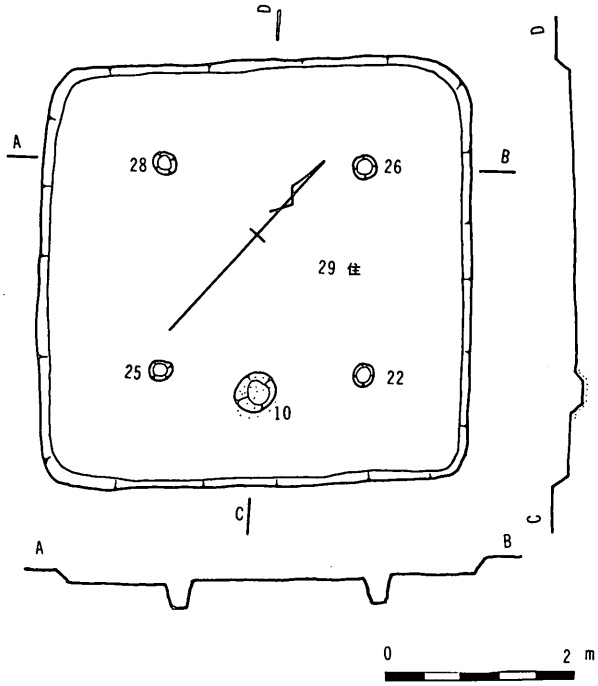


図18　清水29号住居址

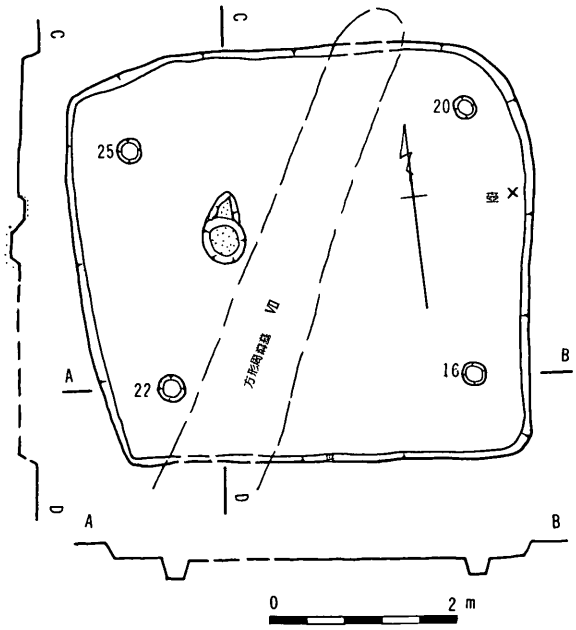


図19　清水37号住居址

り凹みの地床炉がある。南壁の中央より西に壁に沿って貯蔵穴とみる２この掘りこみが並ぶ。東，北，西の壁に沿って幅の広い周溝が各独立して付く。遺物（図55の16～26）には壺，甕，坩，高坏形土器があり，石器に有肩扇状形石器，石鍬，靴形石器がある。座光寺原式の要素もみられ，欠山式を含み，土師器ともみられる土器もあって，その時期を決めかねるが，中島式前半に位置づく住居址と考えたい。

29号住居址（図18）

No.28の道路中心杭の東４ｍにあり，南側には柱列址IIの柱穴が２こ入りこんでいる。南北4.1ｍ×東西4.4ｍの隅丸方形，15～20cm砂層を掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく，主柱穴は４こ整った配置にある。炉址は東側柱穴間のほぼ中間にあり，浅い掘り凹みの地床炉である。遺物（図55の27･28）は僅少で，中島式前半とみる土器片数点と打製石包丁１この出土をみたにすぎない。

37号住居址（図19）

道路中心杭No.25の西1.5ｍにあり，中央部を北から南に方形周溝墓IXが斜めに切っている。南北4.36ｍ × 東西4.8ｍの隅丸方形，砂層を20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴は４こ。炉址は住居址を南北方向に三等分する西側のほぼ中央部にあり，地床炉である。その位置は飯田地方の弥生後期の一般例と異なる。北側には炉址に付いて三角形の焼土のマウンドをもつ。遺物（図56の８．９24）には東海地方の壺・甕形土器，紡錘車があり，中島式の小片数点が出土している。中島式前半に位置づくものとみられる。

38号住居址（図20）

道路中心杭No.27の西１ｍにあり，西隅は飯田市道によって切られ，また北隅は39号住居

址で切られている。南北推定３ｍ×東西３ｍの隅丸方形，15～20cm砂層を掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４ことみるが，２こ発見されている。炉址は北側柱穴間の中間より南に寄ってあり，掘り凹みの地床炉である。南西隅には壁に沿って貯蔵穴が掘りこまれ，完形に近い甕形土器の出土をみている。遺物（図56の10～23）には座光寺原式とみる甕形土器が多くみられ，その期の最終末とみられる。石器には，打石斧，打製石包丁，小形の有肩扇状石器，磨製石鏃の未製品等がある。

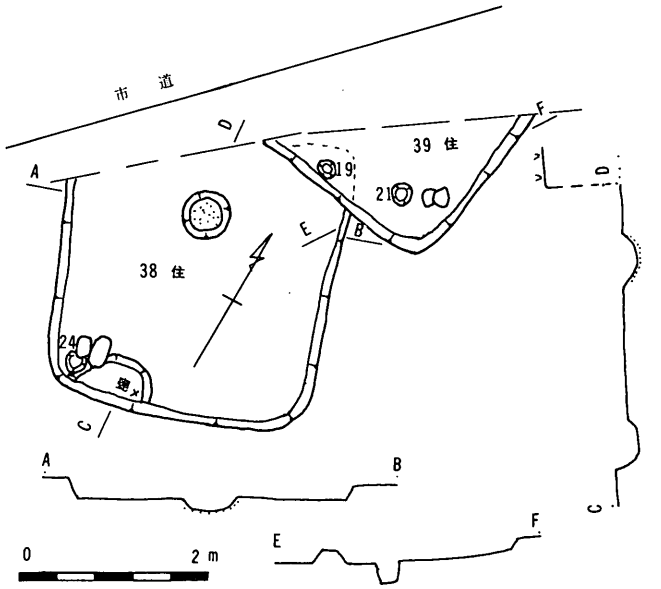


図20　清水38号・39号住居址

（２）　古墳時代

１号住居址（図21）

昭和49年度調査区にあり，北は３号住居址に隣接する。調査時点では北約２分の１の調査に終わり，南側は50年度調査区になっていたが，橋脚工事によって削られ調査不能となった。住居址の西３分の１の下部には方形周溝墓Ⅳの東周溝があり，調査時点では連日の寒波による上解けのため泥濘となり，周溝検出にはいたらなかった。東西5.1ｍ，隅丸方形，西壁で30cm，東壁で20cm砂層を掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４ことみるが，北側の柱穴２こが発見されているのみであり，炉址も発見されていない。遺物（図57の１～８）には土師器の壺，甕，高坏，碗形土器があり，中島式の甕形土器片，打製石包丁１この出土もみている。古墳時代中期初頭の住居址とみたい。

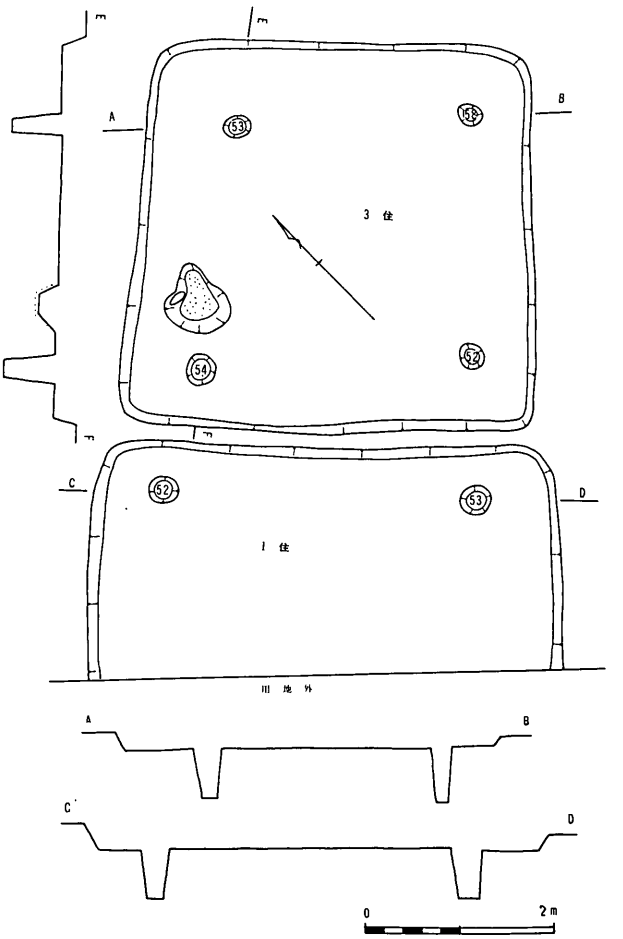


図21　清水１号・３号住居址

3号住居址（図21）

昭和49年度調査区にあり，南は1号住居址に隣接して並ぶ。西側3分の1の下部には方形周溝墓Ⅳ東周溝が切っているが，1号住居址と同様調査時点では検出できず，橋脚工事のために破壊されている。南北4.15m × 東西4.3mの隅丸方形，西壁で20cm，東壁で10cm砂層を掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ。炉址は西側柱穴間の南に寄ってあり，西側に枕石1こを置き20cmの深さに掘りこむ地床炉である。遺物（57の9～12）には土師器の複合口縁をもつ壺と高坏形土器があり，有肩扇状形石器，打製石包丁各1の出土をみている。古墳時代前期末か中期初頭の住居址と考えたい。

12号住居址（図4参照）

方形周溝Ⅵの調査区域のほぼ中間部に発見されたが，周溝調査が先行し，住居址の存在を認めたのは，その西壁と北西コーナーの検出によるもので，すでに周溝を掘りこんだ後であり，住居址の規模は把握できなかった。遺物（図57の13～19）には土師器の高坏が多く，砥石1この出土をみているが，方形周溝Ⅵの遺物の混入も考えられるが，和泉式期の住居址とみられる。

14号住居址（図15）

方形周溝墓Ⅰの北溝の上に南側はあり，周溝調査後に発見され，南端は6号住居址の下にあり，北東に4号住居址があり，4号住居址の調査が先行したため北壁は切られ，砂層のためその検出には苦労した。南北4.1m × 東西3.75mの不整形な隅丸方形白砂を10cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は4こ，炉址は北東側の柱穴間のほぼ中央にあり，二重の掘り凹みをなす地床炉である。遺物（図57の20．21）には土師器の坩，高坏があり，古墳時代中期のものである。

16号住居址（図22）

方形周溝墓Ⅳの南東コーナーに大部分がかかり，その上層にある。南北2.8m×東西2.6mの小型の隅丸方形，砂層を10～15cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ，炉址は発見されず，その存在も疑がわれるものである。遺物（57の22～31）には土師器の複合口縁をもつ壺，台付甕，器台脚部があり，絵画の描かれたとみる土器片もみられ，古墳時代前期末，または中期初頭とみる特殊な住居址と考えられる。

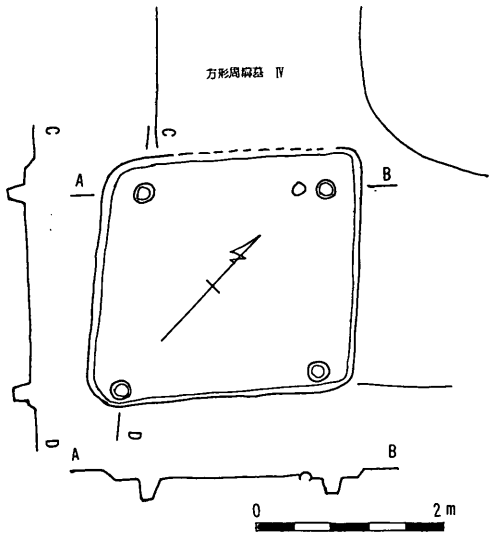


図22　清水16号住居址

17号住居址（図23）

$\frac{0}{145}$基点の西3.8mにあり，南側4分の1は方形周溝墓Ⅳ北周の上層にあって，南は18号住居址に隣接する。南北4.4m×東西5.2mの隅丸長方形，砂層を20～25cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は3こ発見されているが，西隅は貯蔵穴があり，柱穴はそれと一緒に掘られているとみる。炉址は東側の柱穴間の中央部にあり，北に枕石1こを置く地床炉である。遺物（58の1～7）には土師器の甕，高坏があり，古墳時代中期の住居址である。

18号住居址（図23）

北側５分の１は方形周溝墓Ⅳ北周溝の上層にあって北に17号住居址が隣接している。南北3.8ｍ×東西4.5ｍの隅丸方形，砂層を20ｍ掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は４こ，整った配置にあり，炉址は東側柱穴間の中央部にあり，浅い掘り凹みの地床炉である。遺物（図58の８～14）には土師器の高坏，台付甕があり，小形の磨石斧と打石斧の出土をみている。古墳時代前期の要素をもつ住居址とみたい。

19号住居址（図24）

方形周溝墓Ⅳの北周溝が西に折れるコーナーの上層にある。南北4.9ｍ×東西4.9ｍの隅丸方形，砂層を15～20㎝掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴は４こ，東側の柱穴間の中央より北に寄って炉址が掘りこまれ，南に枕石１こを置く地床炉がある。遺物（図58の15～18）には，土師器の口縁部の短かい甕があり，小形敲打器，有肩扇状形石器の出土をみている。土器からして古墳時代中期初頭の住居址と考えたい。

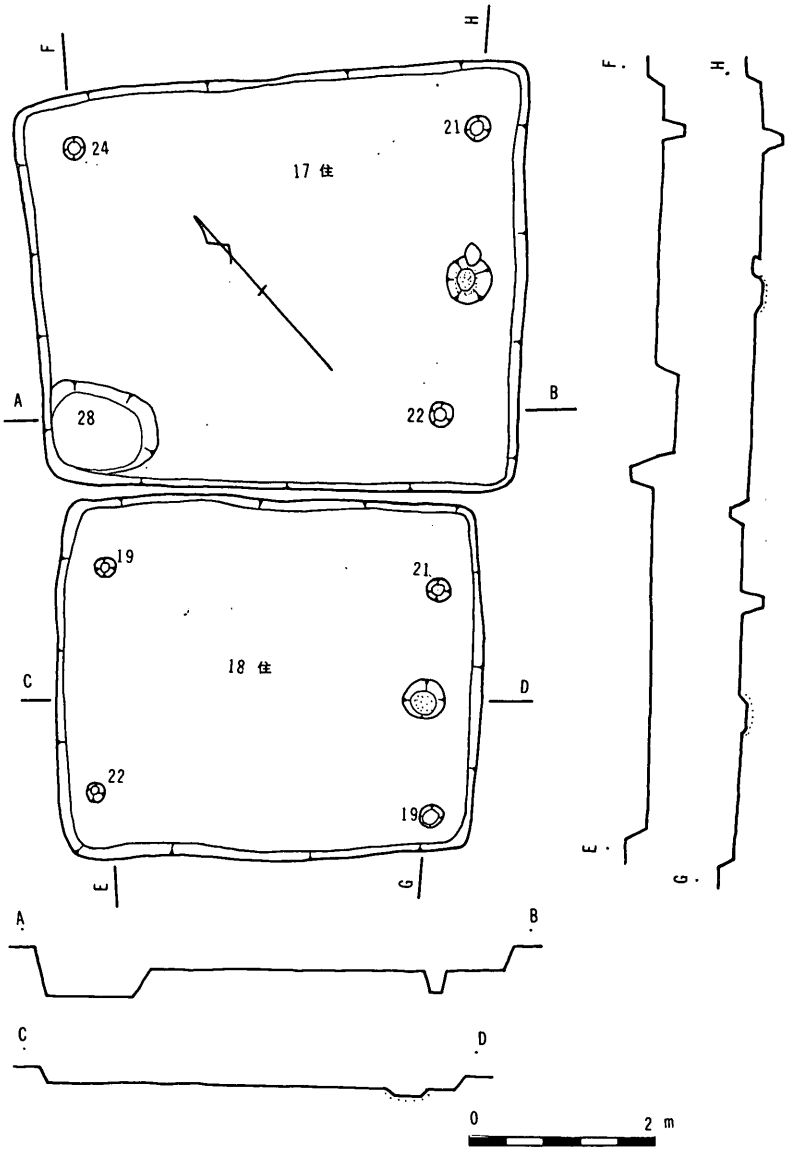


図23　清水17号・18号住居址

21号住居址（図25）

No.29道路中心杭が住居址の西壁にあり，西側の下層には弥生時代後期の25号住居址があって，この部分は張り床となっている。南北5.2ｍ×東西6ｍの隅丸方形砂層を20㎝掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ西に寄って配置され，炉址は南側の柱穴間の中央より東に寄ってあり，浅い掘り凹みの地床炉である。遺物（図59の１～７）には土師器の甕・甑，椀形土器があり，肩部に刻印をもつ甕があり，甑は挿入した把手をもち，注目すべきものがある。ガラス小玉（図87の61）１この出土をみている。古墳時代中期後半とみる住居址である。

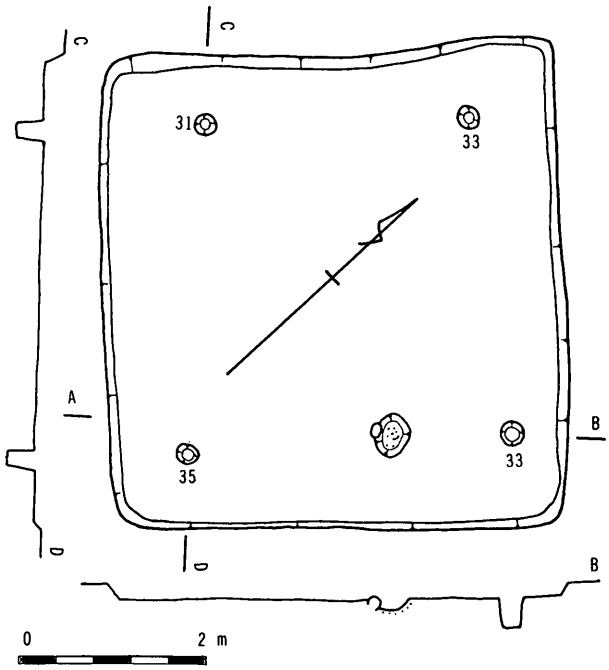


図24　清水19号住居址

22号住居址（図25）

No.29道路中心杭の西２ｍにあり，西側の一部は26号住居址に切られているが，本址調査後に検出されたものである。北側約３分の１の下層には24号住居址があって，この部分は張り床となる。南北4.8ｍ × 東西4.5ｍの隅丸方形，砂層を15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ，炉址は住居の中央部より北に寄ってあり，浅い掘り凹みの地床炉で，その東に接して灰溜めの掘りこみがあり，この中より完形の甕の出土をみている。遺物（図58の19～21）には土師器の甕，高坏形土器があり，古墳時代中期の住居址である。

24号住居址（図26）

22号住居址の北側約３分の１にかかってその下層にあり，南西は26号住居址と接しあう。南北4.65ｍ × 東西3.9ｍの隅丸長方形，砂層を10cm掘りこむ竪穴住居址である。住居址のほぼ中央を東から西に耕作による新しい溝が斜めに切って，この部分は荒れている。主柱穴は４こ，炉址は東壁の中央部から僅かに入った位置にあり，浅い掘り凹みの地床炉である。遺物は土師器の小破片のみで，石包丁（図58の22）１この出土をみている。古墳時代中期前半の住居址とみたい。

26号住居址（図27）

22号住居址の西の一部を切り，北は24号住居址に接す。南北3.1ｍ×東西5.1ｍの隅丸長方形，砂層を15cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ，北側の柱穴間の中央より西に寄って灰溜めが掘りこまれ，その南に接して炉址がある。周囲を床面より高くし，南側には３この石を並べ楕円形をなす掘り凹みの地床炉である。床面には焼土がみられ，南東隅には粘土が円く敷かれていた。遺物（図58の23・24）には須恵器と土師器の立上がり口縁をもつ壺形土器の出土をみており，古墳時代中期後半とみる住居址である。

43号住居址（図50）

Ⅴ調査区，No.15道路中心杭の北西5.5ｍにあり，方形周溝Ⅹ南周溝の上層に発見された。周溝調査によって発見されたため西壁は削りとられ，また南隅は盛土のため調査不能，北隅は土坑25号が掘りこまれている。南北4.1ｍ × 東西４ｍの隅丸方形，黄褐色粘質土を20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く張り床となり，主柱穴は４こ，炉址は発見にいたらなかった。遺物（図59の８～12）には，土師器の甕，台付甕，坩，小形甑があり，古墳時代中期前半とみられる。

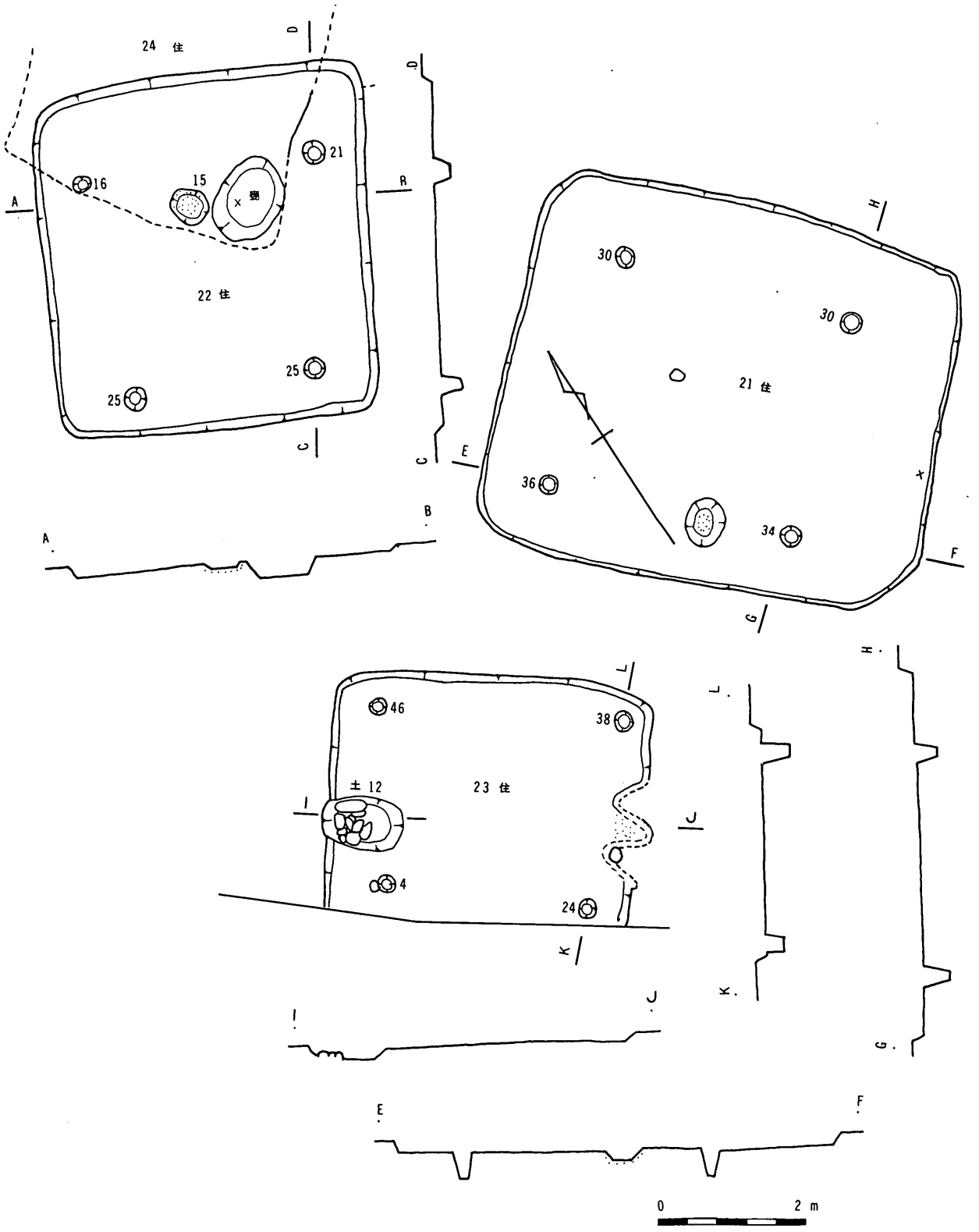


図25　清水21号・22号・23号住居址

（3） 平安時代

6号住居址（図44）

方形周溝墓Ⅰの北周溝に北壁はかかり，またその下層に14号住居址が掘りこまれている。周溝調査を先行したため北壁を切って住居址の存在をたしかめたものである。南北推定3.5m×東西4.2mの隅丸方形，砂層に10cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ，南壁の中央部にカマドが付くが，橋脚工事の際上部を削られているが，粘土カマドである。カマドの両側から周溝が壁に沿ってめぐらされている。床面は砂層であるが堅い。遺物（図60の1．2．23）は少なく須恵器と土師器があり，小片が多く，鉄器片—釘の出土をみている。図60の1の須恵器の坏は地方窯産であり，2は覆土出土の土師器で周溝墓Ⅰに関連するものとみられる。平安時代後半の住居址である。

23号住居址（図25）

No.29道路中心杭の南3.5mにあり，西壁を切る土坑12号が住居址内に掘りこまれている。南壁は用地外となっているが，南北推定3.5m×東西4.2mの隅丸長方形，主柱穴は4こ，カマドは東壁のほぼ中央部に付くが，耕作によって崩されている。遺物（図60の3～6）には国分式の土師器と須恵器があり，平安時代前半とみる。磨製石包丁の出土をみているが混入

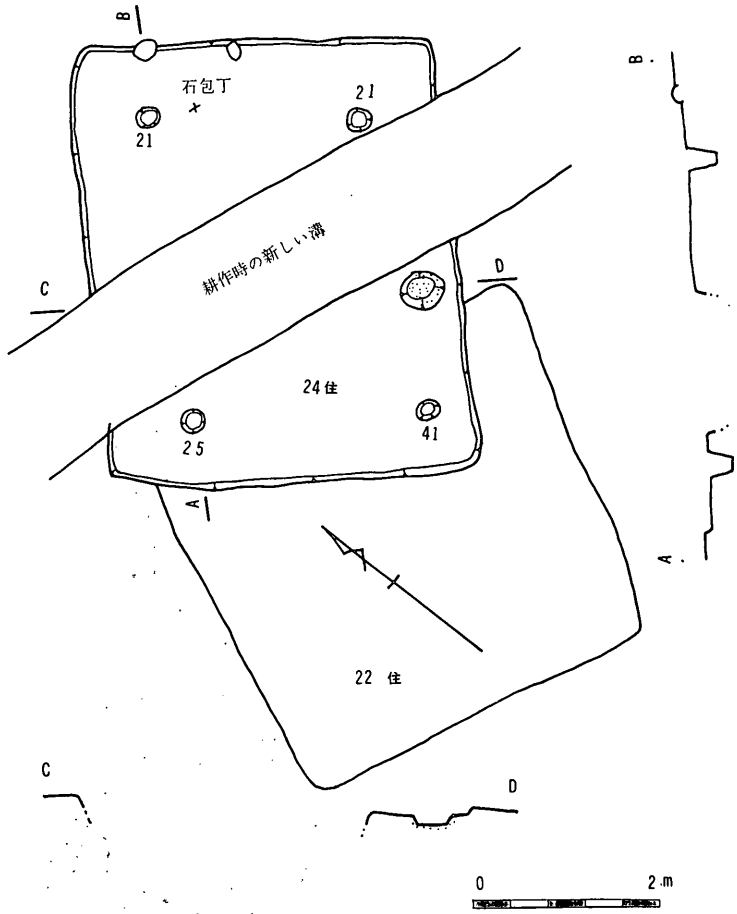


図26　清水24号住居址

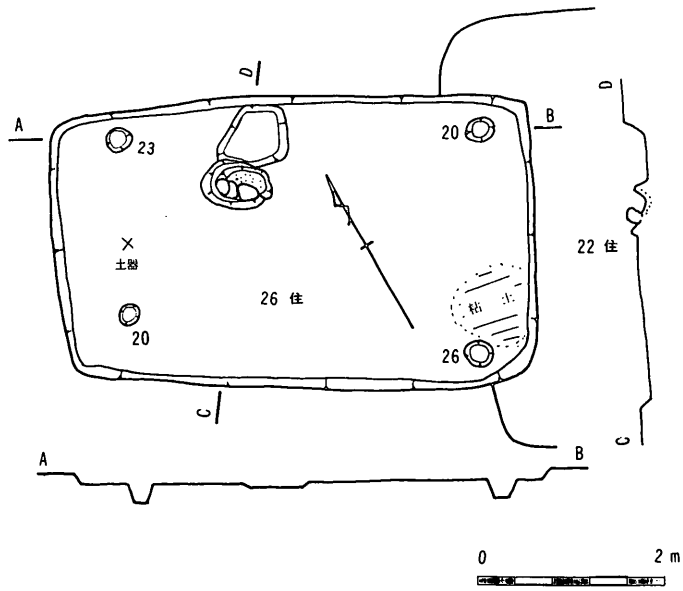


図27　清水26号住居址

品である。

27号住居址（図17）

No.28道路中心杭の南３ｍにあり，西は28号住居址と隣接する。南側は用地外となり，南西部は調査不能となる。南北3.6ｍ×東西4.6ｍの不整形な隅丸方形，砂層を15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４ことみられ，カマドは西壁の中央部より南に寄ってあり，粘土カマドで支脚石を残す。遺物（図60の７～9）には国分式の大形甕，須恵器の坏と大形砥石の出土をみており，平安時代前半の住居址とみられる。

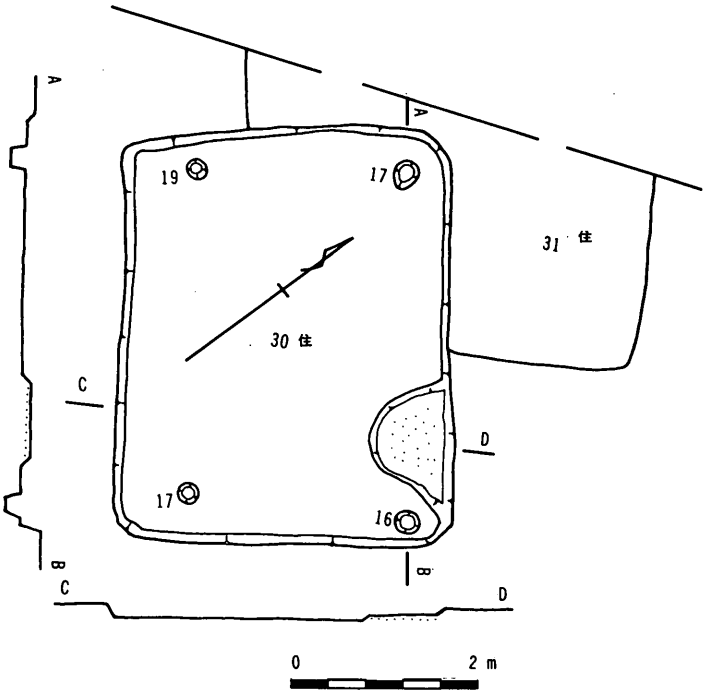


図28　清水30号住居址

30号住居址（図28）

Ⅲ調査区西，No.26道路中心杭の北東17ｍにあり，31号住居址の上にかかっている。南北3.6ｍ×東西4.7ｍの隅丸長方形，砂層に10～15cm掘りこむ竪穴住居址であり，31号址にかかる部分は張り床となっている。主柱穴は４こ，北壁の東に寄ってヘッツイを置いたとみる焼土のマウンドをもつ。遺物（図60の10～14）にはロクロ成形による土師器の坏台付皿，灰釉陶器，須恵器の坏等があり，国分式の甕の破片が多くみられる。平安時代末期の住居址とみる。

31号住居址（図29）

Ⅲ調査区の北端部にあり，西３分の１は用地外となる。南側は30号址の下部６cmにある。南北4.2ｍ×東西推定3.5ｍ位の隅丸長方形，砂層を20cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４ことみる。カマドは南東隅近くにあり，上部は30号址に削られ不明であるが，焼土が多くその形状からカマドと認められた。遺物（図60の15～19）には国分式の甕，須恵器の坏，灰釉陶器の瓶があり，鉄鋌の大塊２こと土師器，須恵器片の多くの出土をみている。平安時代後半の住居址である。

32号住居址（図29）

30号住居址の東１ｍにあり，かつて送電線の柱跡があり，部分的に荒れていた。南北3.8ｍ×東西3.4ｍの隅丸方形，砂層を25cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ，カマドは西壁のほぼ中央部に付くが，その痕跡を残すのみであった。遺物（図61の１～９）には国分式の甕，須恵器の坏，坏蓋があり，須恵質の紡錘車とみる（９）がある。平安時代前半とみる住居址である。上層より磨石鏃１こが出土しており，混入品である。

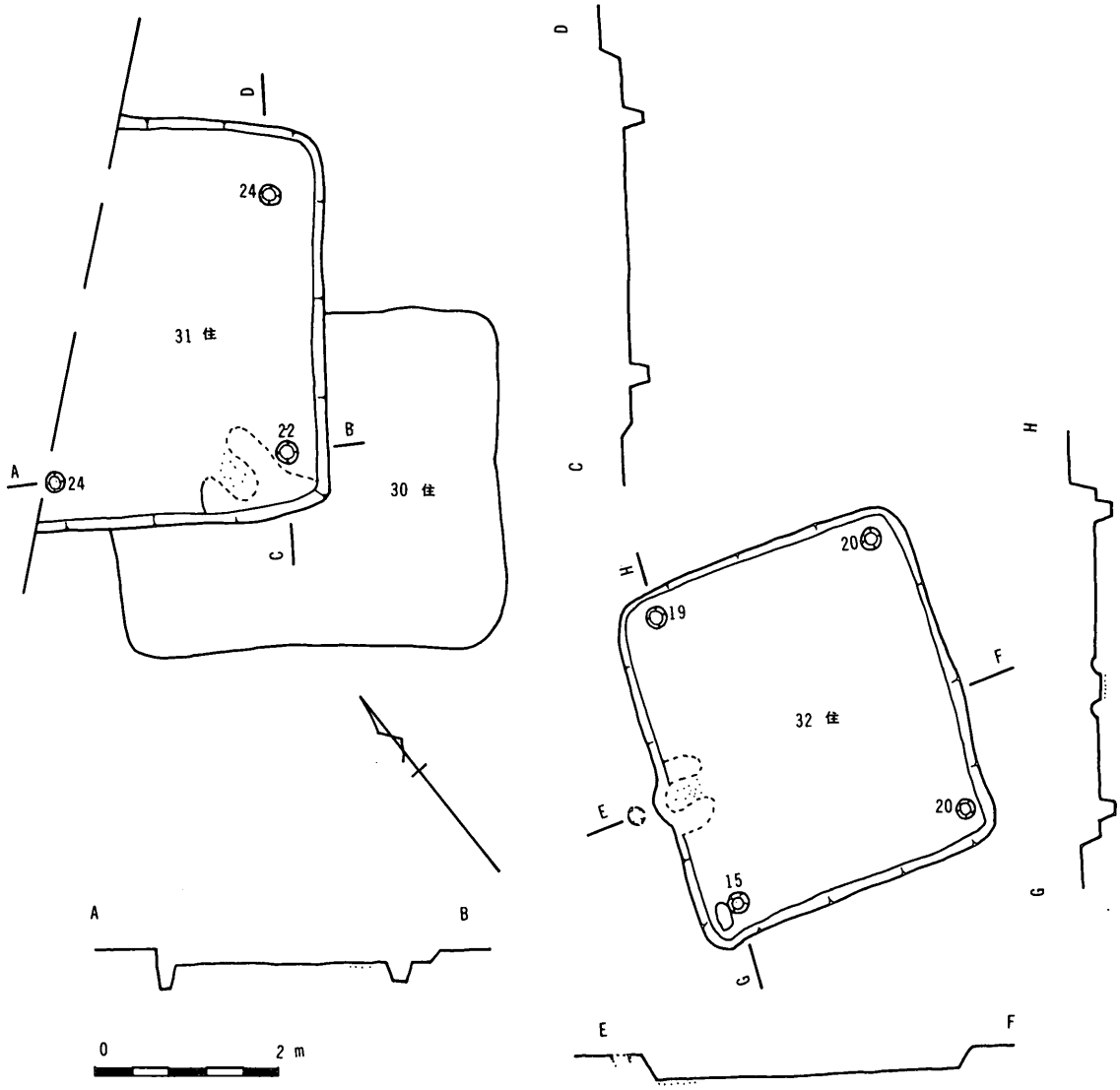


図29　清水31号・32号住居址

33号．34号住居址（図30）

№26道路中心杭の北東7.3ｍにあり，東1.3ｍに36号住居址がある。２住居址は同時に検出され，切りあい関係は34号が新しいとみて，それより調査を進めたが，北壁は共通し，南壁は僅かに34号は外部にふくらみをみるのみで，床面は同一面にある。カマドは33号が西壁に，34号が北壁につくが，柱穴の配置，また遺物の出土状況から34号は33号の建替えとみるが妥当であり，同一住居址ともみられる。

南北33号で3.65ｍ，34号で3.75ｍ×東西5.4ｍの隅丸長方形，砂層を30cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は４ことみられ，支柱穴２こがある。カマドは33号が粘土カマド，34号は石組粘土カマドかとみられたが，カマドたち割調査を始めたところ豪雨にあい調査不能となってしまった。34号カマド南西前に灰溜が掘りこまれ，南壁中央部から20cm入って貯蔵穴とみる掘りこみがある。

遺物は33号（図61の10～16）には土師器の甕，台付碗，須恵器の坏，灰釉陶器の碗の出土をみ，34号（図62）はカマド周辺に多く，量は多い。土師器の甕，鍔釜，ロクロ成形の坏，灰釉陶器の碗，皿，耳皿，がある。33号．34号ともに平安時代末期の住居址である。

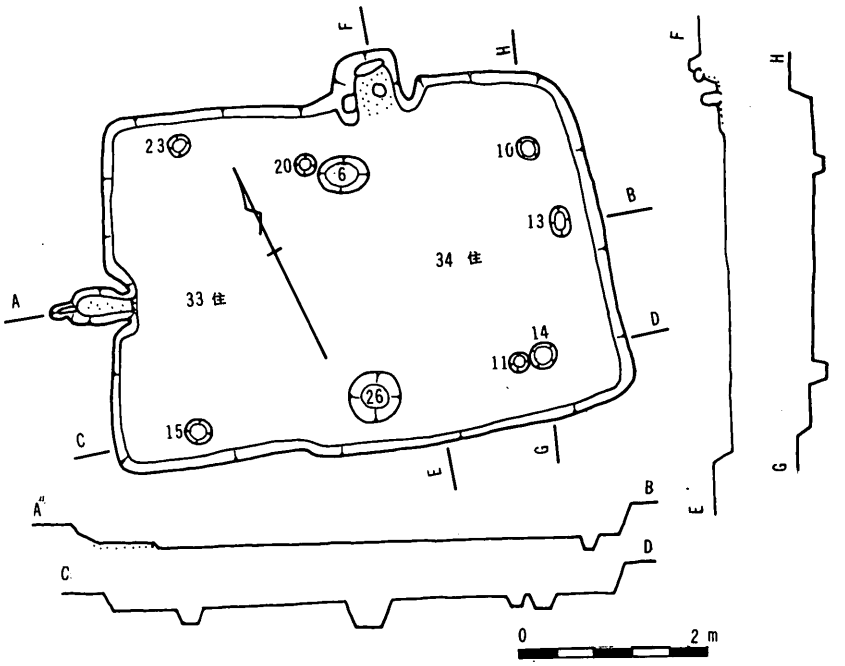


図30　清水33号・34号住居址

35号住居址（図31）

No.25道路中心杭の東9.3ｍにあり，南は柱列址Ⅳに接する。北側は用地外となり，一部分の調査でその規模を知ることはできない。東西４ｍの隅丸方形，黄褐色粘質土を30cm掘りこむ竪穴住居址である。遺物は少なく図61の17の須恵器の坏の他，土師器の甕，糸切底をもつ皿の小片がみられ平安時代後半とみる住居址である。

36号住居址（図32）

No.26道路中心杭の北東5.5ｍにあり，南西１ｍに42号住居址がある。南北4.4ｍ×東西4.4ｍの隅丸方形，砂層を15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は４こ，カマドは北壁の中央部に付き両側に平らなマウンドが付く。煙道孔を残している。カマドのたち割り調査は豪雨によって不能となったが，粘土カマドである。遺物（図61の18～24）には土師器では国分式の甕，ロクロ成形の甕，坏があり，須恵器の坏蓋・坏，灰釉陶器の碗があり，平安時代後半の新しい時期の住居址とみられる。

39号住居址（図20）

No.27道路中心杭の北西3.3ｍにあり，38号住居址の一部を切っている。北西は飯田市道のため調査不能。隅丸方形，表土下80cmに床面があり，砂層を10cm掘りこむ竪穴住居址である。遺物（図64の１～８）には土師器の国分式の甕，内面黒色のロクロ成形による坏，須恵器の坏，灰釉陶器の碗があり，平安時代後半の新しい時期の住居址である。２の壺底部の灰釉は表層出土で，青磁碗片と伴出しており，中世のものとみられる。

40号住居址（図33）

No.27道路中心杭の南0.5ｍにあり，南１ｍに41号住居址，北西コーナーは38号住居址にかかってその上層にある。38号址の調査が先行し，一部壁を削り，また，41号址検出の際に南壁の一部が削られ，はっきりしない所もある。南北4.2ｍ×東西4.65ｍの隅丸方形，砂層を10～20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主

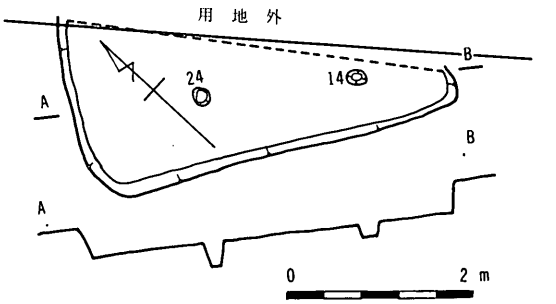


図31　清水35号住居址

柱穴は４こ，支柱穴１こがあり，住居の中央部から南西に大きく寄ってカマドがつく。馬蹄形状にマウンドをめぐらし北に焚口をもつ粘土カマドであり，その位置は飯田地方では数少ない例である。遺物（図60の20～22）には土師器の国分式の甕，須恵器の坏蓋，灰釉陶器の碗があり，平安時代後半の住居址である。

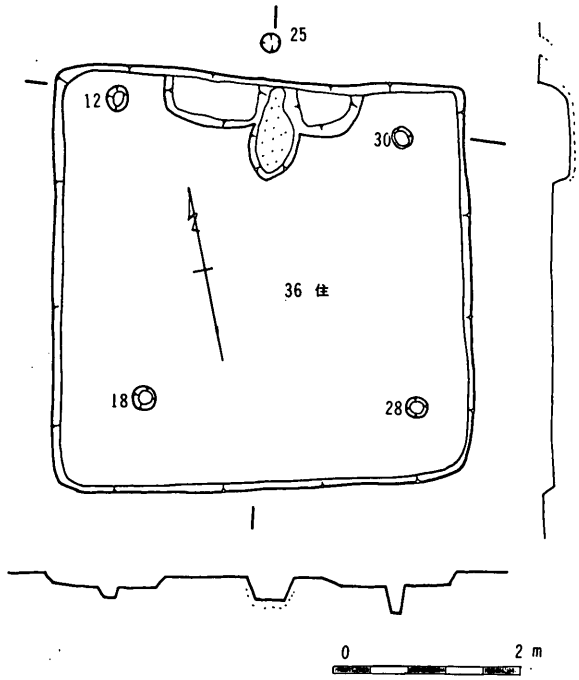


図32　清水36号住居址

41号住居址（図34）

No.27道路中心杭の南６ｍにあり，北１ｍに40号住居址がある。南は用地外となり，４分の１は未調査となる。東西4.1ｍ，南北推定４ｍの隅丸方形，30cm前後砂層から黄色粘質土に掘りこむ竪穴住居址である。床面，壁面は極めて堅く主柱穴は４ことみる。カマドは西壁のほぼ中央につき，石組粘土カマドで保存の良いものである。遺物（図63）はカマド周辺に多くみられ，土師器の甕では器壁の厚い粗雑な輪積み作りと国分式の器壁の薄いものとがあり，刻書のある甕がある。鍔釜，ロクロ成形の台付碗，小形皿もみられる。須恵器には甕，坏があり，灰釉陶器は多く，碗，皿，段皿がある。土錘，皇宋通宝１の出土もみる。平安時代末期の住居址とみられる。

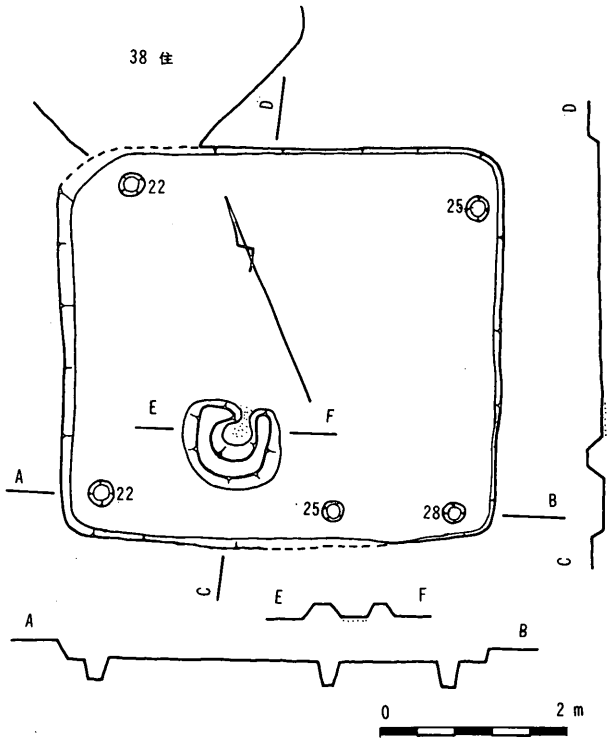


図33　清水40号住居址

42号住居址（図35）

No.26道路中心杭の東0.5ｍにあり，南北3.7ｍ×東西3.7ｍの隅丸方形，砂層に30cm前後掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は４こ，カマドは北壁の中央部に外部に張り出して造られている粘土カマドであり，煙道も完全に残す保存の良いものであるが，たち割り調査は豪雨のため不能となった。住居址のほぼ中央部に土坑状の掘りこみがあるが，その性格は把握できなかった。遺物（図64の９～15）は，土師器では小形甕が主体とみられ，ロクロ成形の甕もある。須恵器は小破片のみで，内外面にタタキ目をもつ甕片もみられる。灰釉陶器には広口壺，碗がある。平安時代後半の住居址である。

（4） 中　世

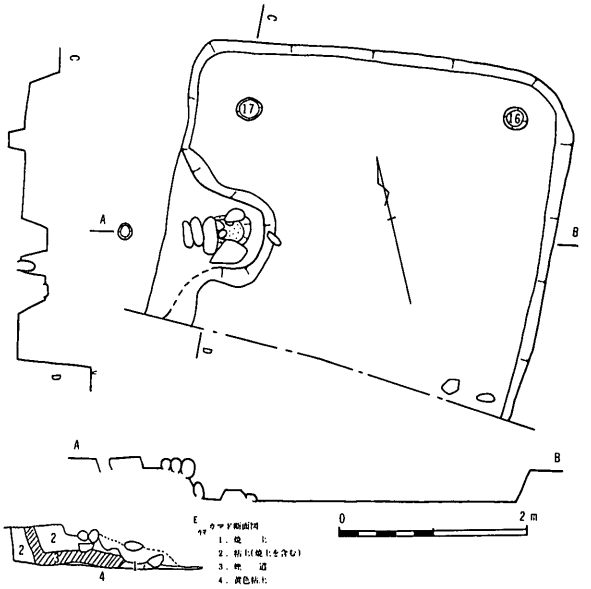


図34　清水41号住居址

13号住居址（図14）

Ⅰ調査区の南西端にあって３分の１は用地外となる。ブドウ畑のため耕作で荒らされていた。北は11号住居址を僅かに切る。東西5.5ｍ，南北推定４ｍ余となる不整形の隅丸方形，砂層を20cm掘りこむ竪穴住居である。主柱穴は１こ発見されたのみで，はっきりしない。西壁の中央部とみる位置にヘッツイを置いたとみるマウンドが付く。遺物には紹聖元宝（図87の65）があり広口壺，すり鉢，皿，オロシ皿等（図66の13～17）の中世後半の陶器片の出土をみている。

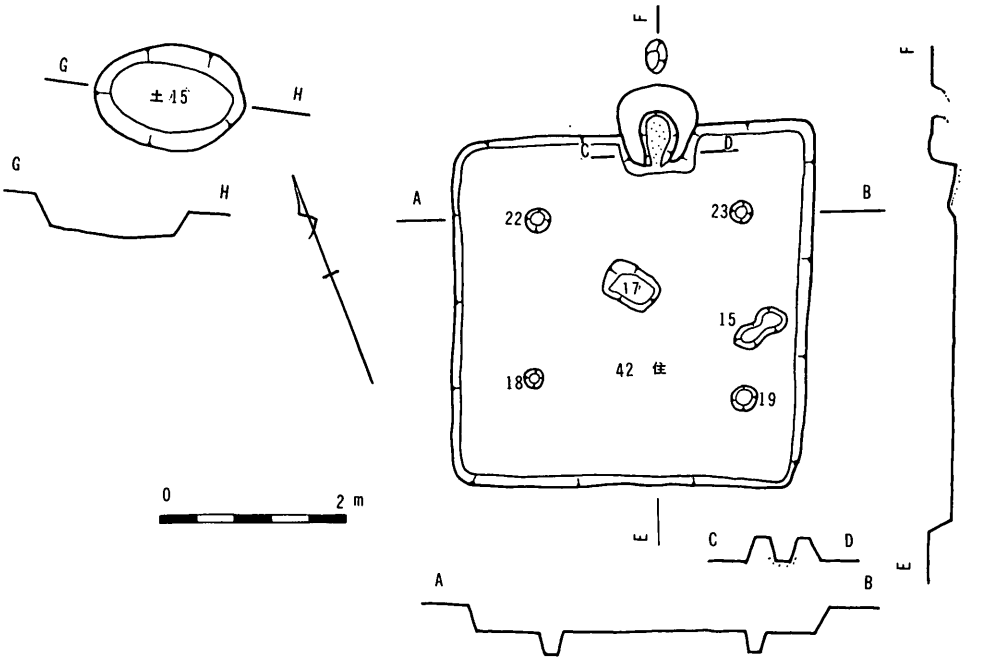


図35　清水42号住居址・土坑15号

2　柱列址・柱穴群

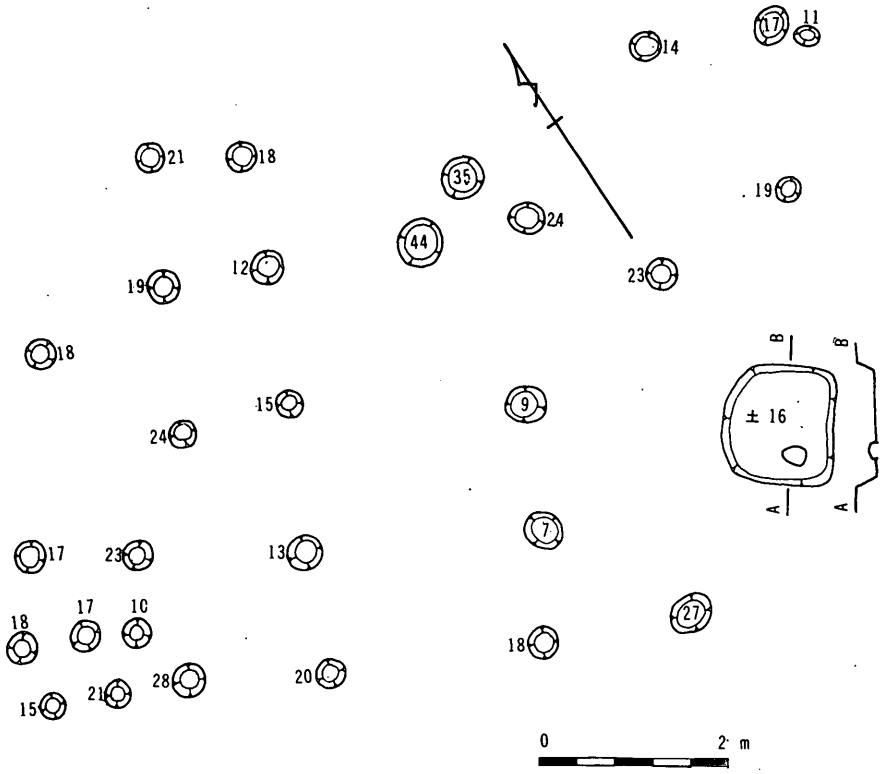


図36　清水柱列址Ⅰ・土坑16号

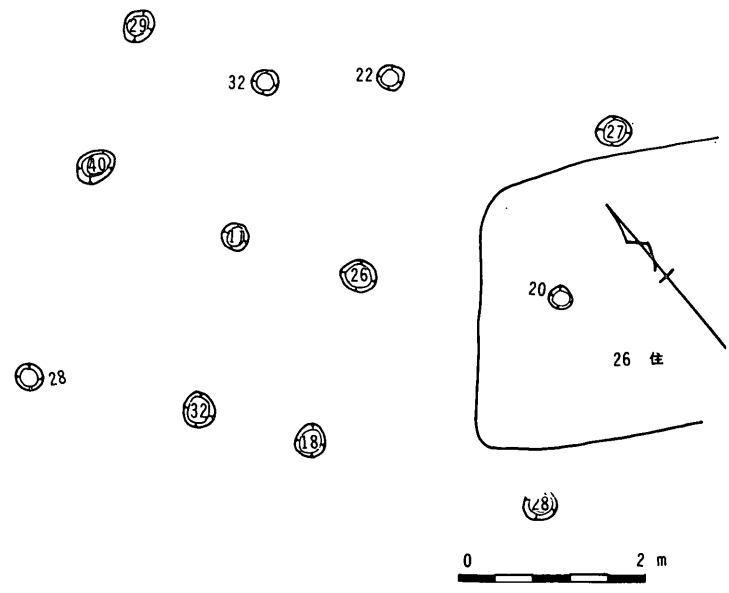


図37　清水柱列址Ⅱ

柱列址Ⅰ（図36）

Ⅰ調査区の方形周溝墓Ⅲの西２分の１にあり，周溝墓調査の際発見されたため柱穴を崩してしまったものもあり，その調査は不十分なものとなった。柱穴は砂層から黄色粘質土層に掘りこまれ，柱列の配置はいくつかのパートをなすとみられ，また，建替，拡張もなされたとみるが十分な把握にいたらなかった。遺物（図65の１）には柱穴内から出土した，良質な蓋坏の坏部があり，その他古墳時代中期の土師器片の出土をみており，この期の柱列址と考えられる。

柱列址Ⅱ（図37）

No.28道路中心杭の5.5m東に並び，２間×２間，または２間×３間の柱列址とみられる。柱穴は砂層に掘りこむもので，その配置はやや不規則である。遺物（図65の２～４）には古墳時代中期の土師器の甕，高坏があり，同時期の土師片は多い。柱列址の東に並ぶ住居址と関連する高庫造りの倉庫跡と考えられるものである。

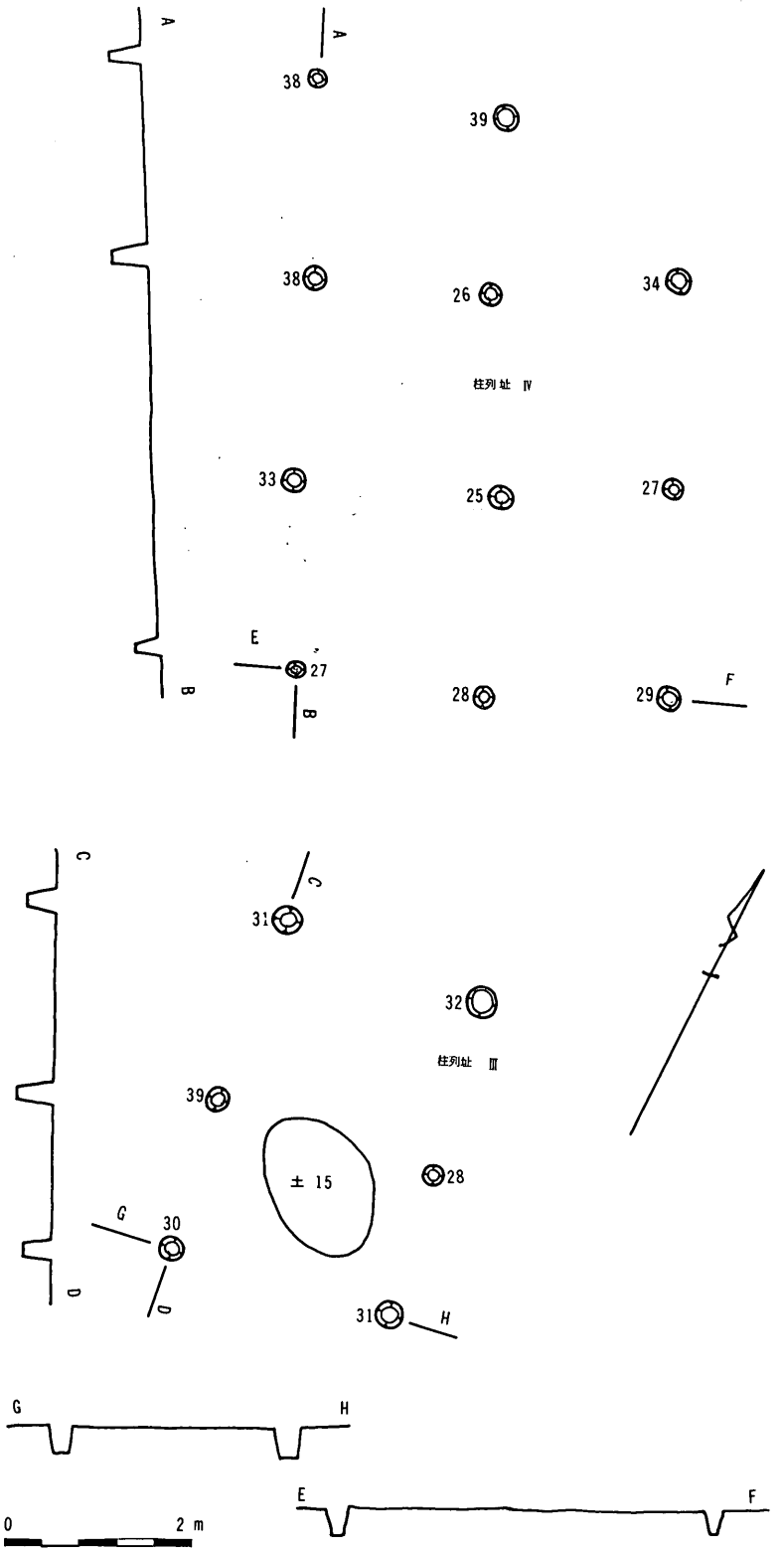


図38　清水柱列址Ⅲ・Ⅳ

柱列址Ⅲ・Ⅳ（図38）

No.26道路中心杭の北西3.5ｍに柱列址Ⅲ，３ｍ隔てて柱列址Ⅳがある。Ⅲの中央部に土坑15号が掘りこまれている。Ⅲは１間×２間，Ⅳは２間×３間の柱列址で，柱穴は砂層から黄色粘質土層に掘りこまれており，柱列は比較的整った配置にある。

遺物（図66の１～７）はⅢ，Ⅳが同一柱列址として調査したため，その区別は明らかでなくまた同時期のものである。土師器にはロクロ成形の坏があり，国分式の甕片は多い。須恵器の長頸壺，灰釉陶器の碗があり，土錘，ノミとみられる鉄器片がある。平安時代後半のもので，柱列址東に展開する住居址群と関連ある平安時代後半の一連の掘立柱の建造物とみられる。

柱穴群（図39）

方形周溝墓Ⅳ南周溝の南３ｍにあり，南は９号住居址に接しており，西は用地外となる。南北9ｍ×東西6.5ｍの範囲に37この柱穴が不規則に砂層に掘りこまれており，この中に僅かに高くて堅いマウンドが６こ発見されている。柱列址とみるものはなく，その性格は不明に終わった。遺物は小片のみで，弥生後期中島式とみるものが10数点と土師器の中期とみるが僅かにみられるが，これらが柱穴群と関連するかは不明である。柱穴群の時期は決めがたいが，古墳時代中期は下らないものとみたい。

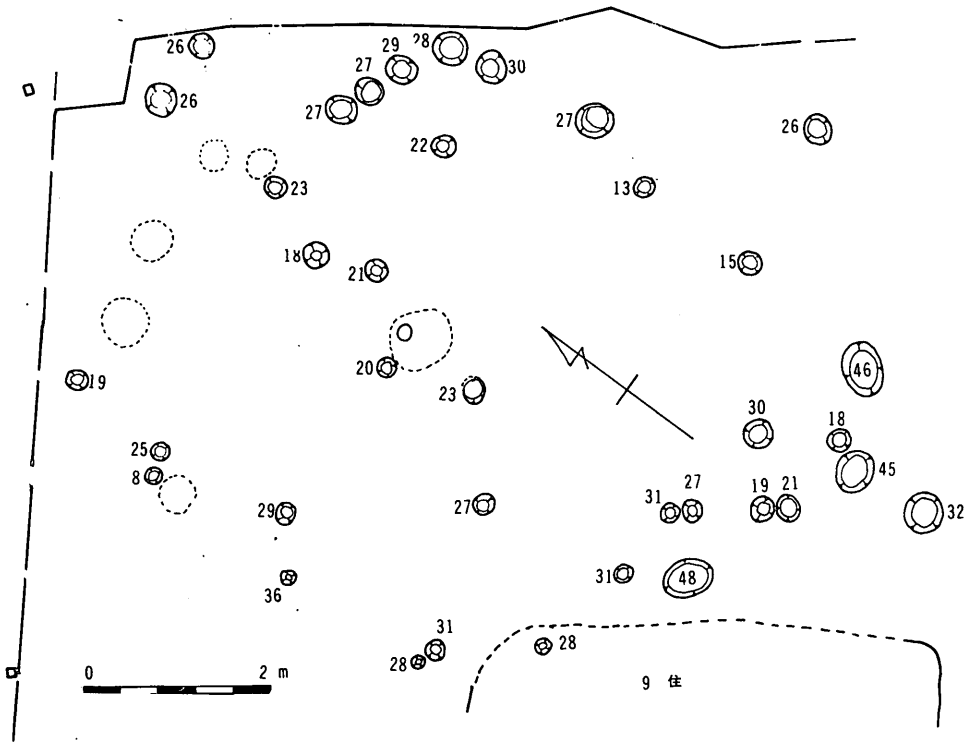


図39　清水柱穴群

3　土坑・土器集中坑

(1)　土　坑

1号から26号の土坑が調査された。火葬骨，骨灰が検出されたのは2土坑にすぎないが，形状，遺物の出土状況からみて大部分が墓坑とみられるものであり，この中，1号～6号の1群，18号～24号の1群をなすものは墓坑群として把えられた。各土坑については次の表にまとめ，主な遺物については後に述べることにする。

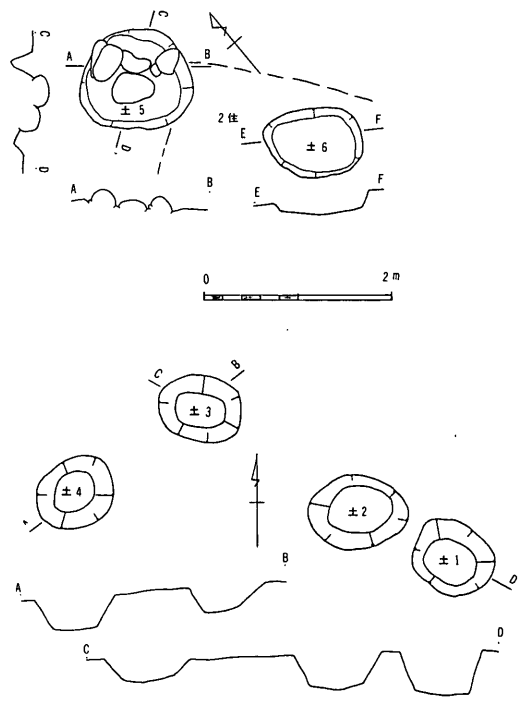


図40　清水土坑1号・2号・3号・4号・5号・6号

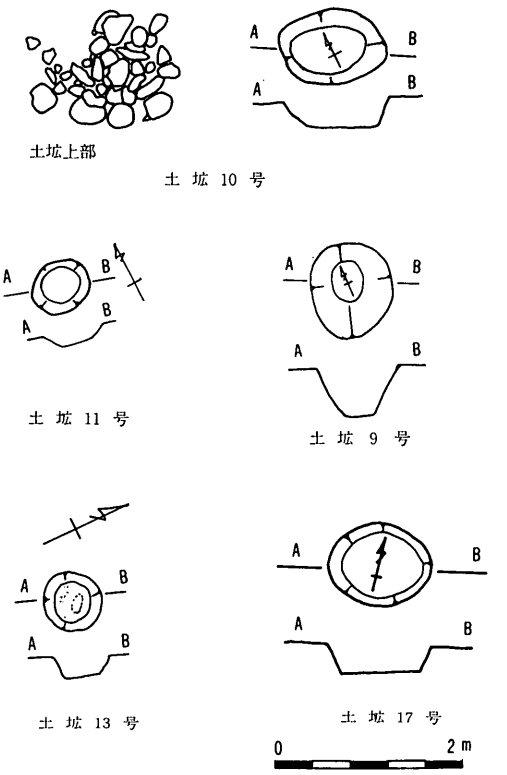


図41　清水土坑９号・10号・11号・13号・17号

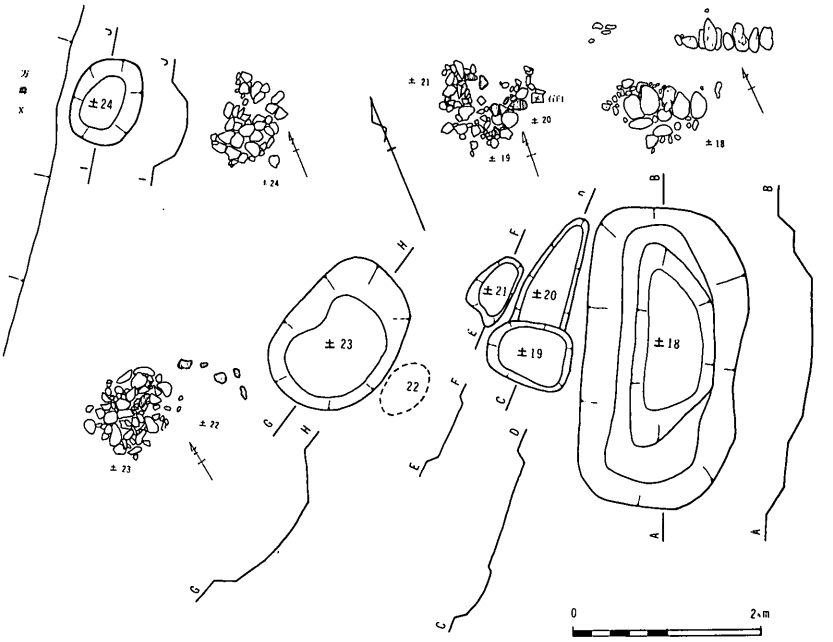


図42　清水墓坑群（土坑18号・19号・20号・21号・21号・22号・23号・24号）

清水遺跡土坑一覧表

土坑No.	調査区	大きさ(cm) 南北・東西	深さ(cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	図番号
1	I	72 × 86	45	楕円形	N30°W		上層より中世陶器片	中世？	40
2	〃	78×107	40	〃	N82°W		〃	〃	〃
3	〃	70× 90	30	〃	N86°W		〃	〃	〃
4	〃	73× 85	35	〃	N54°E		〃	〃	〃
5	〃	105×120	26	円形	N56°W	宋銭4　破片2（図87の66～69）	6この石を上に置く 石の下に頭蓋骨	中世	〃
6	〃	73×100	20	楕円形	N65°W		上層より中世陶器片	中世？	〃
7	〃	不明	不明	不明	不明	土師器―国分式（図66の8）須恵器片	方形周溝墓I東溝調査で発見．底部のみ検出	平安	4
8	〃	75× 75	40	円形	N10°E	土師器―ロクロ成形坏（図66の9）　須恵器片	15号住居址内にある	平安	15
9	〃	98× 84	51	楕円形	N21°E			不明	41
10	〃	68×115	30	〃	N72°W	中世陶器片	上部に集石	中世	〃
11	II	55×64	20	〃	N77°E			平安	〃
12	〃	70×110	20	〃	N76°W	中世陶器片	23号住居址西壁につく 西上部に集石	中世	25
13	〃	62× 64	20	円形	N22°E	土師器―国分式　須恵器（図66の10～12）	火葬骨灰上部に	平安	41
14	〃	148×128	30	不整形な楕円	N13°W	上層より中世陶片	方形周溝墓IXの主体部と並ぶ	中世	48
15	〃	110×160	38	楕円形	N60°W	土師器中期カメ（図65の5．6）		古墳中	35
16	I	122×120	20	不整形な隅丸方形	N30°E			不明	36
17	IV	88×110	30	楕円形	N82°E	中世陶片		中世	41
18	V	315×162	40	隅丸方形	N28°E	中世陶片．青磁片．スズリ片．鉄鏃（図66の18）	上部に配石	〃	42
19	〃	68× 91	22	〃	N60°W		〃	〃	〃
20	〃	118× 55	15	不整形な長楕円	N45°E	石臼（図66の19）スリバチ片．砥石片	〃	〃	〃
21	〃	76× 45	10	不整形な楕円	N50°E	中世陶器壺底部片	〃	〃	〃
22	〃	62× 40	浅い掘りこみ	楕円形	N62°E	中世陶器片―スリ鉢 碗	〃	〃	〃
23	〃	170×120	35	〃	N60°E	中世陶器片―皿 釘片	〃	〃	〃
24	〃	92× 72	25	〃	N48°E		〃	中世？	〃
25	〃	160×125	40	〃	N42°E	土師器中期甕．石鏃（図65の7～9）．土師器片多し		古墳中	50
26	〃	110× 80	20	〃	N 6°W	土師器中期片		〃	〃

（2）　土器集中坑（図43）

No.14道路中心杭の南東10m，No.15杭の北東10mの位置にあり，東1.8mで用地外となる。南北150cm×東西190cmの不整形な楕円をなし，黄褐色粘質土層に深さ55cm掘りこむ土坑であるが，上層部に土器を集中して置いてある。土器は土師器のみで，甕，高坏，壺（図65の10～17）があり，特に高坏は図示したのは5こであるがその破片は多い。また，打製石包丁（図65の18）1この出土をみている。甕1こと，高坏2

こがほぼ原形をとどめていたが，いずれも壊された状態にあり，祭祀的な性格の強いもので，方形周溝Xとの関連も考えなくてはならない。土師器は古墳時代中期後半とみられる。

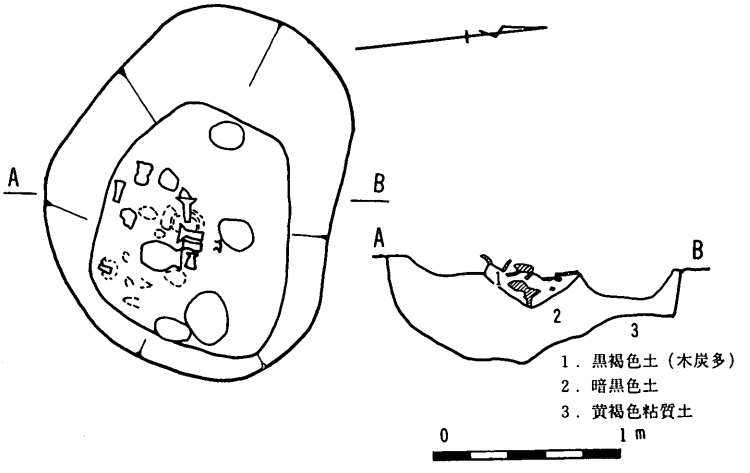


図43　清水土器集中坑

4　方形周溝墓

方形周溝墓はⅦを除きⅠ～Xを発見調査した。Ⅶ号はⅠ調査区の宅地跡に周溝ともみられるを発見調査したが，宅地跡と，36年災害のため荒れており，その確認に至らず終ったものである。Ⅵ．Ⅷ号は天竜川の浸蝕により東は削りとられ部分調査であるが，方形周溝墓となるとみたものであり，Ⅴ号は北と西側はⅡ調査区の氾濫により流された地帯で，深い砂層となっており，遺構検出のなかった場所であるが，溝の形態から方形周溝墓となる可能性は強いとみたものである。これらの中には単なる方形周溝だけのものもあるとみられるが，一応方形周溝墓としてあつかうことにした。

方形周溝墓Ⅰ（図44）

昭和49年度橋脚建設用地調査で南・東周溝と陸橋の調査を行ない，主体部検出の調査をなしたが未発見に終わった。50年度では北周溝と西周溝の約２分の１を調査したが，北コーナー部は墓地のため調査不能となった。

1.2ｍで天竜川の川原へと落ちていく先端部にあって，南北17.5ｍ×東西18ｍの隅丸方形に周溝をめぐらし，東溝の中央部より僅かに南によって幅1.4ｍの陸橋をもつ。南周溝は方形周溝墓Ⅳの北溝ともなっている。溝幅は1.1ｍ～1.5ｍ，深さ50～60cm粘質黄砂土に掘りこむ。主体部は発見されなかったが，洪水氾濫によって削り流されたものとみるが妥当であろう。遺物は西コーナー近くの南溝より多くみられたがⅣ号のものとみられ，他には東コーナーの上層より不明鉄器（図87のⅠ．Ⅱ）の出土をみているが，この周溝に関連するものかは不明である。

Ⅳ号周溝は雄大であり，溝内よりの遺物も多いが，Ⅰ号南溝と共にする範囲は，Ⅰ号周溝の規模を保ち遺物も西側にみられた以外は皆無となる。この点からして，Ⅰ号の後にⅣ号が構築されたものと推定される。

方形周溝墓Ⅱ（図45）

昭和49年度橋脚建設用地内調査で発見され，座光寺原式の２号住居址の南端部を切り，東溝は方形周溝墓Ⅳの東溝と平行している。50年度調査では宅地跡に大部分はかかり，コンクリートと土台石をブルトー

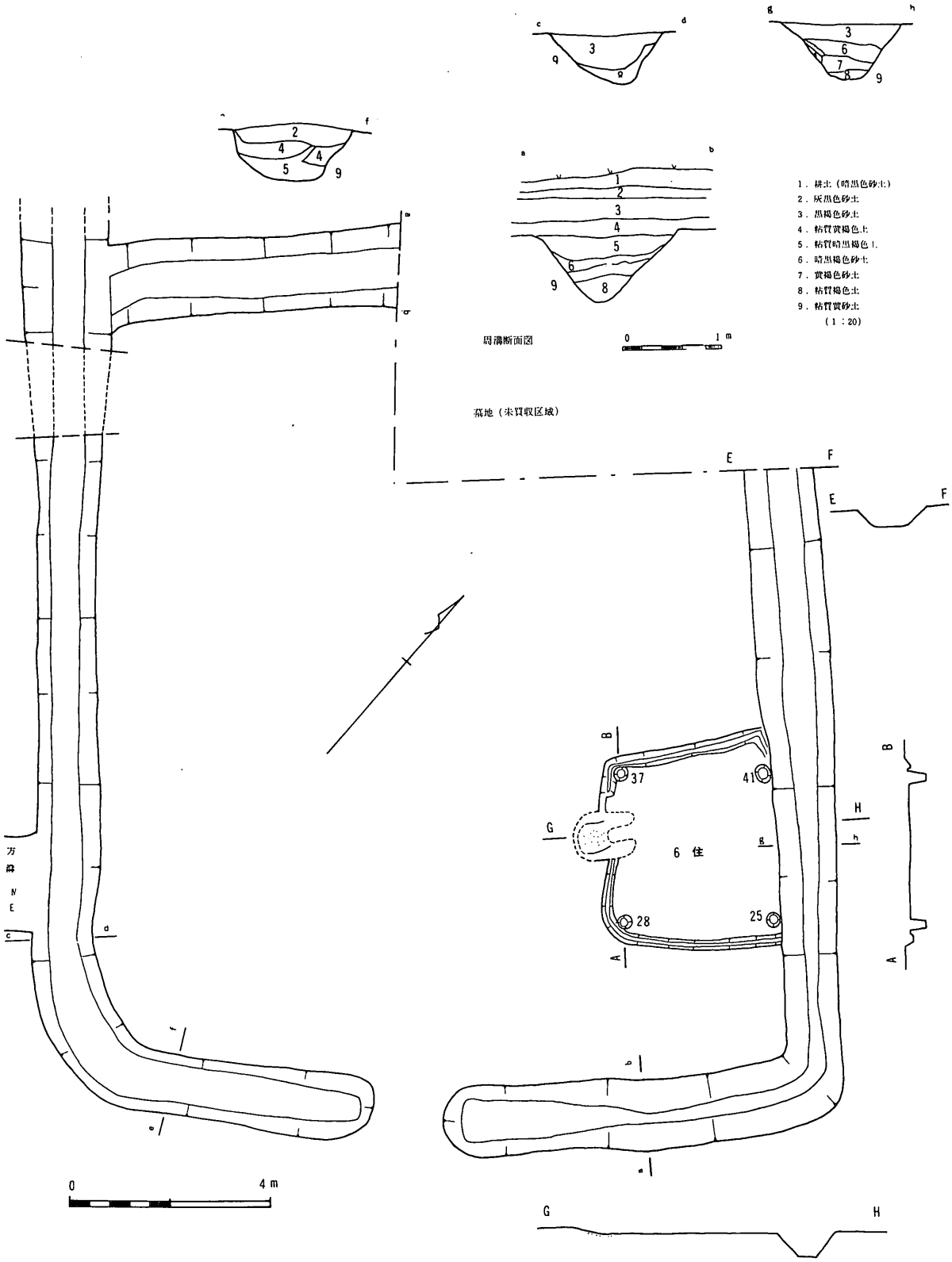


図44　清水方形周溝墓Ⅰ・6号住居址

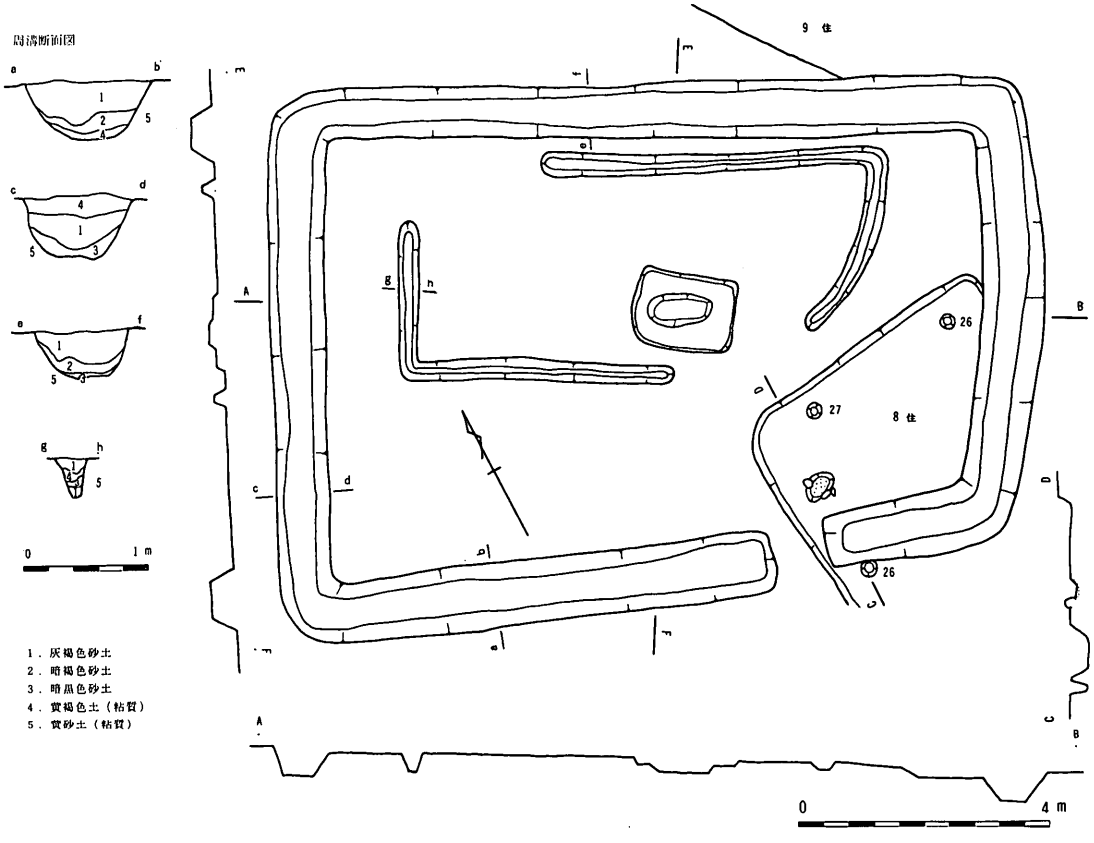


図46　清水方形周溝墓Ⅲ・８号住居址

ザーで排除しての調査であり，そのためか，また宅地造成の際か周溝の西と南は破壊されたとみられ，西，南溝は浅くなって消えており，その規模は不明であるが残存部からみて１辺が推定10～12ｍの範囲に周溝がめぐらされたものとみる。溝幅は80～120㎝，深さは20～30㎝粘質黄砂土に掘りこむ周溝をもつもので，主体部は破壊，または洪水氾濫によって流失したものとみられる。遺物は周溝内より中島式の壺，甕形土器片と打製石包丁（図84の８～11）と磨石鏃とその未製品（図87の16．17）の出土をみており，中島期の周溝墓と推定される。

方形周溝墓Ⅲ（図46）

Ⅰ調査区の堤防用地内に，方形周溝墓Ⅳの南溝より14ｍにあり，７．８．９号住居址を切って構築されている。南北8.3ｍ × 東西12.3ｍの隅丸長方形に周溝をめぐらし，南溝に陸橋が付く。周溝は幅80～100㎝，深さ30～45㎝粘質黄砂土に掘りこんでいる。さらに周溝の内側に２この陸橋をもつ小周溝（幅30～35㎝，深さ20～30㎝）が主体部を囲んでいる。主体的はほぼ中央部にあり，南北70㎝ × 東西160㎝の隅丸長方形をなし，内部を楕円形に掘りくぼめている。主軸方向 N52° W をさす。主体部よりの遺物はなく，西周溝より中島式壺形土器片，横刃形石器，小形石鏃（図84の１～５）の出土をみている。

方形周溝墓Ⅳ（図45）

Ⅰ調査区の中央部にあり西は用地外となり，南溝に沿って旧秋葉街道の道筋が残っている。北溝東２分の１は方形周溝墓Ⅰの南溝と共にし，東溝からⅧ号の周溝が東に，南コーナーを80㎝隔ててⅥ号周溝が南

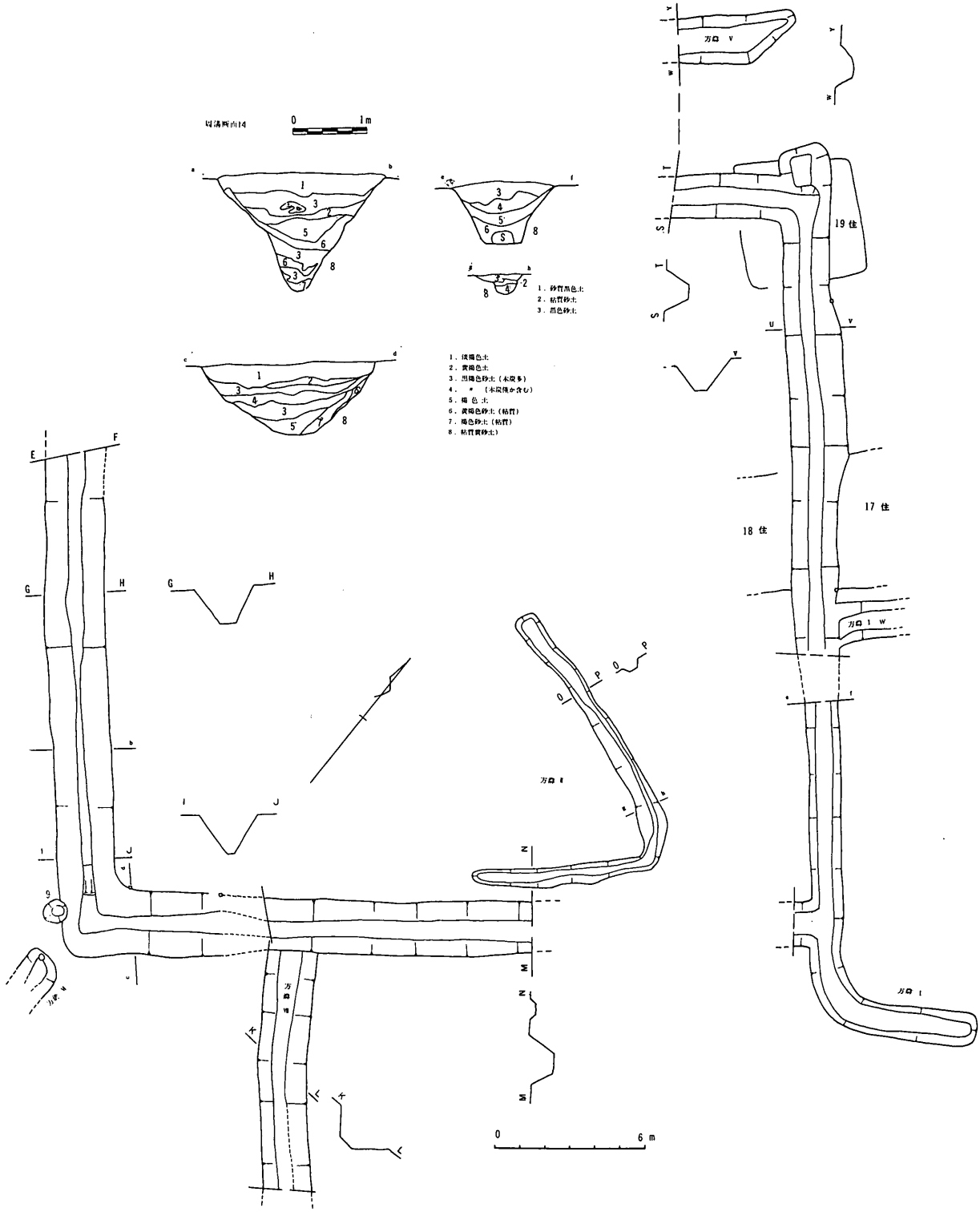


図45　清水方形周溝墓Ⅳ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ

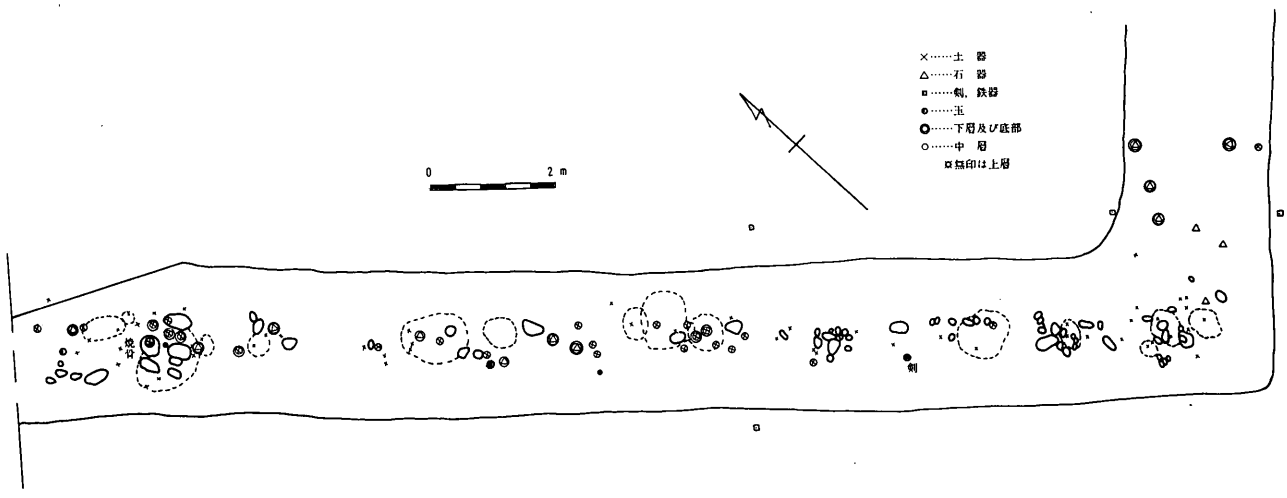


図51　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝遺物出土状況

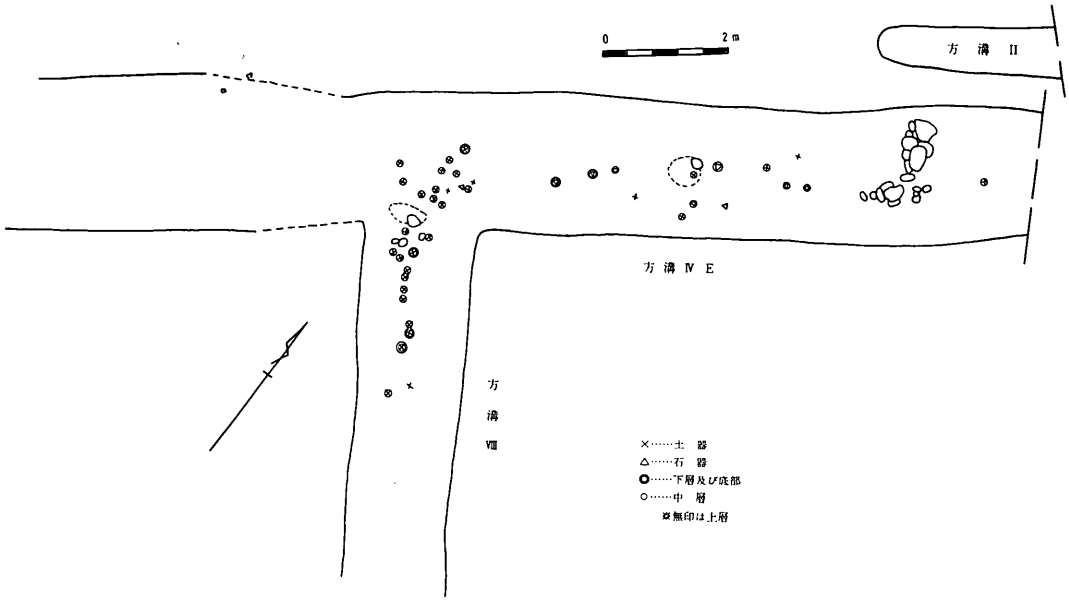


図52　清水方形周溝墓Ⅳ東周溝・Ⅷ周溝遺物出土状況

に向っている。

1辺が33ｍのほぼ正方形に周溝をめぐらす雄大な方形周溝墓である。

西周溝は北側の一部を除き用地外のため未調査，東周溝の北側2分の1は49年度調査であったが，上層にある1号．3号住居址の調査で終わり，寒波のため上解けの泥のため周溝確認に至らなかったもので，橋脚建設のため破壊された。宅地跡が大部分を占め，コンクリートをブルトーザで剝がしての調査のためまた宅地造成のために上層は削られ，旧秋葉街道面との高距は75㎝を測り，表層を残す西の用地境の一部では，20㎝の耕土，暗褐色砂土15㎝，砂層15㎝があって粘質黄砂土となっており，この粘質黄砂土層を周溝は掘りこんでいる。

周溝は南溝で幅230～250㎝，深さ150㎝を測り，南コーナー部で一段浅くなり，東溝はｃ—ｄ線で 幅250㎝，深さ90㎝となり，北にいくに従い狭くなり，Ⅷ号分岐点で深さ120㎝，Ｍ—Ｎ線では200㎝，深さ100㎝。北溝の東側2分の1はⅠ号南溝と共にし，幅120㎝，深さ50～60㎝でⅠ号西溝の発する付近から幅と深さを増し，Ｕ—Ｖ線では幅220㎝，深さ130㎝となる。西溝は北側の一部調査であるが幅180㎝，深さ100㎝とやや規模が小さくなっている。

主体部はおそらく，周溝の土を盛り上げた中に造られたとみられ，洪水氾濫による流失，または宅地造成によって削りとられたものとみられる。

周溝内よりの遺物の出土量は多く，上層，中層，下層及び底部と層序をなして出土している。(図51･52)遺物含有層は上・中・下層とも黒褐色砂土層—図45の周溝断面図の3の層よりで，人頭大の石が置かれ，周囲には木炭，灰を多量に含み，パートをなし，完形品もみられたが大部分は壊された状態のものである。

上層の遺物（図67．68．74．76．図87）は土師器が主体で須恵器片2点と臼玉，鉄器片の出土をみている。土師器には壺，甕，高坏，坩，碗があり，特に高坏の脚部片は多い。古墳時代中期後半とみるものである。

中層の遺物（図69～77．図87）には土師器が主体をなし，須恵器はなく，弥生後期土器片の僅かと，ガラス小玉，石鍬，打製石包丁，鉄剣1の出土をみる。土師器には大型壺，壺，小型壺，甕，高坏，坩があり，量は多い。複合口縁をもつ壺，甕，長頸壺，台付甕もみられ，古墳時代中期前半のものとみられるが前期後半のものも含まれている。

下層及び底部の遺物（図78，79，図87）は弥生後期中島式後半の土器が主体となり，東海地方の土器もみられる。壺，甕，台付甕，高坏，器台がある。石器の出土は多く，石鍬，有肩扇状形石器，打石斧，打製石包丁，横刃形石器，磨石鏃がある。

Ⅳ号方形周溝墓の構築の時期は，周溝上層にかかって1．3．16～19号の古墳時代中期の住居址があり周溝下層及び底部出土土器が中島式後半の土器を主体にし，東海地方の土器を伴っており，土師器の伴出のない点からみると弥生後期中島期後半とみられるものである。

周溝内の遺物出土状況をみると石を配し，その周辺で明らかに焚火がなされ，ここに大部分が壊された状態であり，その多くが高坏，坩の祭器であり，明らかに祭祀的な行事が行なわれてきた跡とみることができる。

北周溝の東2分の1は，Ⅰ号南周溝と共にし，その部分のみ周溝規模はⅠ号周溝の規模そのままでありⅣ号周溝の雄大さとは異なる。この点からみると，Ⅰ号が先に構築され，その周溝をそのままにしてⅣ号周溝が構築されたと考えられる。また，Ⅰ号構築後，時間的に大きな差のない時期にⅣ号が構築されたとみるが妥当ではなかろうか。

方形周溝墓Ⅴ（図45）

方形周溝墓Ⅳの西周溝より北西4.3ｍにあり，南は用地外となり僅か4.7ｍを調査したにすぎず，北は三角形となって消えている。これより北から西にかけては，Ⅱ調査区の洪水氾濫により押し流され，さらに白砂の深い堆積となる所で，遺構遺物の発見のなかった地帯となる。溝幅190㎝，深さ60㎝，形状からみて方形周溝墓となるものとみられ，洪水による流路となって北溝は流失したものと推定される。遺物（図84の６・７）は台付甕の台部と弥生後期とみる甕底部がある。

方形周溝墓Ⅵ（図47）

方形周溝墓Ⅳの周溝南コーナーを80㎝隔て南に向う。発見当初は傾斜をもって南に落ちていく排水溝とみたが

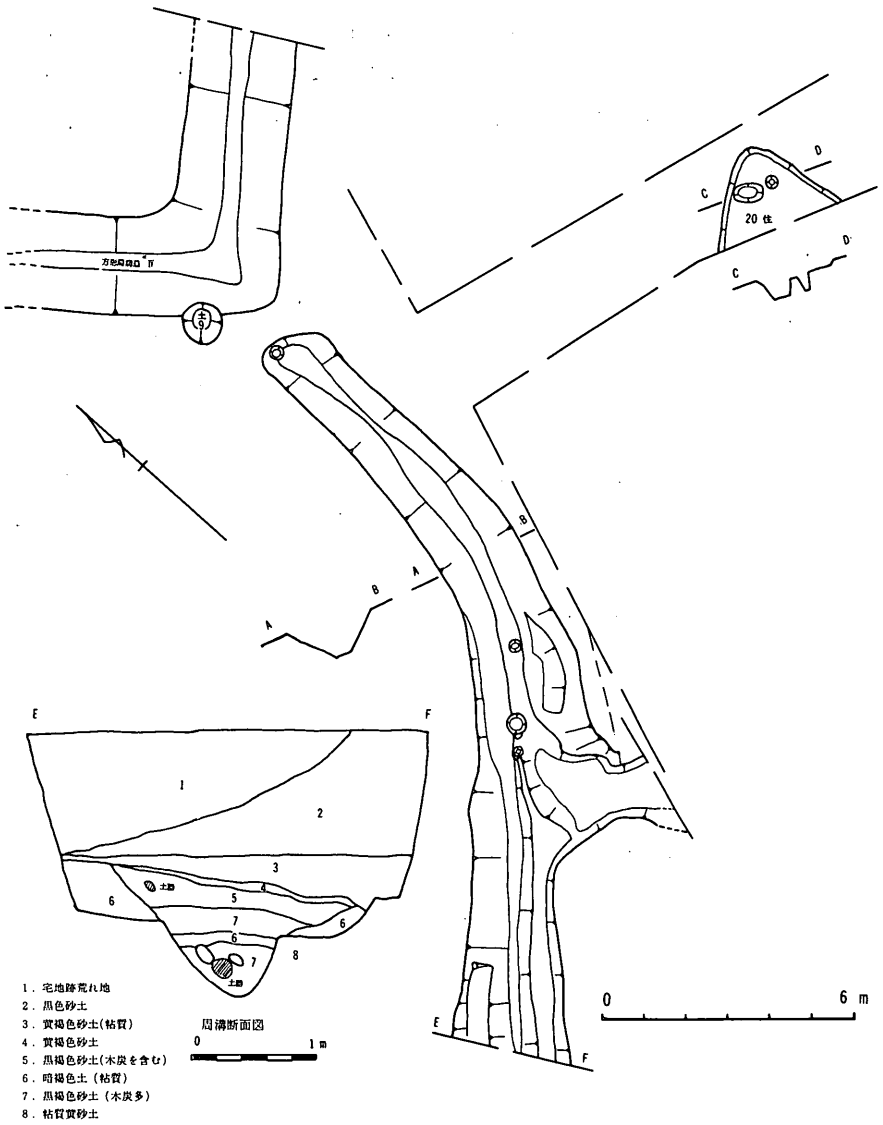


図47　清水方形周溝Ⅵ・20号住居址

Ａ－Ｂ線のやや北より底部は平らとなり，溝幅を増し，遺物の出土をみるようになった。Ａ－Ｂ線の幅200㎝，深さ100ｍとなり，北端から11.5ｍで最大幅300㎝となり，東と南に向う溝に分れる。前者の溝は直に天竜川の浸蝕崖に切られ，後者は幅210㎝～250㎝，深さ110㎝の有段の溝となり，南に向かっているが10号住居址，トレンチⅡ（図４参照）の調査では36年災害の荒地となっており，溝の検出は不能であった。

南と東に向う溝が方形周溝をなすか，またⅧ号の溝とで方形周溝をなすかは把握できないが，天竜川浸蝕崖の東側にわたって方形周溝墓が構築されていたものと推定される。

遺物の出土状態（図53）はⅣ号と同じ状態で溝内部より出土し，その性格も同じとみられる。遺物は上層（図80）よりは土師器が主であり，須恵器瑞片１点があり，土師器は古墳時代中期後半とみられ，甕，

高坏，碗，坩があり，量は少ない。　中層の遺物（図80．81）は多く，土師器のみとなり，打製石包丁が伴出している。土師器には，大型壺，複合口縁をなす壺，甕があり，小型壺，甕，高坏，坩があり，古墳時代中期前半と前期後半とみるものがある。臼玉（図87の15）1こが検出されている。下層の遺物（図81）には，古墳時代前期，または弥生時代後期とみる高坏，中島式壺の頸部があり，石器（図83）は多く粘板岩製の有肩扇状形石器，打製石包丁，砥石の出土をみている。弥生時代中島式後半に構築された周溝墓と考えたい。

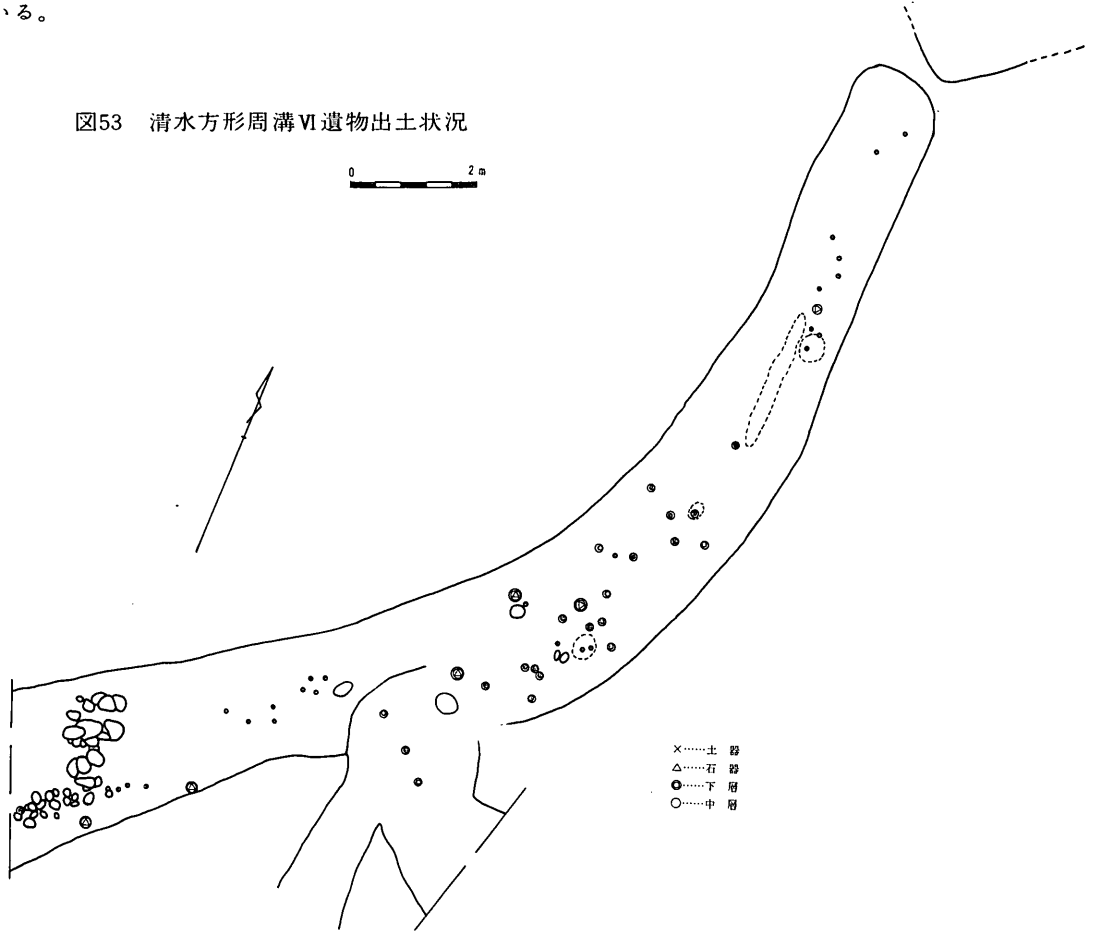
方形周溝墓Ⅷ（図45）

方形周溝墓Ⅳ東溝より分かれ，一段（Ⅳ号との差30㎝）高まって東に向い，天竜川浸蝕崖で切られている。この東に向う溝が南に折れた場合はⅥ号周溝と結ばれ，北に折れれば独立した方形周溝墓を形成するものと推定される。溝幅は200㎝，K－L線では深さ90㎝を測るが，それより東は旧水神橋の架線を埋めた跡にかかり十分な調査はできなかった。

遺物の出土状態（図52）はⅣと同じ状態で，その性格も同じとみる。完全調査できたのは2.7ｍの間でここに多くの遺物の出土をみている。ここで注目されるのは，Ⅳ号溝の中央部からⅧ号周溝へと東に直線的に土器が並べられて出土したことである。

遺物（図82．83）は土師器が主となり，須恵器はみられない。下層より僅かに弥生後期座光寺式の甕片中島式の壺片と打製石包丁1この出土をみている。土師器には壺，小型壺，窓付土器，甕，高坏，鉢，坩，小形甑の出土をみ，古墳時代中期後半とみるものを主とするが，中期前半・前期後半とみるものも出土している。

図53　清水方形周溝Ⅵ遺物出土状況



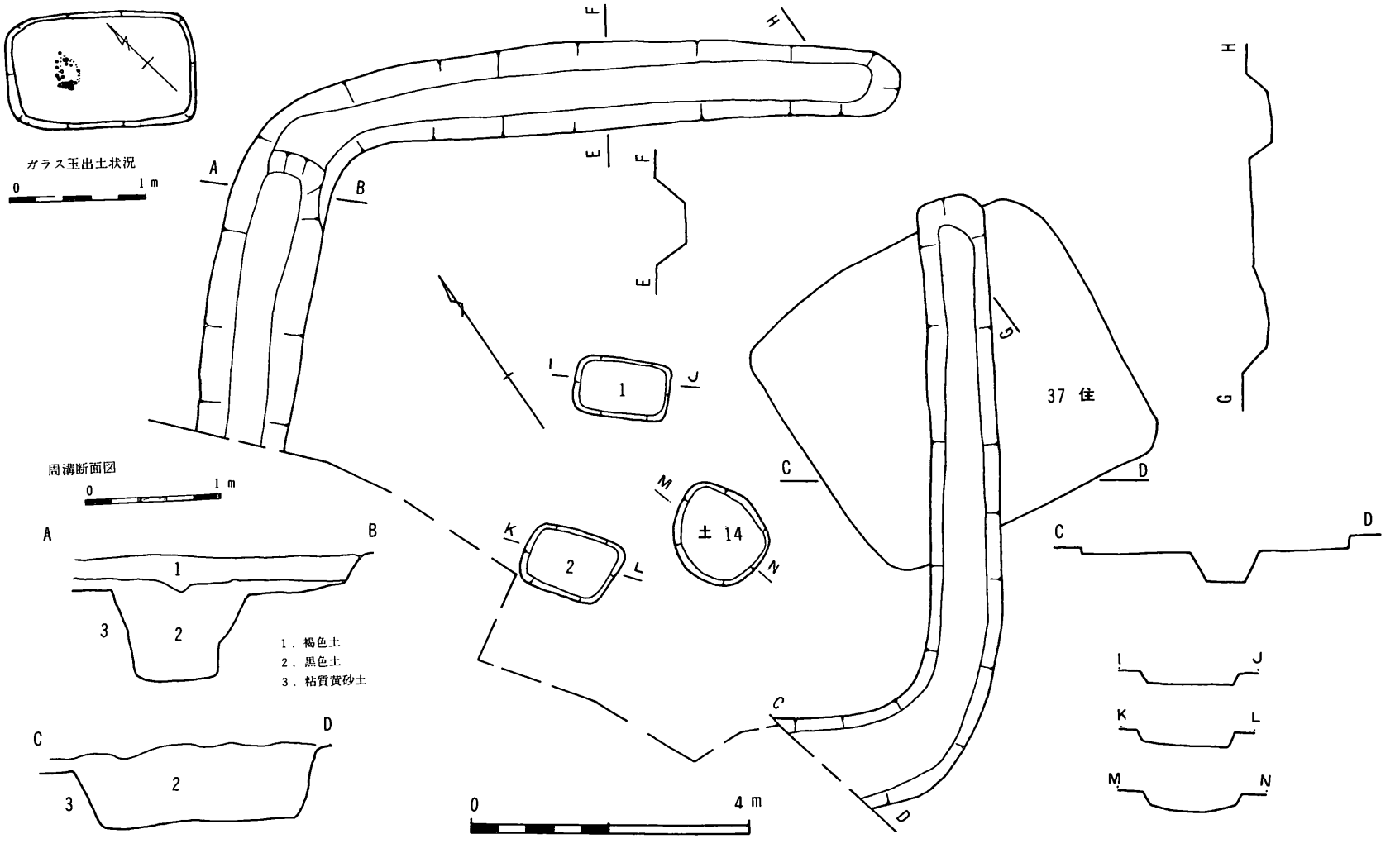


図48　清水方形周溝墓Ⅸ・土坑14号

周溝墓構築時期は問題であるが，Ⅳ号周溝より一段高く東に分かれ，Ⅳ号周溝中央部からⅧ号へと並ぶ土器の出土状況はⅣ号より後に祭祀の行なわれたものとみられ，Ⅳ号構築後，時間的な大きな差のない時期 ― 弥生終末期までには構築されたものと受けとめたい。

方形周溝墓Ⅸ（図48）

Ⅲ調査西，No.25道路中心杭の西2.3ｍに東周溝があり，37号住居址を切って構築されている。北コーナーより西10ｍから西は一段低位となり，かつては大きな湿地帯であったとみられる。また北８ｍで一段低い氾濫原の水田地帯となり，水神残丘面の北西の先端部にある。

南周溝は用地外のため一部調査となるが，南北11.2ｍ東西11.5ｍの隅丸方形に周溝をめぐらし，東隅に幅1.5ｍの陸橋をもち，周溝は東で幅100㎝，深さ50㎝，北と西で幅130～150㎝，深さ60㎝，粘質黄砂土に掘りこむものである。主体部はほぼ中央部に１．２の２こが並び，その東側に土坑14号がある。主体部１は南北88㎝×東西138㎝の隅丸長方形，主軸方向N32°Wをさす。主体部２は南北98㎝×東西135㎝の隅丸長方形，主軸方向N35°Wをさし，深さはともに20㎝前後であるが，上層の黒色土を削って検出したものであり，周溝の土が高く盛られていたものとみる。

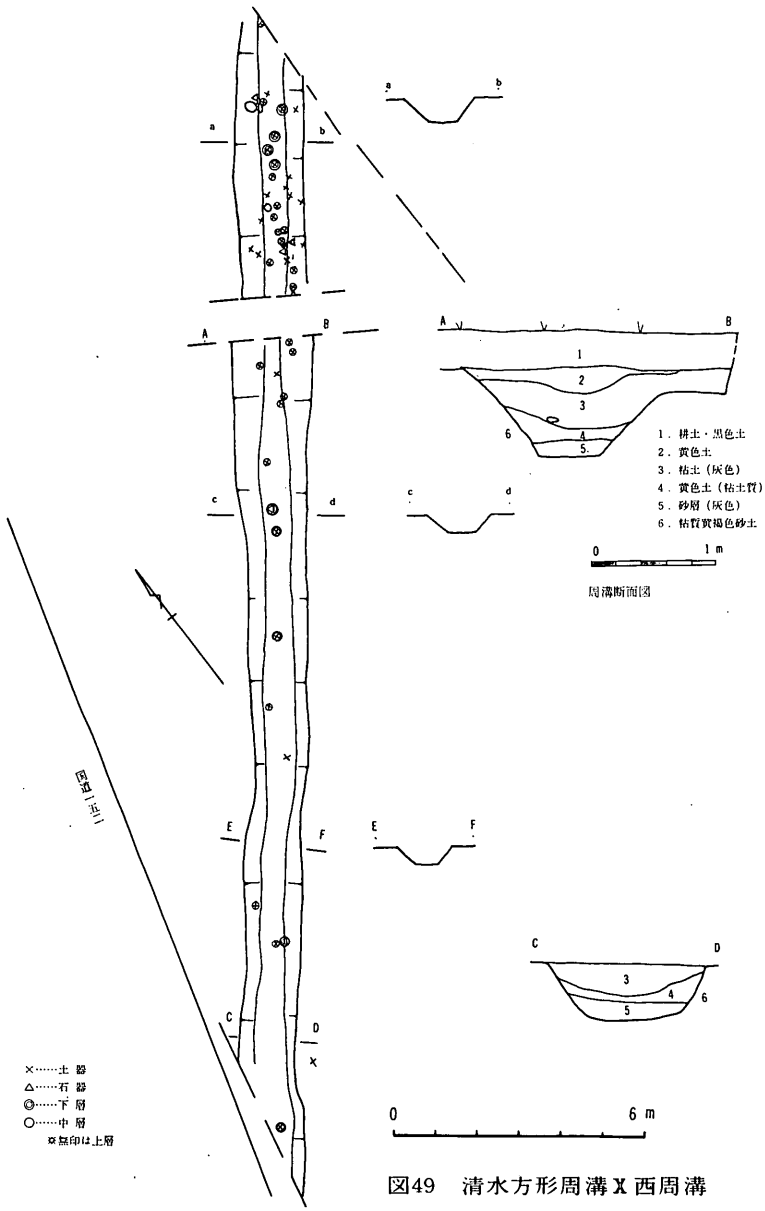


図49　清水方形周溝Ⅹ西周溝

遺物は，主体部１と周溝より出土をみている。主体部１の遺物（図87の18～57）にはガラス玉42こが検出され，２こは砕けていた。主体部を南北に三等分する西側の中央部に25×20㎝の楕円形に輪をなして出土をみた。（図48）首飾りとみる位置である。ガラス玉は丸玉18，小玉22があり，丸玉は濃いブルー一色であるが，小玉はブルー系を主とするが，濃淡があり，２．３こは硬玉とみられるものがある。

周溝の遺物（図84）には弥生後期の土器と石器がある。土器は中島式の壺，甕，高坏があり，東海地方の器台・高坏の脚部がある。石器は多く

太形の石鏃があり，石鏃，有肩扇状形石器，靴形石器・有抉石器，打製石包丁等がある。

方形周溝墓X（図49．50）

V調査区，現国道152号に沿ってあり，調査したのは西周溝と南周溝の一部である。清水上段段丘面の先端部にあり，東は緩い段丘崖となり，おそらく東溝の一部はこの段丘崖によって削られたともみられるが用地外となっており，北溝も用地外のため調査不能。南溝は土盛りと水道管のため一部調査に終わり西コーナーは現国道の道路敷となっている。北コーナーは用地外であるが，他の周溝内遺物出土例からみると用地境を僅かに入った所にあるとみられる。西溝で推定すると南北は35m近い辺をもち，地形的に東西方向は短かく，長方形をなす方形周溝墓をなすものと予想される。

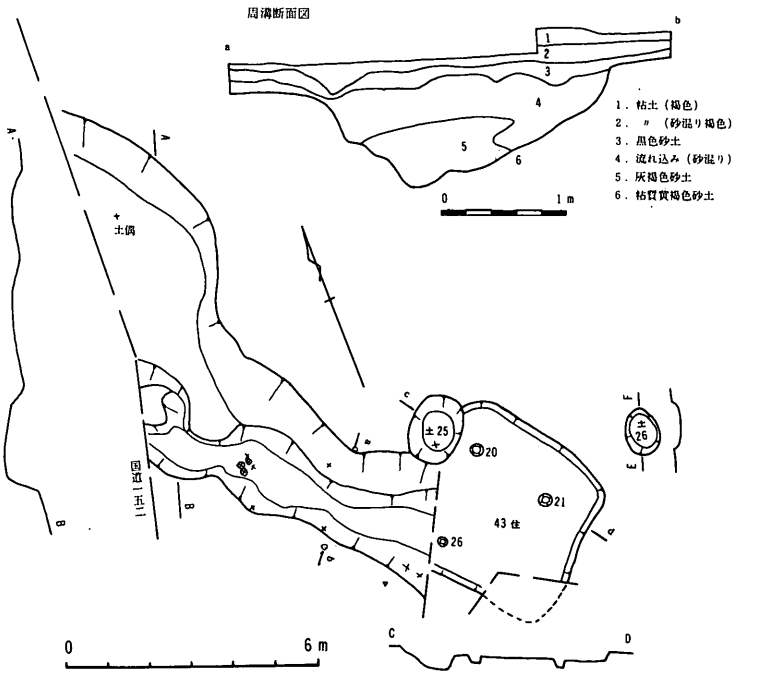


図50　清水方形周溝X南周溝・43号住居址・土坑25号・26号

周溝は，西溝は平らな地形にあり，溝は安定している。幅130～200cm，深さ50cm前後で，粘質黄褐色砂土層に掘りこんでいる。北側より多く遺物が集中して出土をみた。南溝は地形にそって傾斜しており，水の流れた跡を残し，特に国道ぎわは幅7mあり，雨水の流れによって原形は崩されているとみる。a－b線で安定を示し，北側は段をもつ掘りこみをなし，幅205cm，深さ80cm粘質黄褐色砂土層に掘りこむ。その東側上層には古墳時代中期の43号住居址がある。

遺物（図85．86）の多くは西溝北側に集中しており，その周辺には木炭を含む。Ⅳ号でみられた状態に近いが，溝が浅いためか明らかな層序をもつ出土はみられなかったが，図49．50の断面図にみる3・5層より出土をみている。遺物は土師器と石器で，南溝の国道ぎわの浅い所より土偶頭部（図87の63）の出土をみている。縄文時代中期のものとみるが，特徴ある顔をなしている。

土師器は古墳時代中期が大半を占め，壺，小壺，台付甕，高坏，坩があり，下層出土には前期後半とみるものがある。石器は多く，石鏃，有肩扇状形石器，横刃形石器，打製石包丁があり，凹石1この出土もみている。はっきり弥生時代とみる土器はないが，多くの出土石器からみて，構築時期は弥生後期後半と考えたい。多くの土師器の出土状況からみてⅣ号と同じ祭祀的な性格を強くもつものとみられる。

土偶頭部，凹石の出土は清水上段段丘面上に縄文時代中期の遺構の存在を示唆するものと思われる。

5　水路址

水路址1（図6）

Ⅲ調査区西，No.24道路中心杭の北5 mにあり，人頭大の石を並べ，配列の南側は白砂で，水の流れを示す。列石は北の用地外の水田造成の切りとり面にみられ，直線に長く続くものとみられる。白砂に混り，列石中からも平安期の須恵器，土師器の小片がみられ，平安時代の水路址とみられる。

水路址2（図7．図3）

Ⅳ調査区，第4トレンチで発見され，No.21道路中心杭北1 mにある。地表下60cmに石を両側に配し，東西方向に向く水路址で水を通した跡をはっきり残している。調査中，両側の水田よりの水の流入で一部調査に終っている。平安期の須恵器，土師器の小片が数点あり，この期に構築されたものと考えられる。

（2）　遺　　物

Ⅰ．弥生時代後期

弥生時代後期の遺物は大別すると座光寺原式と中島式の2時期がある。

(1)**座光寺原式**　2号・10号・38号住居址がこの期とみられるが，38号以外は出土量は少なく，この期とは決定しがたいものである。

38号住居址の遺物（図56の10～23）には壺形土器は16の1点のみであるが，甕形土器には10の底部の一部を欠くが完形があり，11～15にみるように，口縁部はくの字状に外反し，文様構成は細かい波状文と斜行短線文を組み合わす座光寺原式後半とみる土器群であり，また13の無文の緩いカーブで外反する口縁をもつもの，17の台付甕もみられる。石器には打石斧の19．20と，21の小形の有肩扇状形石器，22の打製石包丁，23の磨石鏃の未製品がある。2号住居址出土（図54の1～7）の土器は甕形土器片のみであるが，打製石包丁2この出土をみている。

(2)**中島式前半**　4号・5号・8号・9号・15号・25号・28号・37号住居址がある。いずれも遺物の出土量は少なく，この中，主な住居址の遺物について述べたい。

4号住居址（図54の4～9）では，4の欠山式の台付甕があり，甕・高坏脚部と壺形土器片があり，石器の出土はみられなかった。

9号住居址の遺物（図54の28～33）壺・甕・台付甕・高坏・器台がある。28の壺は頸の太い類形で立上り口縁はやや斜行し，座光寺原式の伝統を残している。29の台付甕は口唇部と台部を欠くが無文，高坏の31は欠山式の坏部の大きなものであり，30の器台は脚部を欠くが，坏部は1孔をもち，口縁は直行して開

いている。石器の出土はみられなかった。

25号住居址の遺物（図56の１～７）　１・２の壺の口縁部，３の甕の破片，４の底部があり，５の器台脚部は東海地方の土器で，横走線文と禾本科植物の細い紐を押捺した斜行線文とで飾るものである。石器の６は片面を磨いた横刃形石器で石包丁として使用されたものとみる。７は大形の縦刃形石器である。

37号住居址の遺物（図56の８・９・24）８の壺形土器は胴下部を欠くが整った形をなし，胴部は球状をなし，頸部はしまって口縁部は強く外反して開く。肩部には６条の櫛状器具による横走文が２段につき，その間を細かい波状文が，頸部は櫛箆による整形が施され，口唇部は斜めの刻みがつき，口縁部内面は禾木科植物の細い紐の押捺による綾杉文がめぐる。寄道式の伝統を引きつぐものとみられ，９の甕形土器は口唇部に斜行の刻みをもち，櫛箆による斜行の整形が内外面に強く施されている。両者とも東海地方の土器で，飯田地方では初見ともいえる土器である。24の紡錘車があるが，他の石器はみられなかった。37号址を切る方形周溝墓Ⅸの周溝内より多くの石器（図84の18～36）の出土をみているが，本址に関連する石器の存在も考えられる。

方形周溝墓Ⅸの周溝内の土器（図84の12～27）は，37号住居址と時間的な差は少ないとみられ，壺，甕高坏・器台脚部があり，器台脚部は東海地方の土器であり，37号址の壺の施文様式と同系列のものである。主体部出土のガラス玉（図87の18～57）には丸玉18こ，小玉22こがあり，丸玉は濃いブルー，小玉はコバルトブルーであり，周溝内出土土器よりみて，中島期のものとみたい。

28号住居址の遺物（図55の16～26）には，土器には21の壺片があり，19・20の甕片には座光寺原式とみられるものがあるが，16の甕は当地方では初見であり，一見土師器ともみられる。白っぽい胎土で貯蔵穴よりの出土である。17の高坏，18の坩は東海地方の土器とみる。石器には23～25の有肩扇状形石器と26の打石斧の出土をみている。

(3)**中島式後半**　７号・11号・20号住居址があるが，遺物の出土量はいずれも少ない。７号住居址の遺物（図54の13～19）の甕形土器13・14は無文となり，口縁部は折れるように強く外反し，この期の特徴を示すもので，これに伴う石器に15～19の打製石包丁があり，打製石包丁の材質が一般的に硬砂岩であるが，18・18は粘板岩製である。

方形周溝墓Ⅳ周溝下層及び底部出土の土器（図79）は中島式後半を主体とし，壺，甕，高坏，器台がある。これらの中には８の座光寺原式の甕があり，中島式前半とみる要素をもつものも小片中にはみられている。壺については明確にはいえないが，甕形土器には１の波状文と斜行短線文の組み合わせをみるが21の波状文だけの施文，２・５・22の無文となるものがあり，いずれも口縁部は折れるような強い外反を示している。６・７のＳ字口縁をなす欠山式の台付甕，10～12の高坏脚部，９の器台もそれと同系列とみられる。16・20の小形壺形土器は中島遺跡15号住居に類例をみる。18の小形壺は大形坩ともみられ，長頸となる。これらは伊那地方における弥生終末期の土器群として把えたい。

同周溝内出土の石器（図78）は多く，石鍬，有肩扇状形石器，有抉石器，打製石包丁，横刃形石器，打石斧，敲打器がある。石鍬１・２・４・22・32は有肩打石器というべく，柄を付着させる部分に深い抉りをもち，刃部幅を広くとっているところに特徴がある。砂質の本遺跡に適応した農耕具とみる。打製石包丁は29この出土をみているが，両側に僅かな抉りをもつ粗雑な作りのものが多く，18・43の抉りをもたぬが石包丁とみるものもある。

2．古 墳 時 代

古墳時代の遺物の出土量は多く，特に方形周溝墓Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ号の周溝内よりの遺物に注目される。住居址出土の土器の多くは和泉期とみられるが，前期後半の住居址に16号・18号住居址があり，その遺物の出土量は少ない。周溝内の遺物は弥生終末期から古墳時代前期・中期にわたって層序をなして出土をみている。

(1)古墳時代前期　方形周溝墓周溝下層及び底部出土の図79の６・７のＳ字口縁をなす台付甕，10～12の高坏脚部等は飯田地方では弥生後期の中島式と伴出しており，弥生終末期とみているが，古墳時代前期前半の範疇にはいるものともみられる。

方形周溝墓Ⅳ・Ⅵの周溝中層下部から下層の土器は前期後半とみられ，図69の１・３の大形壺・甕，図70の１・２，図75の２・７，図80の14の有段口縁をもつ壺があり，最大径を肩部にもつ。図76の８・９の壺は外上部にのびる直行口縁をもち，８は平底，９は丸底であり，図75の１も同タイプとみるが胴下半部を欠く。図81の22は大形坩ともみられ，同系列のものである。図69の２の大形壺はやや袋状をなし外反する口縁をもち，最大径は胴下部にある。

台付甕（図75の６）の胎土は白っぽく，精選されており，櫛箆と細かい刷毛目調整が施されている。高坏には図73の１，72の７の脚部は八の字状に開くもの，図73の３は脚部が坏部より大きく，器台ともみるもの，２・４の脚部が直線的に下りるもの，図75の12，図81の26にみるような脚裾部がラッパ状に開くものがあり，図77の14・15の脚部に有孔のものもみられる。図86の３は坏部のみであるが，段をもって開く深い坏部は特徴がある。図81の11・14の器台脚部，坩では図77の18，83の９・20があり，20は平底である。

(2)古墳時代中期　16号・18号住居址を除く古墳期の住居址は中期とみられ，方形周溝墓Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹの周溝内上層・中層よりの遺物は多量で，その主体をなすは中期の土師器である。図65にみる柱列址Ⅰ・Ⅱ，土坑15号・25号，土器集中坑の土師器も中期である。

最も土器出土量の多かった方形周溝墓Ⅳ南周溝例でみると，上層出土土器（図67・68）は中期後半の土師器が主体で，壺（図67の６・８）の底部は大きく安定し，甕（図67）は胴部がやや長く，１・３は最大径が肩部に，２・４・５は胴下部にあるものがある。甑に図67の10の鉢形単孔，図68の31の多孔があり，10の甑は内外面とも櫛状器具による調整痕を強くもつ。高坏（図68）は脚部の太く広がりをもって裾部にいたって開くものの多いのがめだつ。碗形は図68の19～26の出土をみているが，周溝中層よりの出土はみられなくなっている。

また，坩は図68の28の１このみ，30の須恵器腺の出土をみている。上層の土器と周溝中層出土土器との間には明らかな差違がみられる。壺・台付・壺・小形壺・甕・台付甕・器台・鉢・坩とミニチュア土器がある。壺・甕は胴部は球形となり，底部は小さくて安定である。図70の２の壺の胎土は白く，整った作りのもので，当地方の土器とはみられない。６の壺は肩部の張りから胴部にかけて弧の少ない線で下りているのは図69の１の大形甕と類似する特徴あるものである。高坏は坏部に弱い稜をもち，口縁部は直線的にまた僅かな弧をもって外反するものが多い。脚部は上部にややふくらみ，一坏との接合の際の圧痕とみ

る ― をもってほぼ直線的に僅かに開いて下がり，裾部は角をもって開き，比較的小さいものが多い。坩はいずれも小形丸底で，手づくね手法によって製作されたものが多く，胴下半部に指圧痕を残している。これらの中で図74の21は胴部穿孔の本遺跡での唯一のものである。鉢形土器は僅かであるが朱彩のものもみられる。

方形周溝墓Ⅳ南周溝例と他の周溝出土土器とは出土量，器種の多少はあるが土器には差はない。周溝墓周溝出土土器中，特殊なものを上げると，Ⅷ号出土の手焙形土器（図82の６），Ⅵ号出土の手づくね土器（図81の18），Ⅳ号南周溝出土のミニチュア土器（図73の27）があり，図73の21の小形壺は精良な胎土・焼成で仕上りの良好な均整あるものとして注目される。

これら中期土師器の製法は，輪積手法が大半を占め，小形土器には手づくね手法によるものが多い。胎土は一般的に長石粒，石英粒を多く含み，焼成は堅く，赤褐色，淡褐色を呈し，整形に刷毛が多用されているものが多くみられる。白っぽい胎土で，長石粒，石英粒を含まず，焼成のやわらかい非実用的，祭祀的とみる土器が僅かに含まれている。

古墳時代中期の住居址（１・３・12・14・17・19・21・22・24・26・43号），柱列址（Ⅰ・Ⅱ），土坑（15・25号），土器集中坑出土の土器は21号住居址，土坑集中坑を除き量的に少なく，前半期・後半期とみるものがあるが，明確にいえるものは少ない。これらの中，１号，３号，24号住居址，土器集中坑より打製石包丁を，３号・19号住居址より有肩扇状石器を伴出している。それらが混入品か，この期の土師器に伴うかは不明であるが，方形周溝墓Ⅳ周溝内中層より中期土師器とともに打製石包丁（図78）の多くの出土をみており，これら石包丁が粗雑な作りであることも今後の検討課題である。

21号住居址出土の土師器（図59の１～７）はセットとみられ，中期後半とみる。大形甕・小形甕・甑・碗の出土をみている。大形甕には最大径を肩部にもつ１，胴下部にもつ６があり，胴はやや長くなり，底部は小さく，１は丸底，２は平底であり，１はＸ状の刻印をもち，両者とも篦調整。小形甕２・３は底部は大きく平底で，ずんぐりしている。５の甑は挿入の把手をもち注目される。

須恵器の出土をみたのは，26号住居址（図58の23）と，柱列址Ⅰの蓋坏の坏部（図65の１）のみである。26号址の須恵器は図示では立っているが横になるものとみる。大形𤮈 ― 俵壺とよばれるものとみるが不明。口縁部接合部で離れ疑似口縁をなし，このまま使用されたとみる。柱列址Ⅰの蓋坏は胎土・作りからみて陶邑窯産とみられ，ともに中期後半に伴うものとみられる。

土器以外の遺物　玉類には方形周溝墓Ⅳ周溝上層よりの石製模造品の臼玉（図87の３・４・８・９・10 11・13）は一面は磨かれ，ていねいな作りである。中層より小玉（図87の５・７），ガラス小玉（図87の６）。21号住居址のガラス小玉（図87の61）がある。10号住居址上層より石製模造品の２孔の有孔円板もみられる。

鉄器（図87）方形周溝墓Ⅳ周溝の鉄剣（図87の１）は中層出土で，先端部を欠くが，身丈は短かく弥生期のものとも考えられる。12の鉇，Ⅰの大刀の鍔，Ⅱの不明鉄器（10号址上層出土），60の２号住居址出土の鉄器片がある。青銅器に10号址上層より有孔円板と伴出した図87の58があるが，その用途については不明である。

3．平安時代

平安時代の住居址14，柱列址２があり，前半期とみるものに23・27・32号住居址，後半期に６・31・35・40・42号住居址，終末期に30・33・34・36・39・41号住居址と柱列址Ⅲ・Ⅳがある。

前半期は土師器では甕が主体で碗・坏はみられない。須恵器は美濃須衛窯産（図60の３，図61の４・５・７）とみる胎土と作りの良いものと，地方産（図60の４，図61の６・８）の胎土の荒い粗雑な作りのものとがほぼ同比率でみられ，灰釉陶器はでてこない。

後半期になると灰釉陶器がはいってくるが量は少なく，灰釉の十分にかかる良質なものがみられる。須恵器は地方産が主体となり，美濃地方産が混っている。土師器は国分式の甕が主体で小形甕が多くロクロ形成（図67の７）の甕もみられる。

終末期には33・34号住居址（図62），41号住居址（図63）よりの出土量は多く良好な資料を得ている。土師器では国分式の甕と共に鉢形に近い輪積形成の粗作な作りの器壁の厚い甕（図63の１・２）と，鍔釜（図62の６・図63の６）がある。また黄赤色を呈すロクロ形成の焼成のやわらかい小形皿，口台付碗が多くみられる。灰釉陶器の碗・皿の量は多く，外面の釉は上半部にみられるのみで，中津川系が大半を占める。特殊なものでは耳皿（図62の23），猿投窯の段皿（図63の17）がある。須恵器は地方産の甕・坏が僅かにみられる。

平安期の鉄器には柱列址Ⅲ・Ⅳのノミ（図66の７），41号址の鉄鏃の茎部（図87の64），６号址の釘（図60の23）があり，その他小破片数点がみられた。古銭は41号住居址より皇宋通宝（1039年宗仁宗）の出土をみて注目される。土製品には柱列址Ⅲ・Ⅳ出土（図66の６），41号址出土（図63の23）の土錘がある。

4．中　　世

中世の遺構には13号住居址，土坑５号，墓坑群Ⅱの土坑18・20号より遺物の出土をみている。13号住居址の遺物（図66の13～17）には広口壺・皿・オロシ皿・スリ鉢があり，紹聖元宝（1094年宗哲元）の出土をみている。土坑５号（図87の66～69）よりは古銭６こ（２こは壊われている）の出土をみ，皇宋通宝（1039年宋仁宗）・紹聖元宝・大観通宝（1004年宋真宗）・不明１こと皇宋通宝片２こ体分がある。土坑18号よりはスリ鉢片（図66の18），土坑20号より石臼（図66の19）が出土している。石臼は安山岩製の上臼で古いタイプのものである。

遺構以外ではⅠ調査区・Ⅲ調査区上層より中世陶器・スリ鉢・天目茶碗・青磁碗・山茶碗・常滑甕・志野皿等の破片がみられ，スズリの破片もある。かつてこの地は城端と呼ばれた松尾小笠原氏の天竜川対岸の知久氏に備えた防御の地であったことがうかがわれ，出土遺物からみて有力な小笠原家臣団の居住の跡があったと予想される。

縄文時代の遺物では図87の63の土偶頭部がある。後頭部を欠いており，中期末，または後期初頭とみるものである。方形周溝墓X南溝の現国道境で出土しており，一段高位にあるV調査区には縄文期の遺構の存在が予想されるところである。

V まとめ

清水遺跡は東は天竜川に接し，東端部は氾濫によって削りとられている。飯田地方の最低位に立地する遺跡で，V調査区の一段高い段丘面を除き天竜川の大氾濫の影響を数次にわたって受けており，深い泥砂の堆積を示す場所，洪水の流路となり砂の堆積となって遺構を残さないII調査区があり，また天竜川に面すI調査区南は表層が削り流されているように地形的変化が多くみられ，このため調査には苦労を重ねた。

本遺跡の調査は遺跡全体からみると堤防用地内の天竜川に沿った100m×50mの東端部と遺跡の北側を東西に道路用地内450m×15mの部分的な調査であったが，住居址では弥生後期15，古墳時代前・中期13，中世1があり，柱列址4，方形周溝墓または方形周溝となるとみるもの9，土坑26を検出調査している。

古墳時代後期の遺構は発見されなかったが，地形的にみて当然その存在は予想され，また対岸にある天竜川に接した同位面にある飯田市下久堅川原遺跡では縄文後・晩期の資料が多くみられ，弥生中期恒川式の住居址も発掘調査されており，本遺跡においてもそれら時期の遺構・遺物の存在は否定できないと思われる。

本次調査において特に注意すべきは方形周溝墓とその周溝内の遺物のあり方である。方形周溝墓群構築時期は，周溝底部よりの遺物が弥生後期中島式の土器と石器であり，周溝上部につくられている。住居址が古墳時代前・中期であることよりみて弥生後期中島式後半であると考えたい。方形周溝墓IVは1辺が25m，最大幅2.4m，最深部1.5mの周溝を方形にめぐらす巨大な方形周溝墓である。周溝内側は移転家屋の跡でコンクリートをはがしての調査であり，宅地造成の際に破壊されたか，あるいは洪水の際に削りとられたものか，主体部の発見はできなかった。

方形周溝墓I号が最初に構築され，IV号がI号の南溝をそのまま利用して規模を拡大して構築され，その内側にL字状にII号が，東溝よりVIII号，南溝隅から僅か離れてVI号が構築され，この二者は天竜川の浸蝕によって削られ不明であるが，一つの方形周溝墓を形成したものともみられる。一段高い段丘面の先端部にあるX号は西溝と南溝の一部調査であるが，東側は天竜川の洪水浸蝕を受け，また上層部は地形的にみて削りとられたものとみられ，その規模は十分に把握できなかったが大規模のものと推定される。

I号・III号・IXを除き周溝内の遺物量は多く，特にIV号南溝に多くみられ，その出土状況を把握することができた。

周溝底部には弥生後期の土器と石器の出土をみているが，これは別とし，上層・中層・下層と層序をもって出土している。その遺物含有層は黒褐色砂土で，その間は黄褐色砂土となってはっきり区別している。遺物はパートをなし，そこには人頭大の石が配され，木炭，灰を多量に含み，大部分が壊された状態で出土をみている。土師器が主体で，上層は古墳時代中期後半に僅かな須恵器を伴っており，中層は古墳時代中期前半，下層は前期と弥生終末期の土器を伴っている。土師器には壺・甕・高坏・坩が主であるが，特に高坏・坩の量は多い。石製模造品の臼玉・ガラス小玉が混入しており，火を焚いたとみる木炭・灰を多量に含む層，壊した状態の土器，パートをなしての出土状況，祭器とみる高坏・坩の多量の出土は，そこには祭祀的な行事が行なわれてきたものと推定される。

巨大な周溝墓を築いた地域の大権力者への墓前祭，または天竜川に面す位置から水神の祭り ― 大洪水

への祈り，雨乞の祈り ― がここに行なわれたものとも考えられる。

周溝内出土の土師器は数多く，飯田下伊那地方の土師器編年の貴重なる資料で，壺・甕には地方色を多分にもち，周溝内出土状況とともに今後の究明さるべき課題である。またこれら土師器とともに打製石包丁の数多くが周溝内，住居址内より伴出している点も研究課題である。

方形周溝墓Ⅸ主体部より42こ（２こは砕かれていた）のガラス玉の出土は注目される。またⅣ号周溝内出土の鉄剣・鉇・大刀の鍔，10号址上層の用途不明の青銅器の出土等の遺物，巨大な周溝墓の構築からみて，この地域に大権力者の存在が推定され，その発生をみた清水遺跡を支えた生産基盤は何であったであろうか。先ずあげられるのは，Ⅳ調査区の湿地帯と，遺跡をはさむ南西と北東の広い氾濫原である。これらの地帯はともに天竜川の氾濫堆積の肥沃な土壌をもち，段丘崖下の湧水と，小河川の利用も比較的容易な地域であり，生産性は高く，現在飯田地方における反当最高収量をもつ米作地であり，集落をなす地域も氾濫堆積による肥沃な土壌は畑作物の好適地として知られている。旭松工場面から北に続く段丘面には弥生中期初頭の標準遺跡である寺所遺跡があり，飯田地方における最も古くから農耕文化をもった地域の一つでもある。

５世紀後半の眉庇付冑の出土をみた妙前３号古墳をはじめ，松尾地区は隣接の竜丘地区とならんで飯田盆地における古墳密度の最も高い地域であり，これら古墳の成立は肥沃で水利をもつ生活基盤を背景にしていたからであろう。

平安時代の水路址の存在，多量な灰釉陶器の出土をみた住居址の存在，中世遺物にみる良質な陶器片・常滑甕片等，この地の生活基盤の強さを物語るものとみられる。

遺跡の西の台地上には信濃の守護小笠原氏の本拠松尾城跡と鈴岡城跡があり，天竜川対岸には知久氏の本拠であった知久平城跡がある。小笠原氏が対岸知久氏に対する天竜川の備えをもった地として，城端と呼ばれる地名がここに残っている。その遺構は発見できなかったが，良質な中世遺物の出土，地形的にみても，その防御の地であったことは推定できる。

付　近世にはいってからは秋葉街道の船渡の場として交通の要所となり，明治42年に最初の水神橋が吊橋で架橋され，昭和７年に現在の鉄橋となり，現在新水神橋架橋のための工事が進められている段階である。

本次調査は遺構，遺物両面で多くの課題をもち，十分な研究，検討のなされない段階で報告書発行の期限にせまられ，執筆をよぎなくされたものであり，大方のご批判・ご教示をおねがいいたしたい。

おわりに，調査にあたっては調査員今村正次先生の献身的な御協力，地形地質に矢亀勝俊，松島信幸両先生，遺構遺物については大沢和夫先生，県教委文化課今村善興，桐原健，岡田正彦，笹沢浩指導主事の御指導，助言があり，作業にあたられた方々の熱心な作業態度，酒井幸則君を指導者とした飯田高校考古学研究クラブ，阿智高校郷土クラブの諸君の協力が大きな力となったこと，建設省天竜川上流工事事務所の御理解，御協力のあったことを深謝したい。

（佐　藤　甦　信）

調　査　組　織

1．清水遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

橋本　玄進	飯田市教育委員会委員長
森本　信也	飯田市教育長
山下　順蔵	飯田市教育委員
平田　英夫	〃
勝野　好一	〃
矢亀　勝俊	前飯田市教育長
相津　　実	飯田市教育委員会事務局　社会教育課長

2．調　査　団

団　　長	佐藤　甦信
調 査 員	今村　正次
〃	酒井　幸則
〃	吉沢　輝人
〃	林　登美人

3．指　導　者

大沢　和夫	飯田女子短大教授
今村　善興	長野県教育委員会文化課指導主事
桐原　　健	〃

4．事　務　局

飯田市教育委員会社会教育課

相津　　実	社会教育課長		
山下　舜平	課長補佐　係長		
園原　春治	係　　長	山田　卓郎	係　　長
長谷部三弘	主　　事	熊谷理恵子	主　　事
太田　美佐	〃	林　　茂喜	〃
林　　貞子	〃		

5　作　業　員

北村　重実	宮内　　衛	吉田　春台	沢柳　幸三	池田　　功
寺沢　二郎	代田　幸徳	清水　徳美	原　　孝一	榊原　裕行
西尾多三郎	福島　明夫	牧内　住子	小沢穂美子	久保田尚子
北沢　文恵	塩沢ちのゑ	塩沢　つぎ	伊坪　治子	北沢　タカ
関川つね子	平栗　光司	佐藤いなゑ	吉沢　徳男	大島　貞子
塩沢　幹子	平沢　なか	関島きよ子	藤本　利子	松尾まつ子
松尾たみ子	中島寿津江	中村　　美	柘植　勝次	原　　良平

宮内　伝	竹下　利一	木下　秀亮	中平　兼茂	田口　三郎
下平　貞雄	大野　とみ	金田　秀樹	竹村　俊夫	山下　誠一
松島　賢治	福島　直人	田中　忠義	三石　登	飯島　洋一
菅沼　正和	三輪　全一	吉沢たけし	久保田倫正	加藤　定彦
松尾　敦	桐生　賢蔵	中島　浩	松川　寿彦	池田　弘美
中平　一夫	田口さなる			

下伊那教育会考古学委員会

飯田高等学校考古学研究クラブ

阿智高等学校郷土クラブ

お　わ　り　に

国道152号線の水神橋掛替に伴う路線付替工事が実施されることになり，事前に事業担当官庁である建設省天竜川上流工事事務所及県教育委員会と協議し現地調査を行い了解を求めて発掘作業を実施することにした。

清水遺跡は天竜川沿岸の平坦地で前々から弥生時代，古墳時代の遺跡が所在するものといわれた地籍である。

昭和49年12月松尾地籍水神橋の橋台が着工されることになったのでその部分をつづいて昭和50年５月路線部分と護岸部分とに分けて慎重に発掘作業が進められた。

今回の事業費は全額工事主体である建設省から飯田市が委託事業として受け主管である飯田市教育委員会の直轄事業として行い，埋蔵文化財発掘調査記録保存事業が大きな成果を残してここに完了しました。

ただ49年12月に一部分を50年５月から８月にかけて路線対象部分及護岸対象部分の調査を行い，弥生，古墳，平安，中世各時代の住居址及方形周溝墓等と，それら各時代にわたる出土品が多量に発掘されたので関係官庁の理解の上整理作業の一部と報告書発行事業を51年度に延長を願い３ケ年間に亘る事業となりました。

この発掘調査は既に国が買収済の土地であったため天竜川上流工事事務所及飯田出張所の係官のご指示を得てほぼ全面的に支障無く調査することが出来感謝にたえない。

また調査期間中埋蔵文化財現地学習会として松尾小，竜丘小，下久堅小，緑ケ丘中の各学校の協力を得２日間に延300余名の中小学生が発掘作業に参加したことは大きな成果で，今後埋蔵文化財を理解する上にも意義があったものと考えられるし，飯田高校考古学研究クラブ，阿智高校の郷土クラブの高校生が集団で発掘調査に参加されたことも意義深いものがある。

調査体制は，団長に佐藤甦信先生，調査員に今村正次先生，酒井幸則先生，吉沢輝人先生，林登美人先生をお願いし，先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的な協力と指導者の飯田女子短大，大沢和夫先生，県教育委員会文化課指導主事，今村善興先生，桐原健先生の適切な助言をいただき，出土品の整理復元は佐藤先生と今村正次先生が当られ，また報告書の執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもってとりくまれ，歴史的環境を大沢先生，自然的環境を矢亀先生に執筆を願い，ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和51年11月

飯田市教育委員会

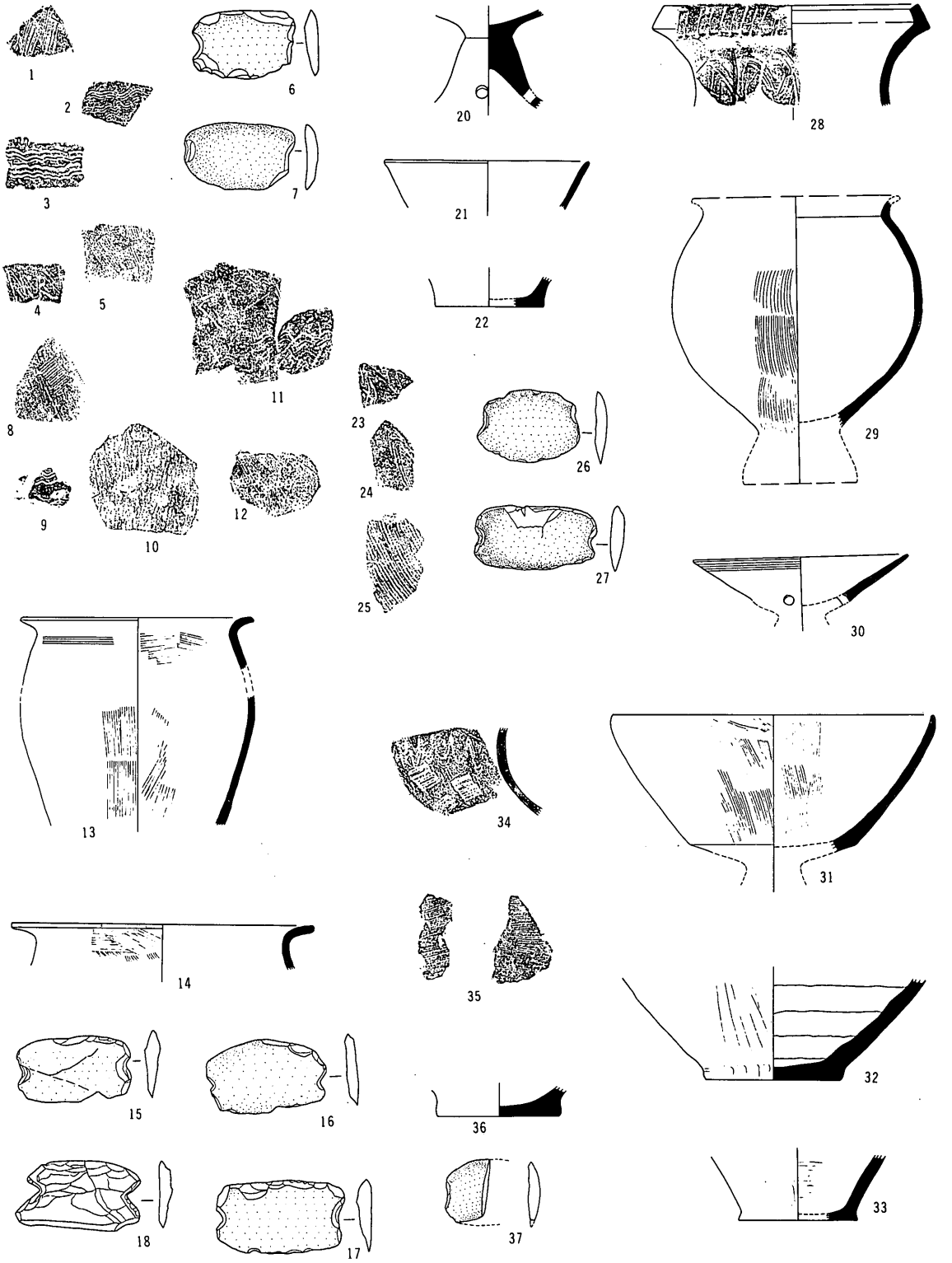


図54　清水２号・４号・５号・７号・８号・９号・10号住居址出土遺物（１：４）
（１～７…２号住，８～10…４号住，11・12…５号住，13～19…７号住，20～27…８号住，28～33…９号住，34～37…10号住）

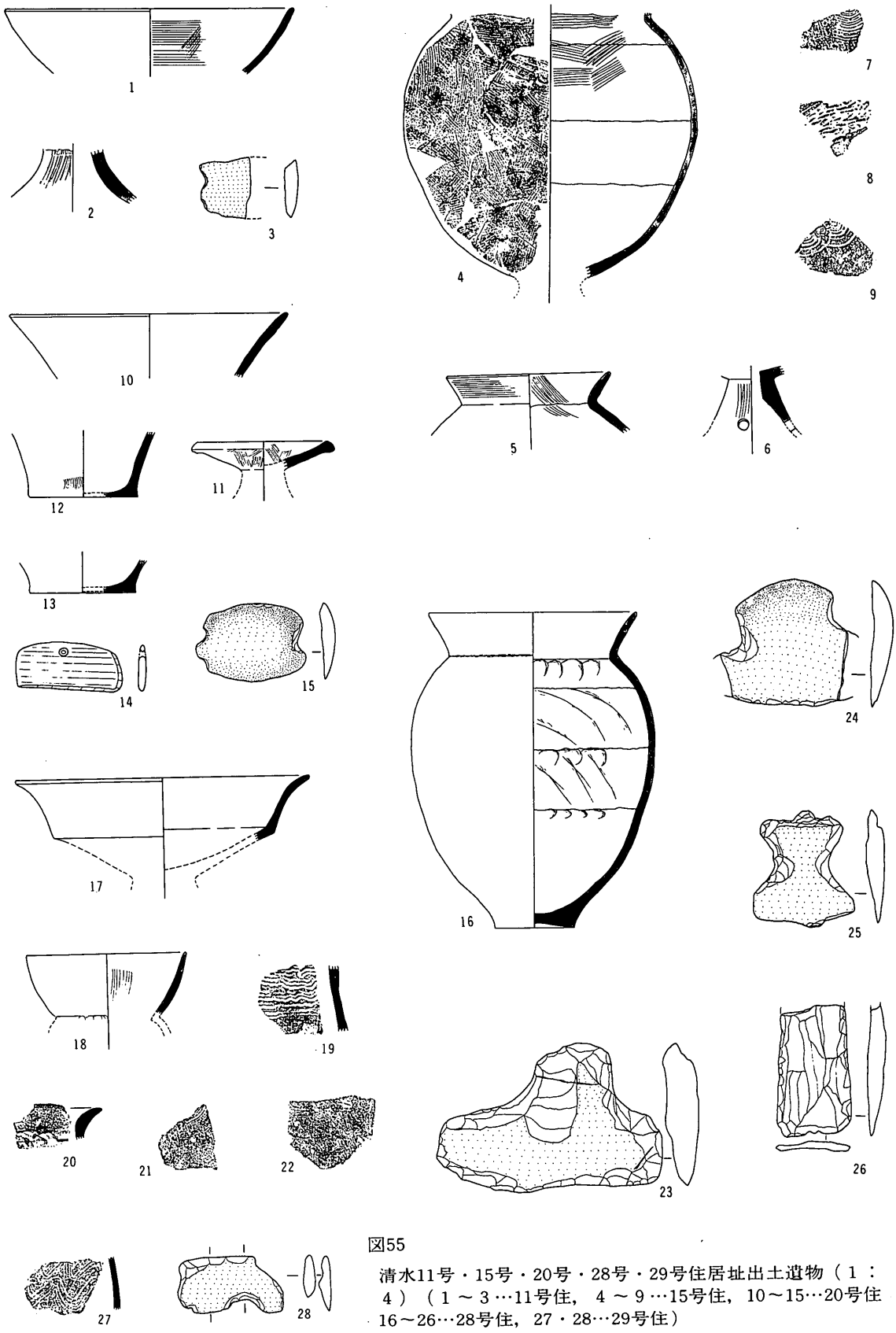


図55

清水11号・15号・20号・28号・29号住居址出土遺物（1：4）（1～3…11号住，4～9…15号住，10～15…20号住 16～26…28号住，27・28…29号住）

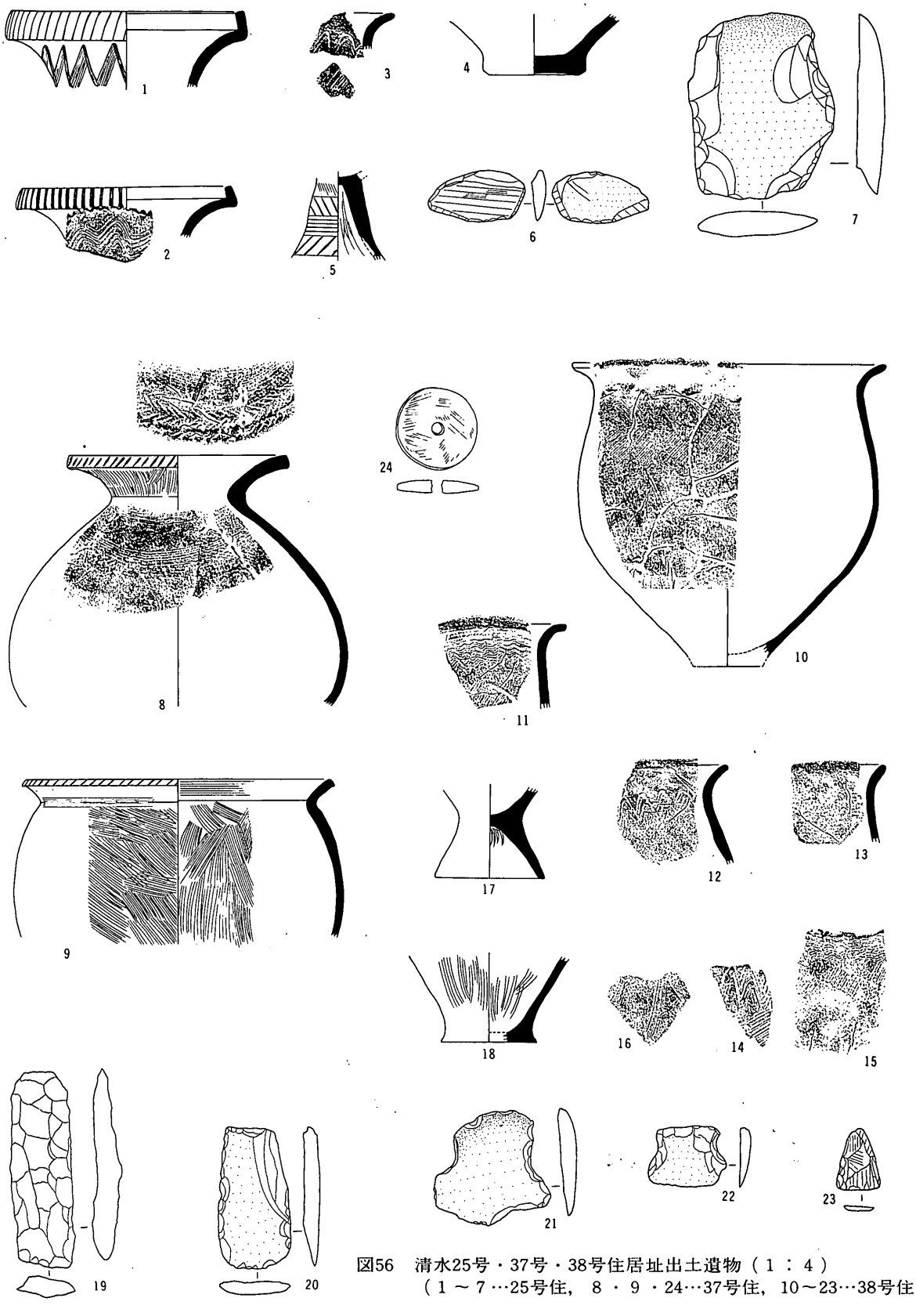


図56　清水25号・37号・38号住居址出土遺物（１：４）
（１～７…25号住，８・９・24…37号住，10～23…38号住）

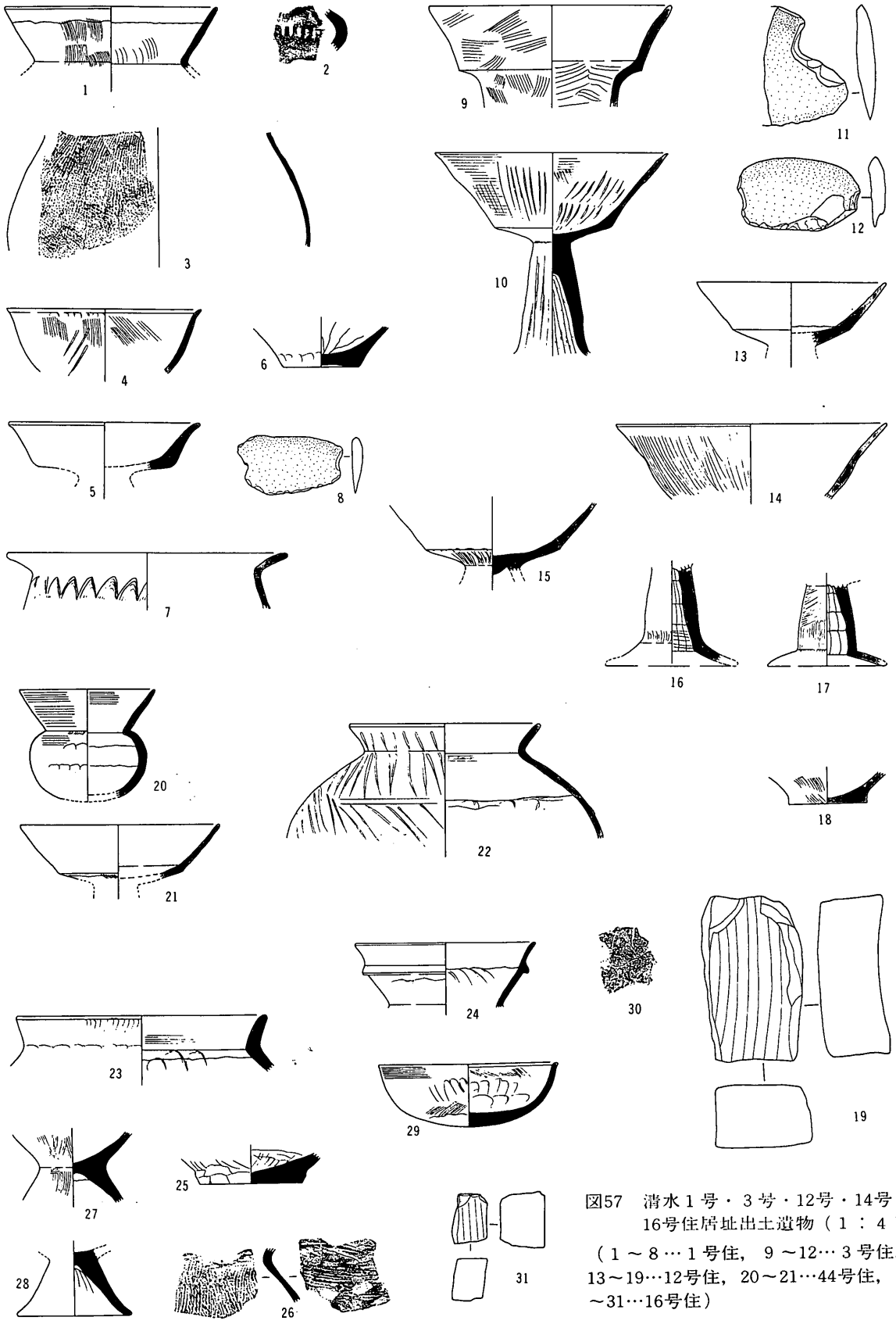


図57　清水1号・3号・12号・14号
16号住居址出土遺物（1：4）
（1～8…1号住，9～12…3号住，13～19…12号住，20～21…44号住，22～31…16号住）

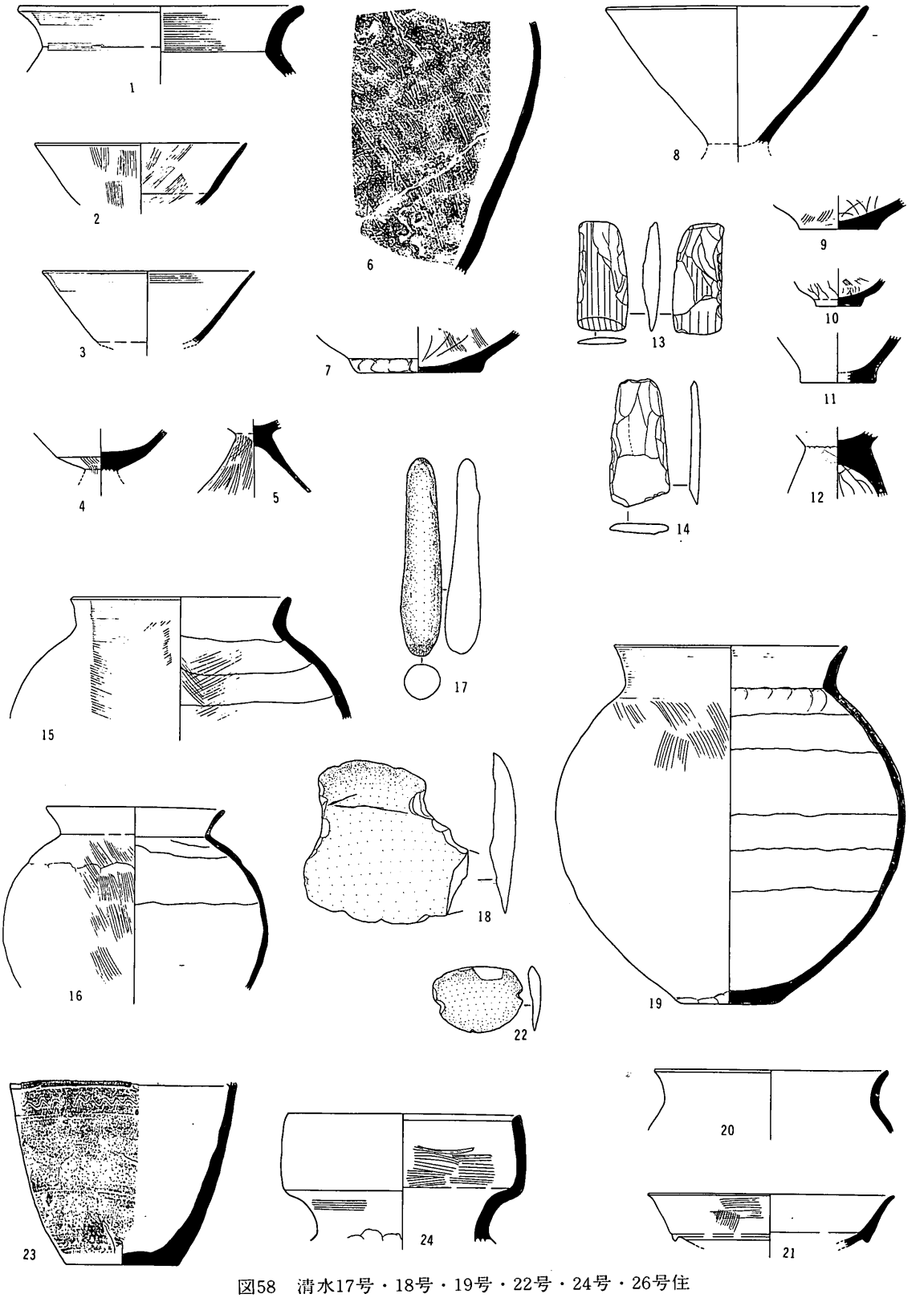


図58　清水17号・18号・19号・22号・24号・26号住
居址出土遺物（1：4）
（1～7…17号住，8～14…18号住，
15～18…19号住，19～21…22号住，22
24号住，23・24…26号住）

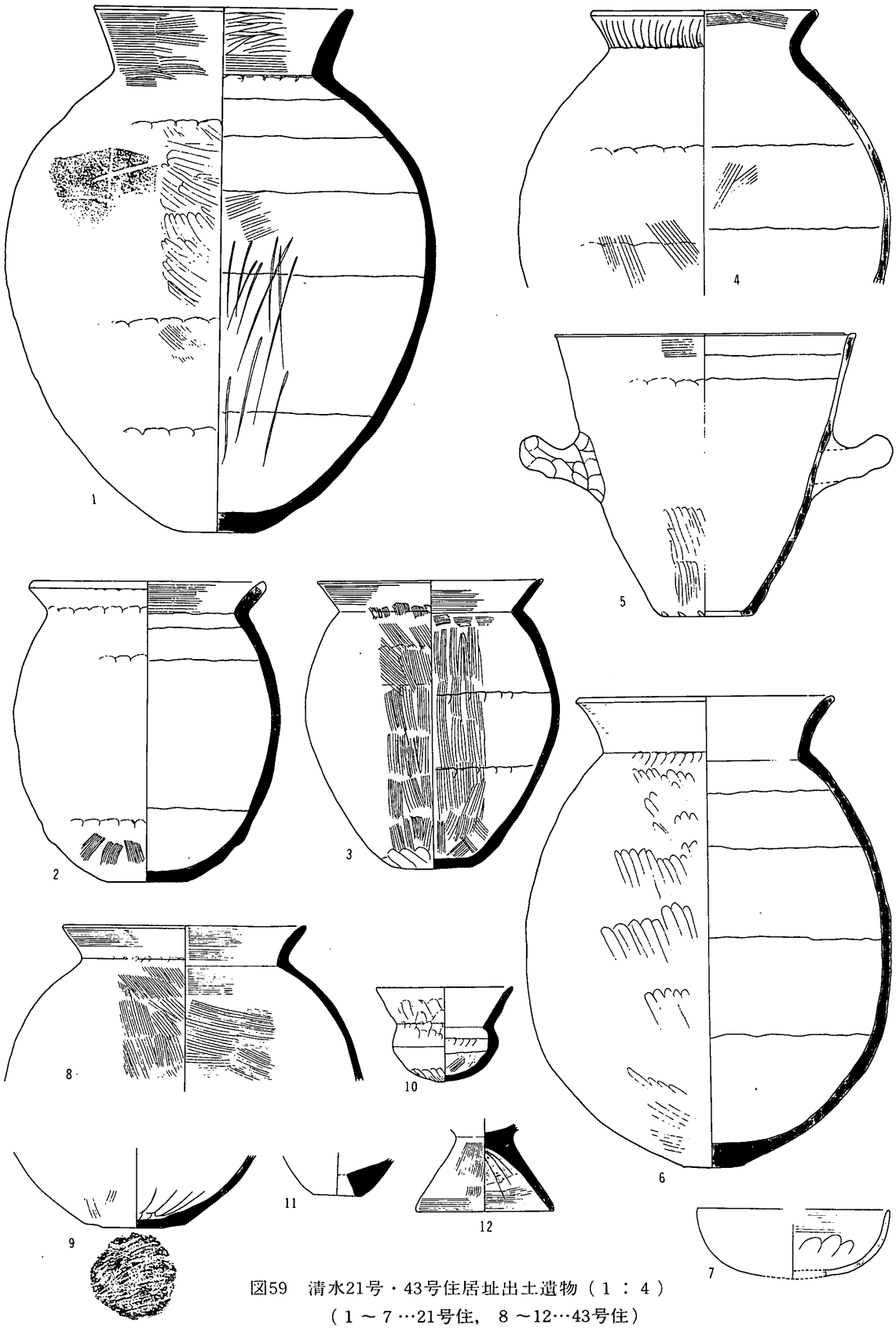


図59　清水21号・43号住居址出土遺物（１：４）
（１～７…21号住，８～12…43号住）

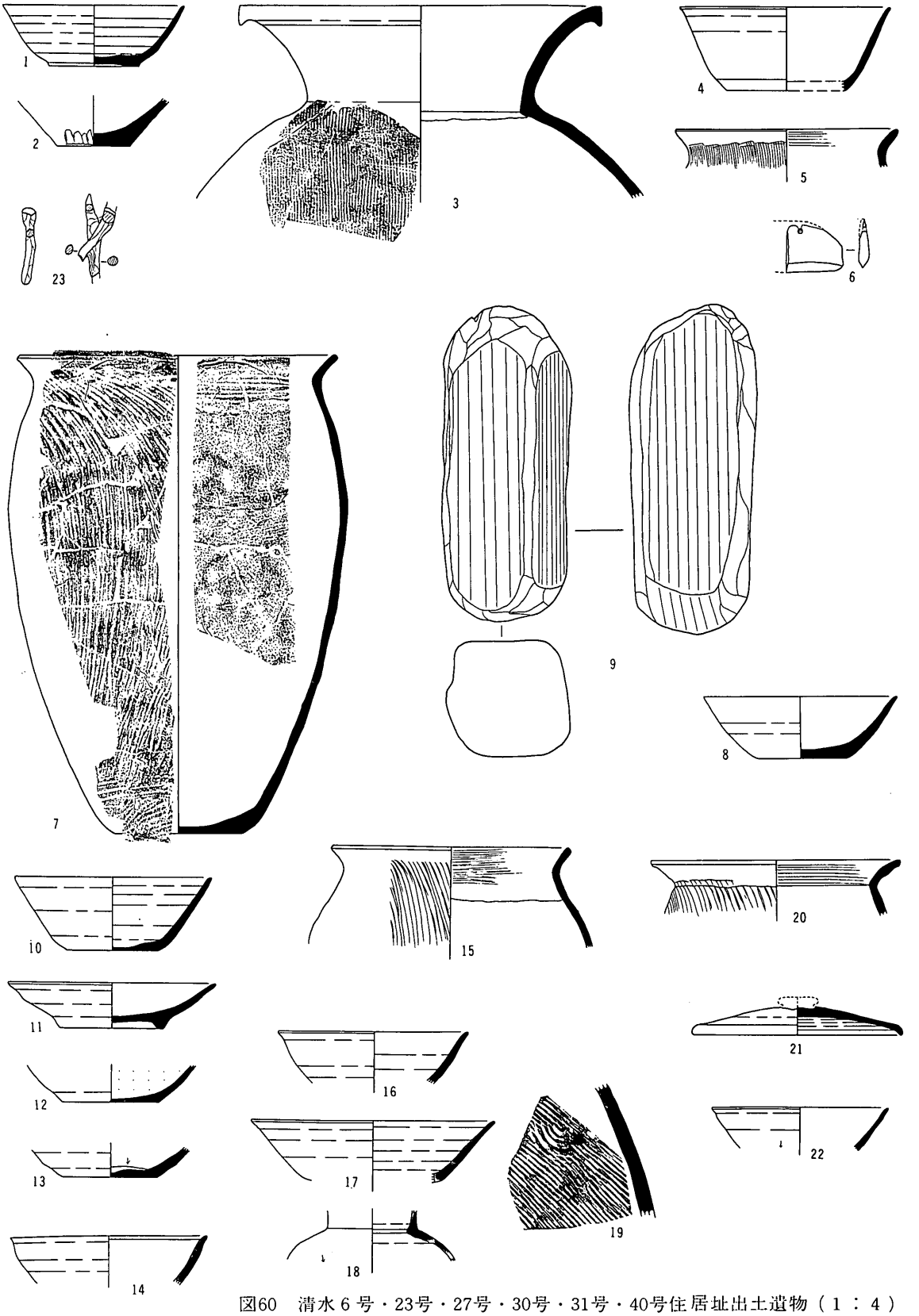


図60　清水６号・23号・27号・30号・31号・40号住居址出土遺物（１：４）
（1.2.23…６号住，３～６…23号住，７～９…27号住，10～14…30号住，
15～19…31号住，20～22…40号住）

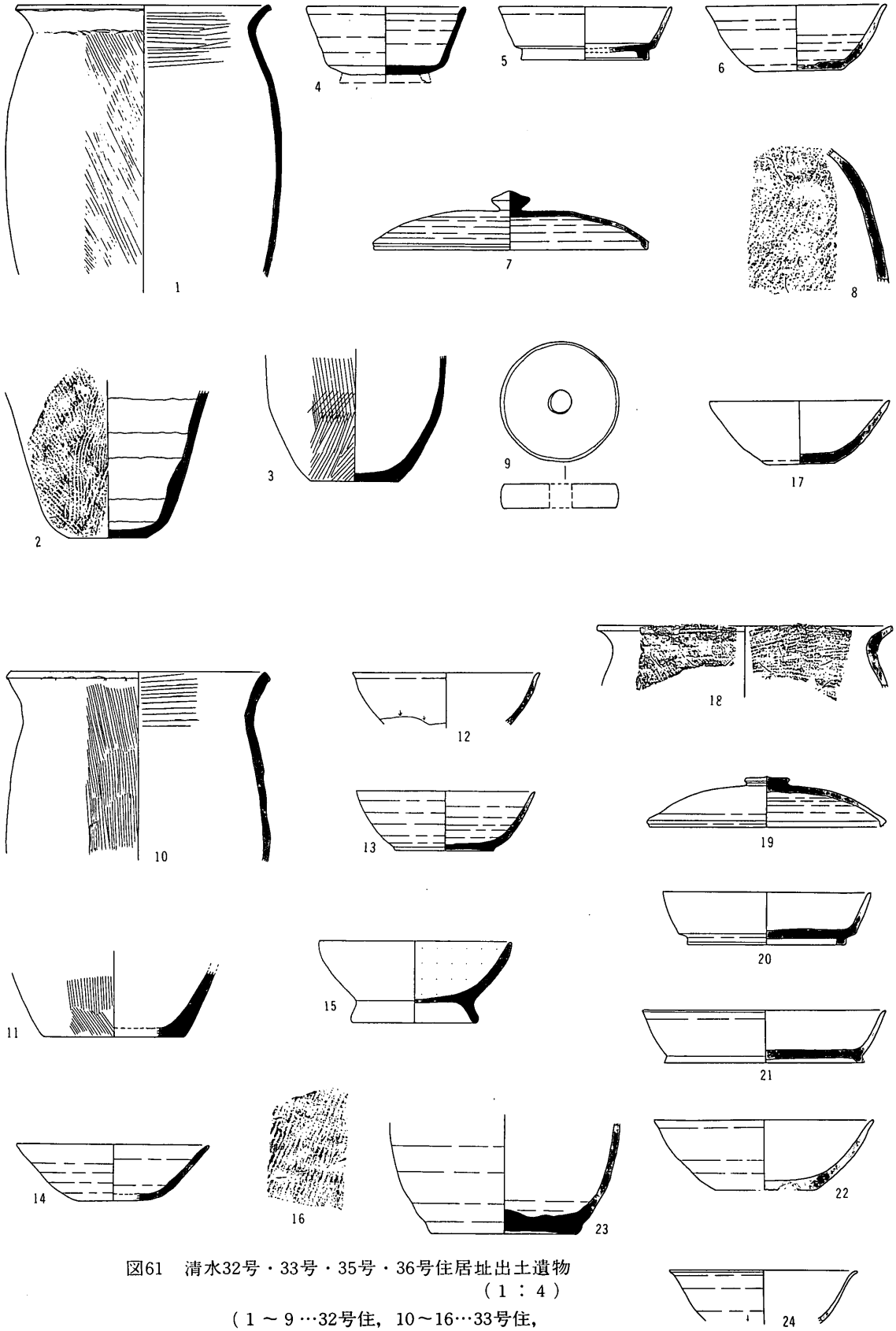


図61　清水32号・33号・35号・36号住居址出土遺物
（1：4）
（1～9…32号住，10～16…33号住，
17…35号住，18～24…36号住）

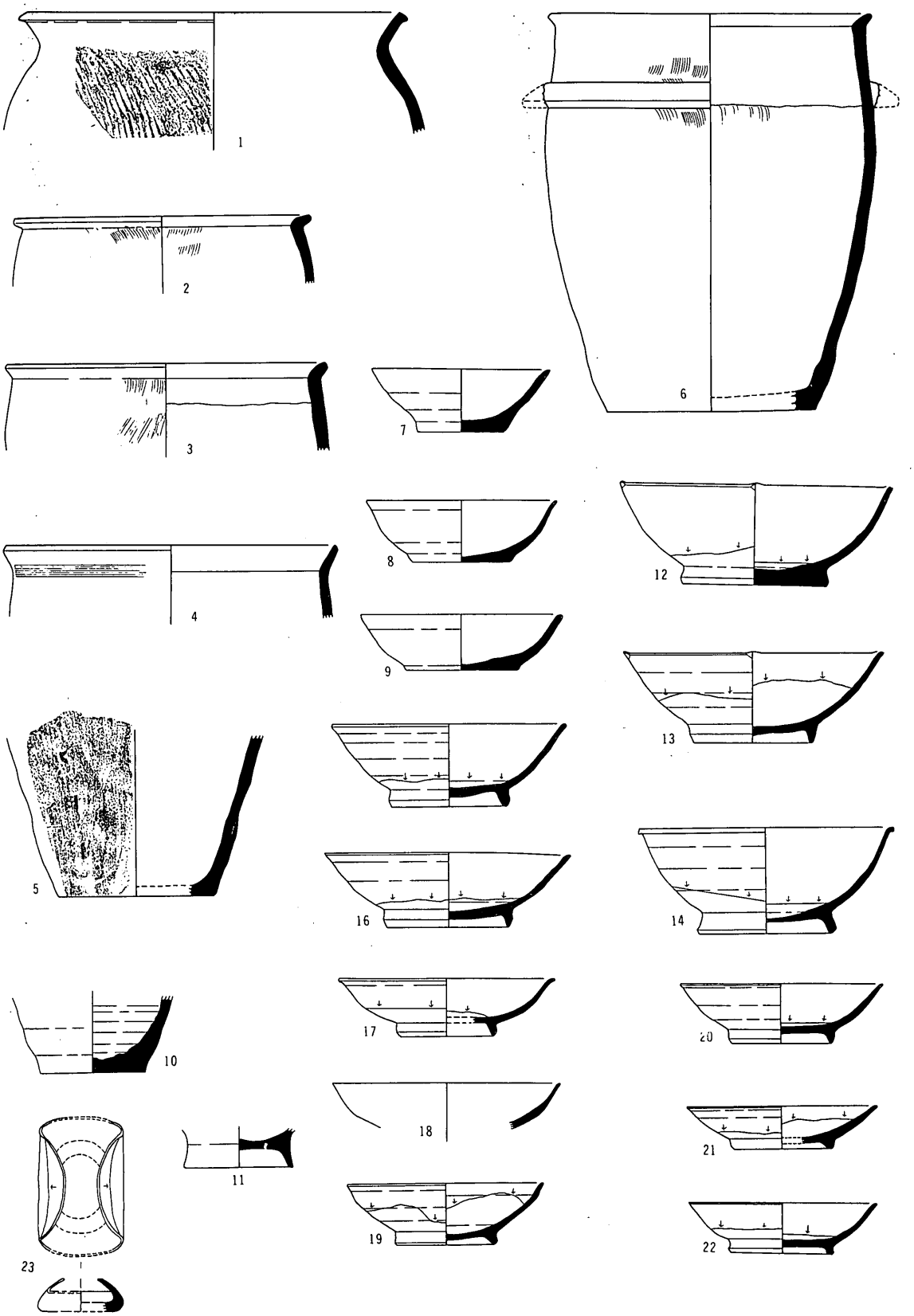


図62　清水34号住居址出土遺物（１：４）

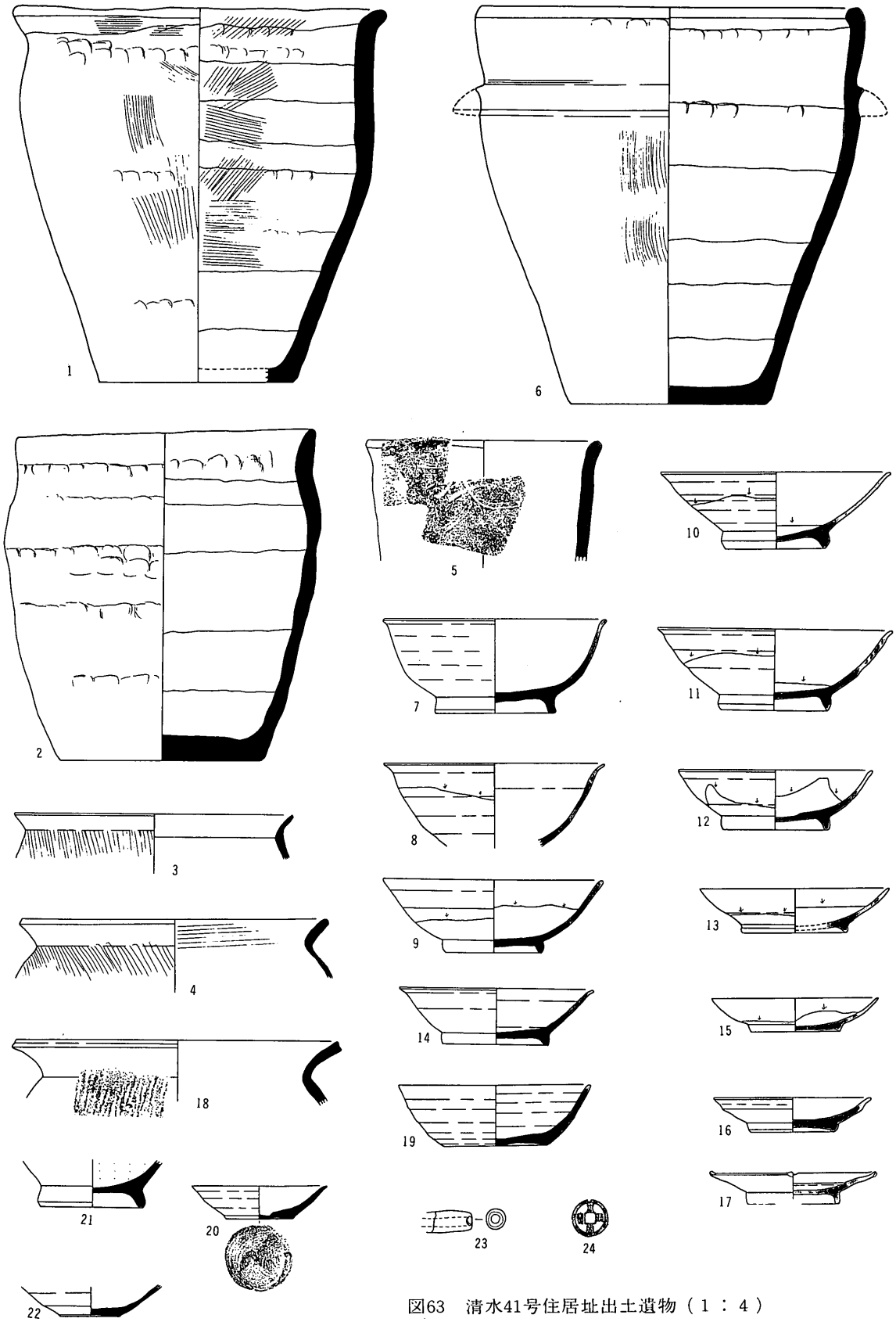


図63　清水41号住居址出土遺物（１：４）

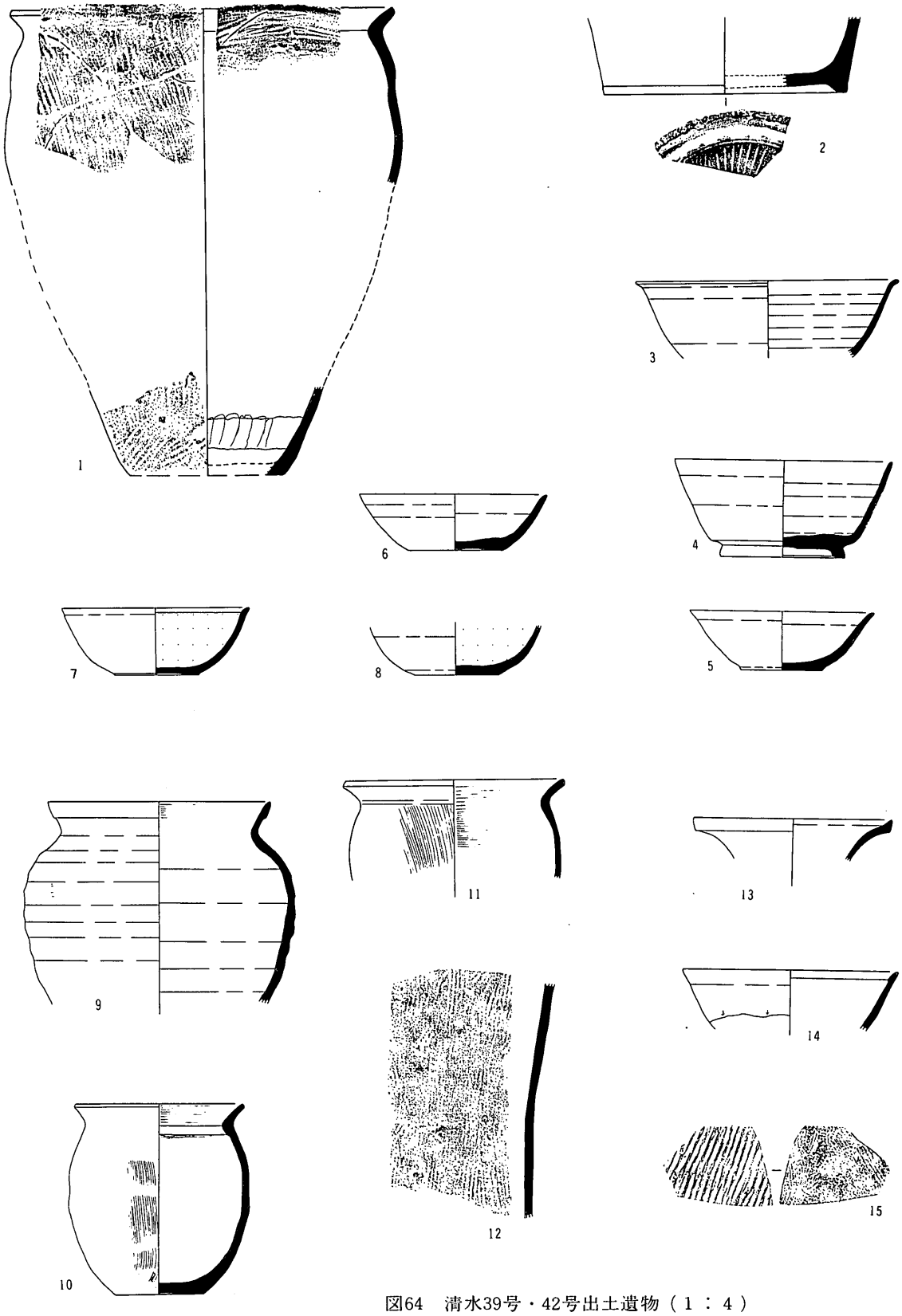


図64　清水39号・42号出土遺物（１：４）

（１～８…39号住，９～15…42号住）

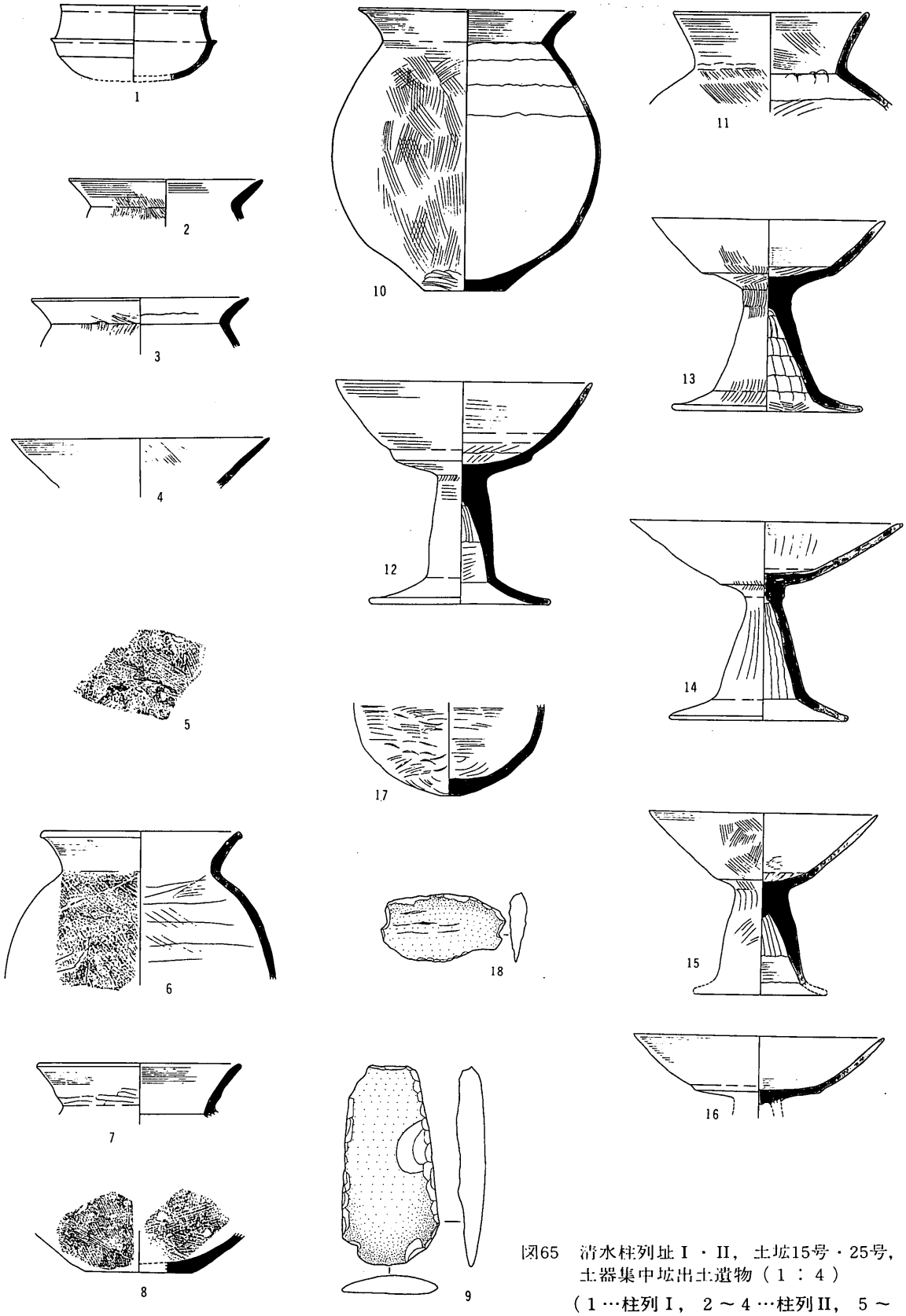


図65　清水柱列址Ⅰ・Ⅱ，土坑15号・25号，土器集中坑出土遺物（1：4）
（1…柱列Ⅰ，2～4…柱列Ⅱ，5～6…土15，7～9…土25，10～18…土器集中坑）

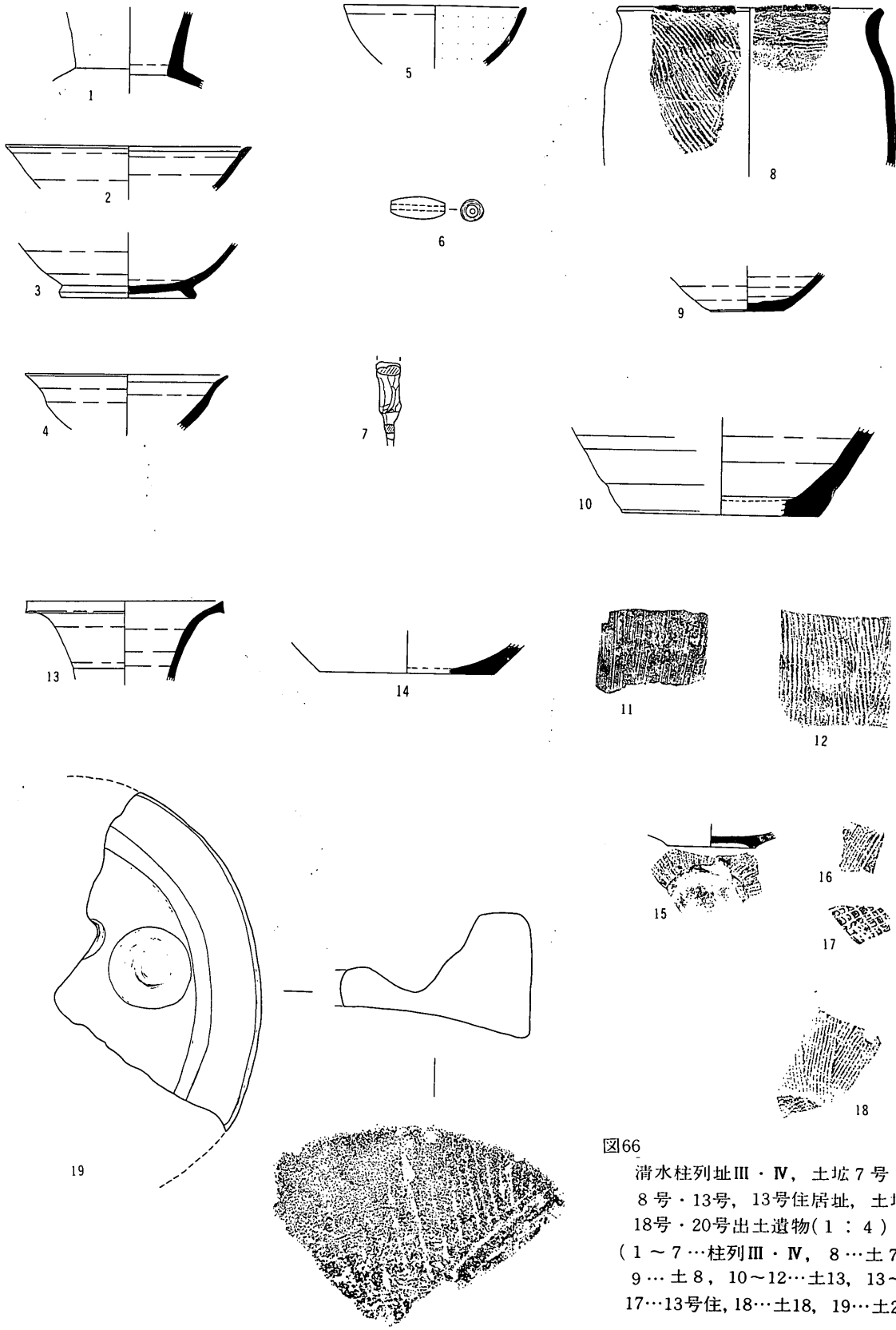


図66
清水柱列址Ⅲ・Ⅳ，土坑７号・８号・13号，13号住居址，土坑18号・20号出土遺物（１：４）
（１～７…柱列Ⅲ・Ⅳ，８…土７，９…土８，10～12…土13，13～17…13号住，18…土18，19…土20）

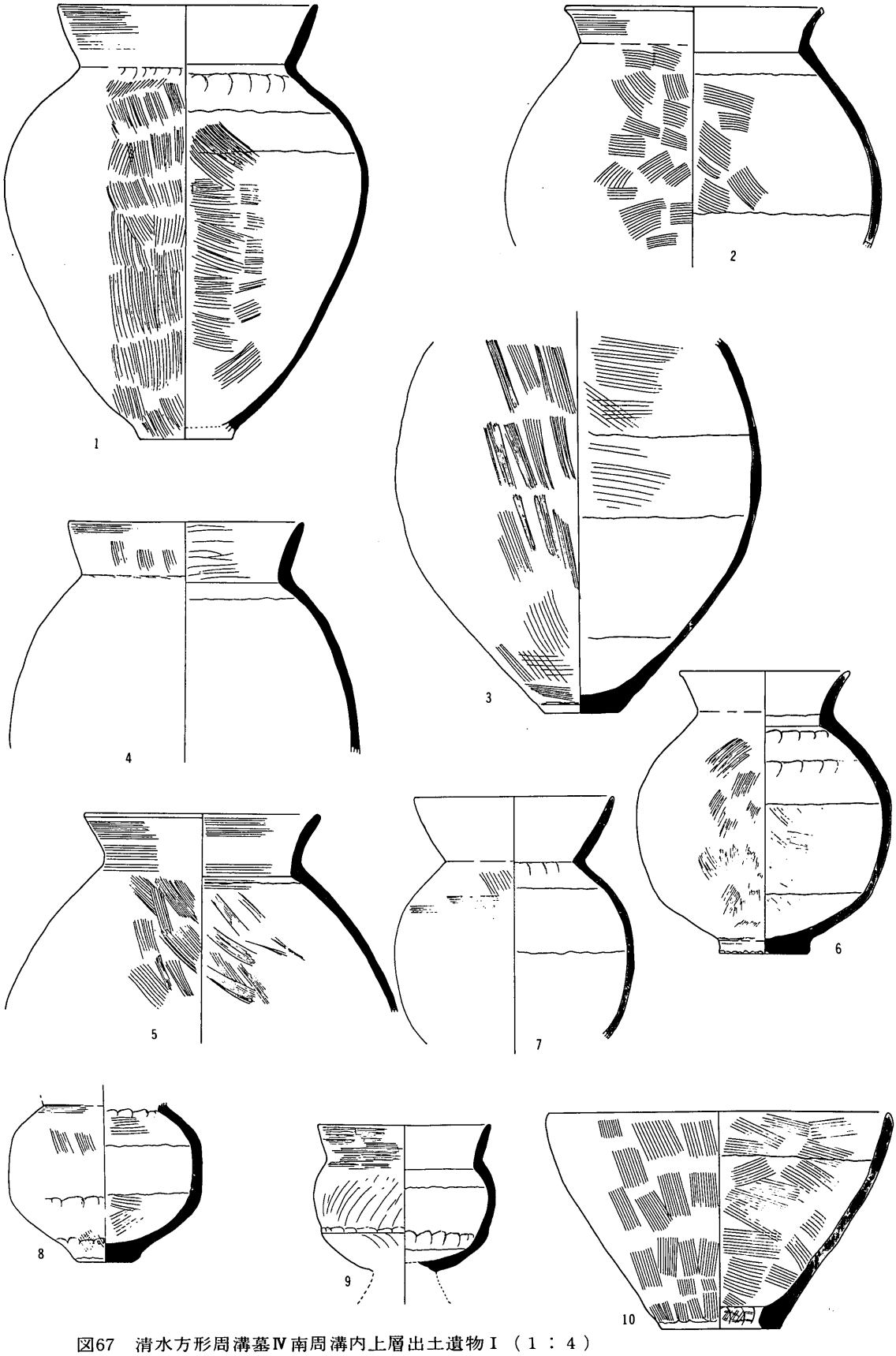


図67　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内上層出土遺物Ⅰ（1：4）

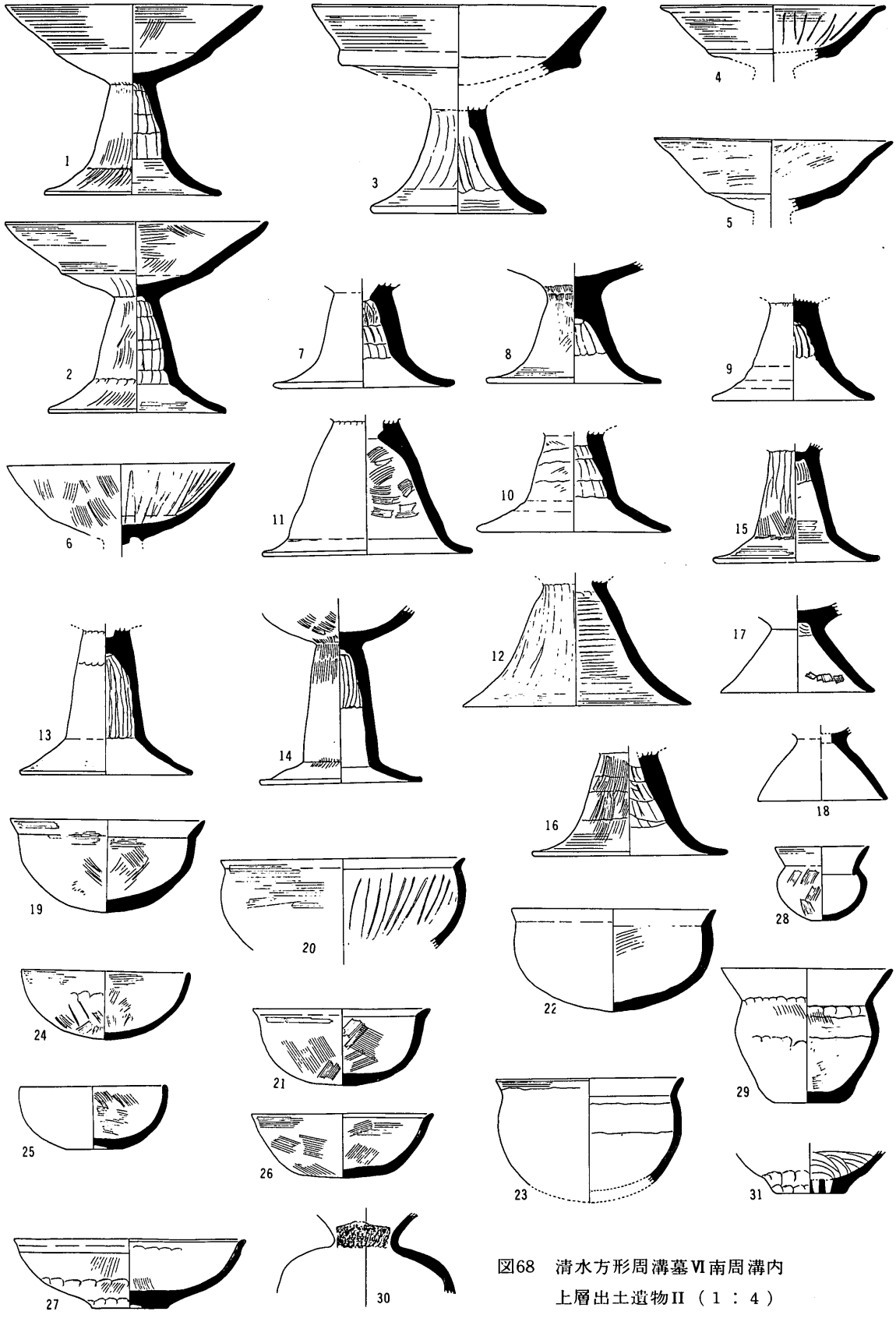


図68　清水方形周溝墓Ⅵ南周溝内
上層出土遺物Ⅱ（1：4）

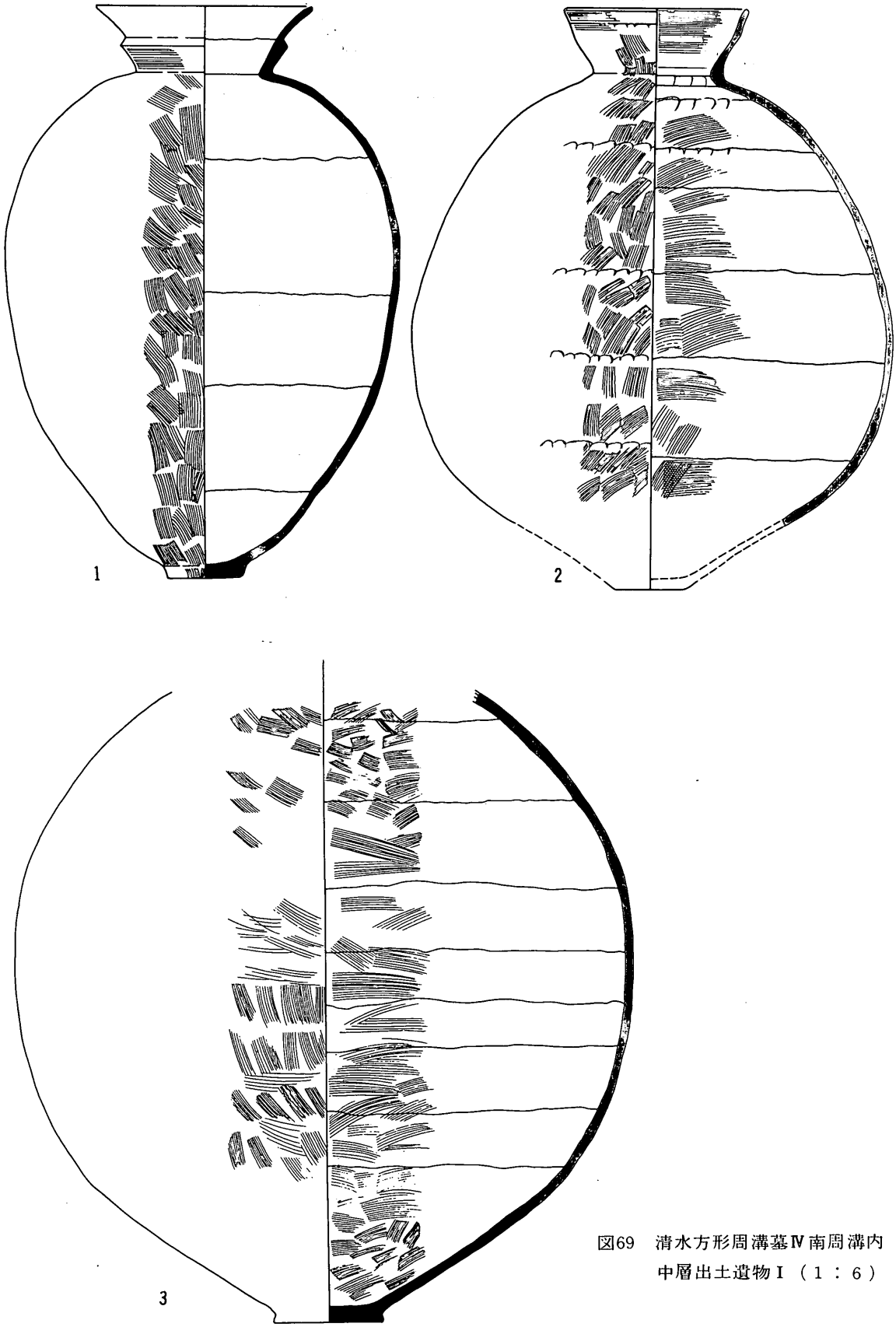


図69　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内
中層出土遺物Ⅰ（1：6）

図70　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内中層出土遺物Ⅱ（１：４）

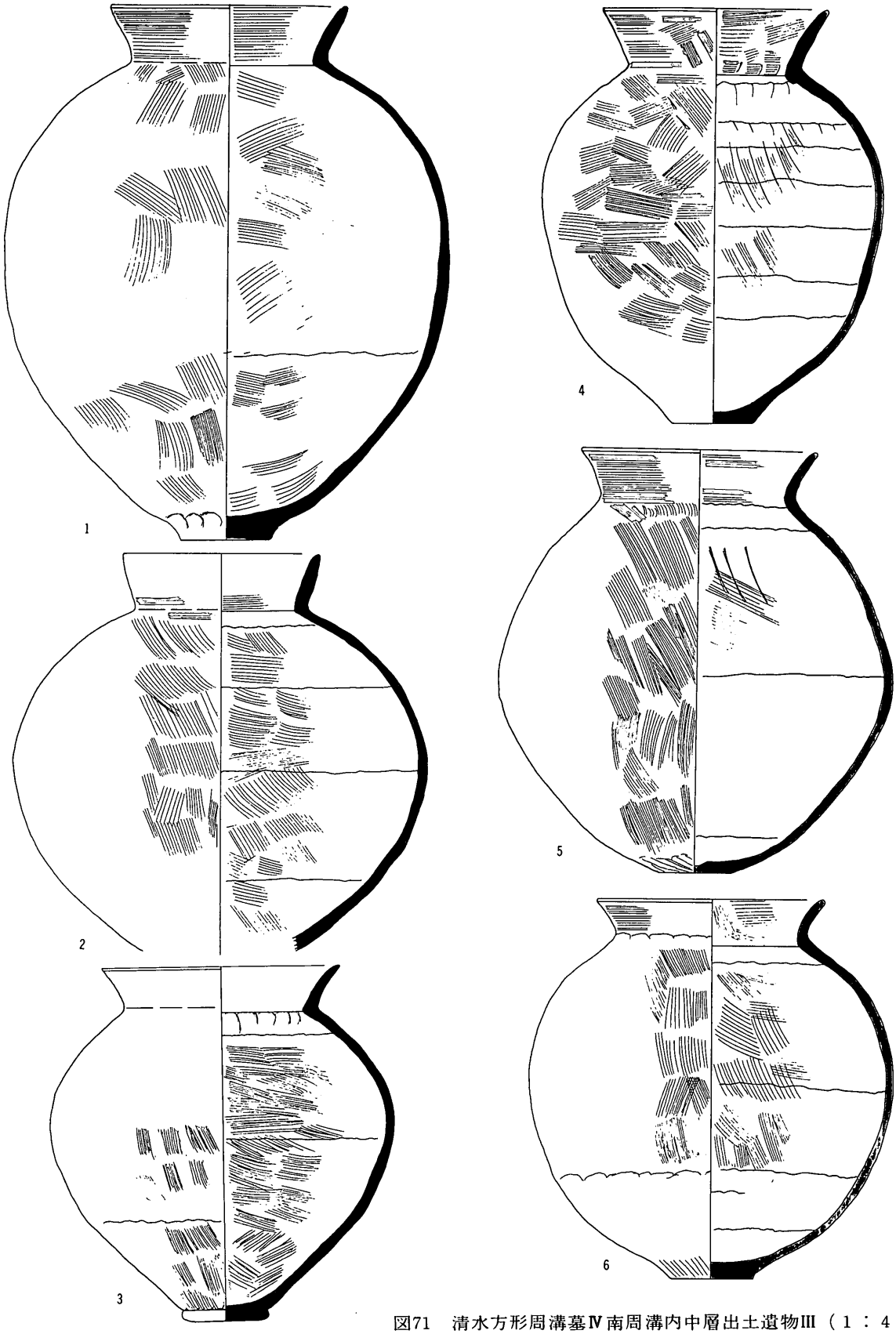


図71　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内中層出土遺物Ⅲ（１：４）

図72　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内中層出土遺物Ⅳ（1：4）

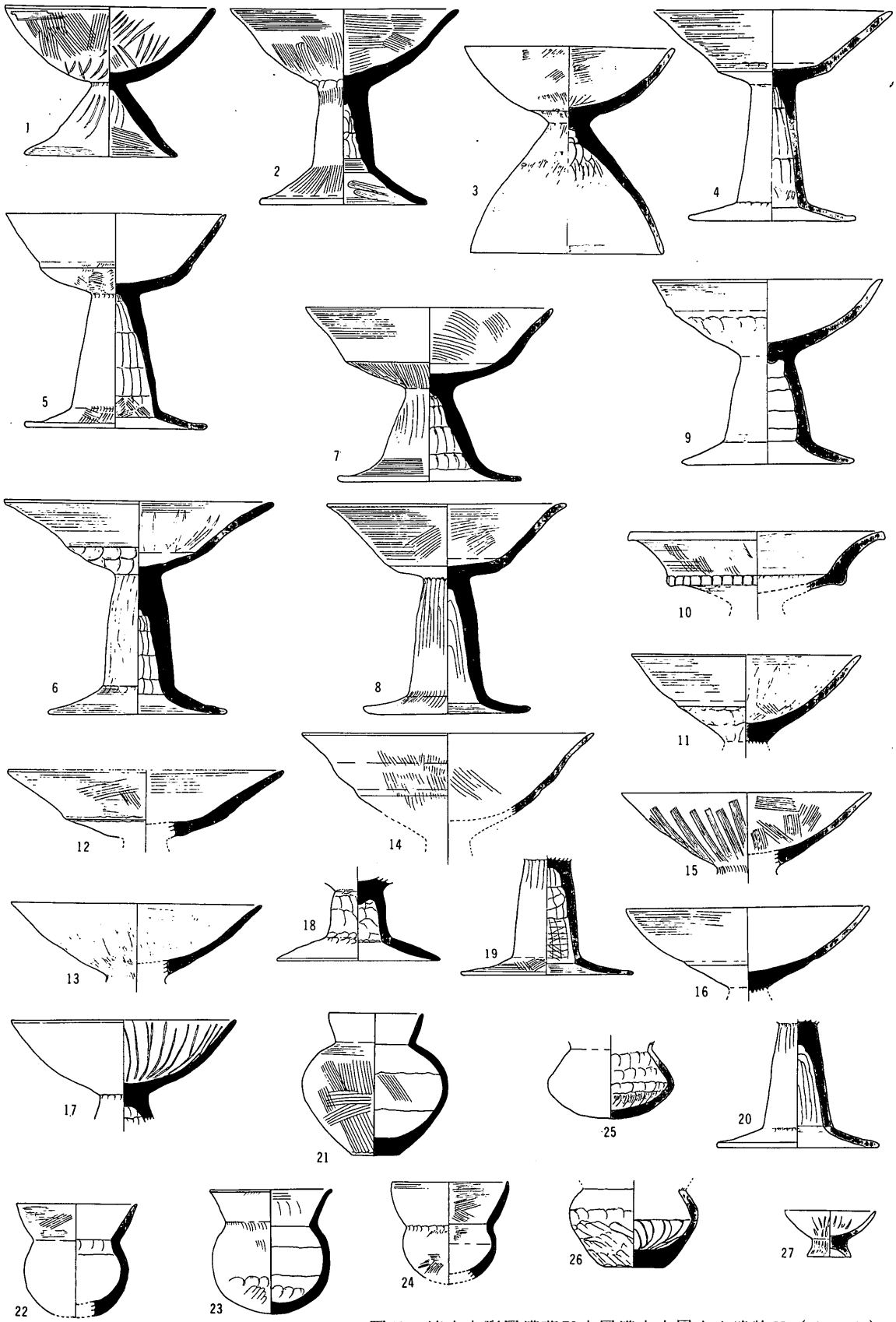


図73　清水方形周溝墓Ⅳ南周溝内中層出土遺物Ⅴ（1：4）

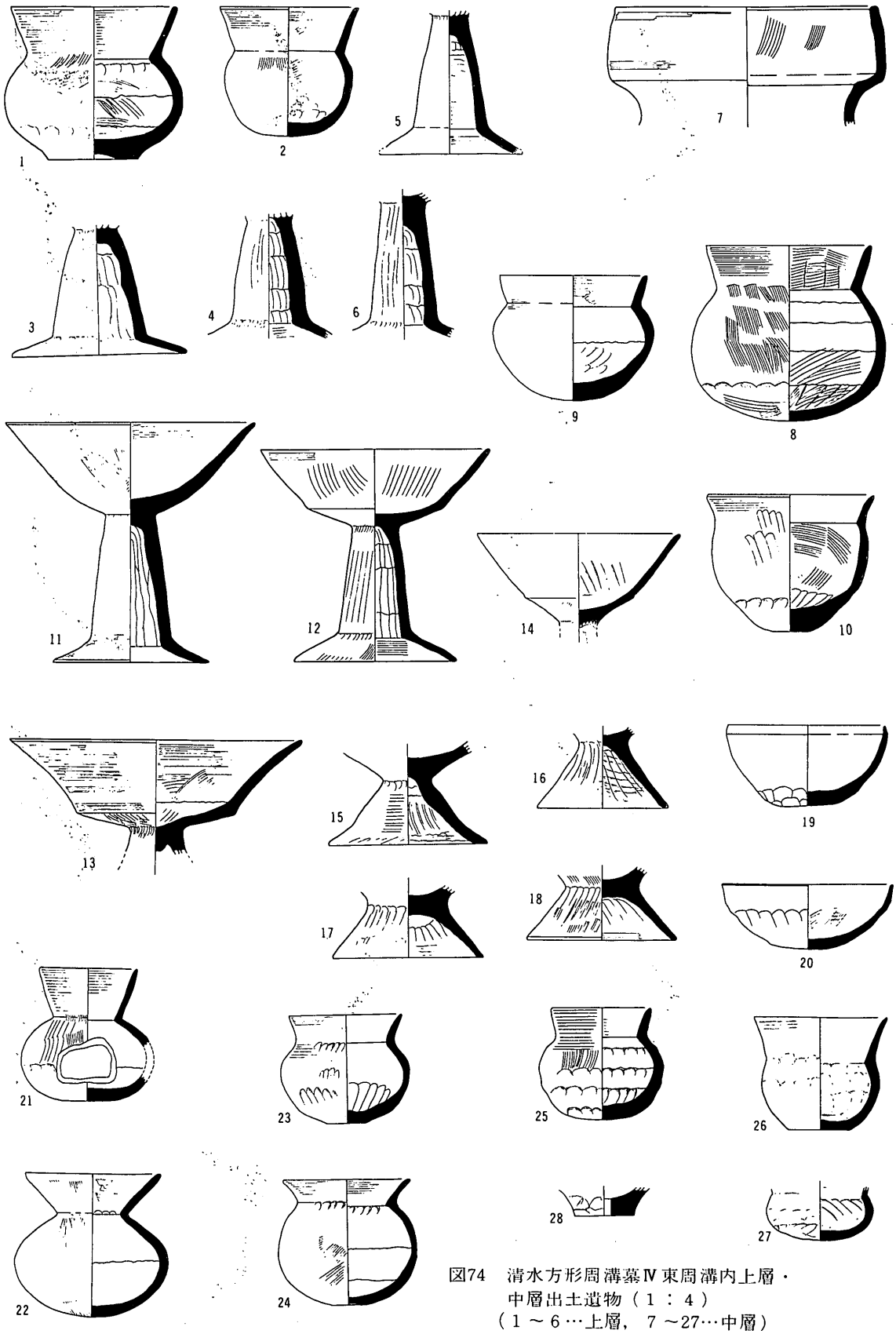


図74　清水方形周溝墓Ⅳ東周溝内上層・
中層出土遺物（１：４）
（１～６…上層，７～27…中層）

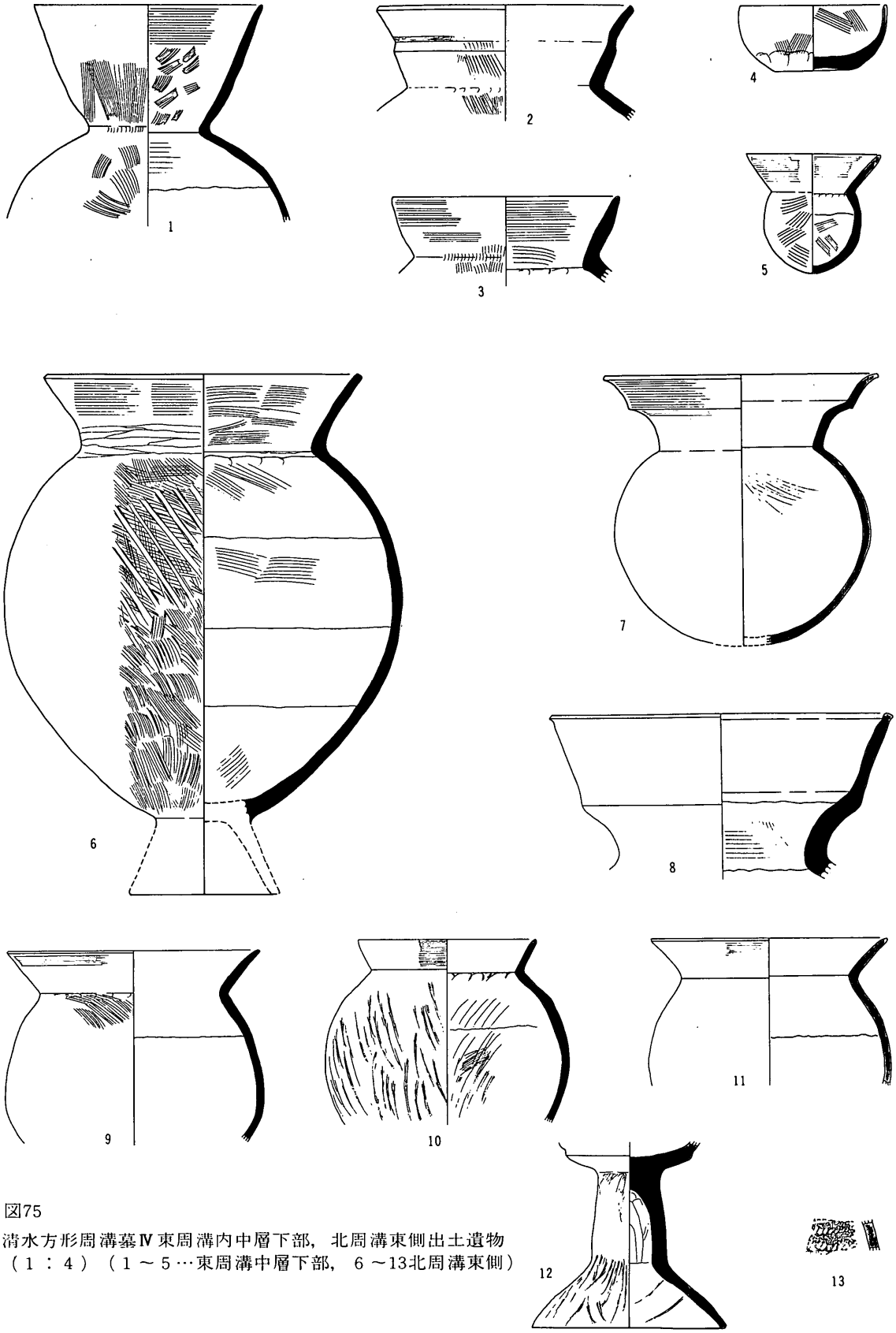


図75

清水方形周溝墓Ⅳ東周溝内中層下部，北周溝東側出土遺物
（1：4）（1～5…東周溝中層下部，6～13北周溝東側）

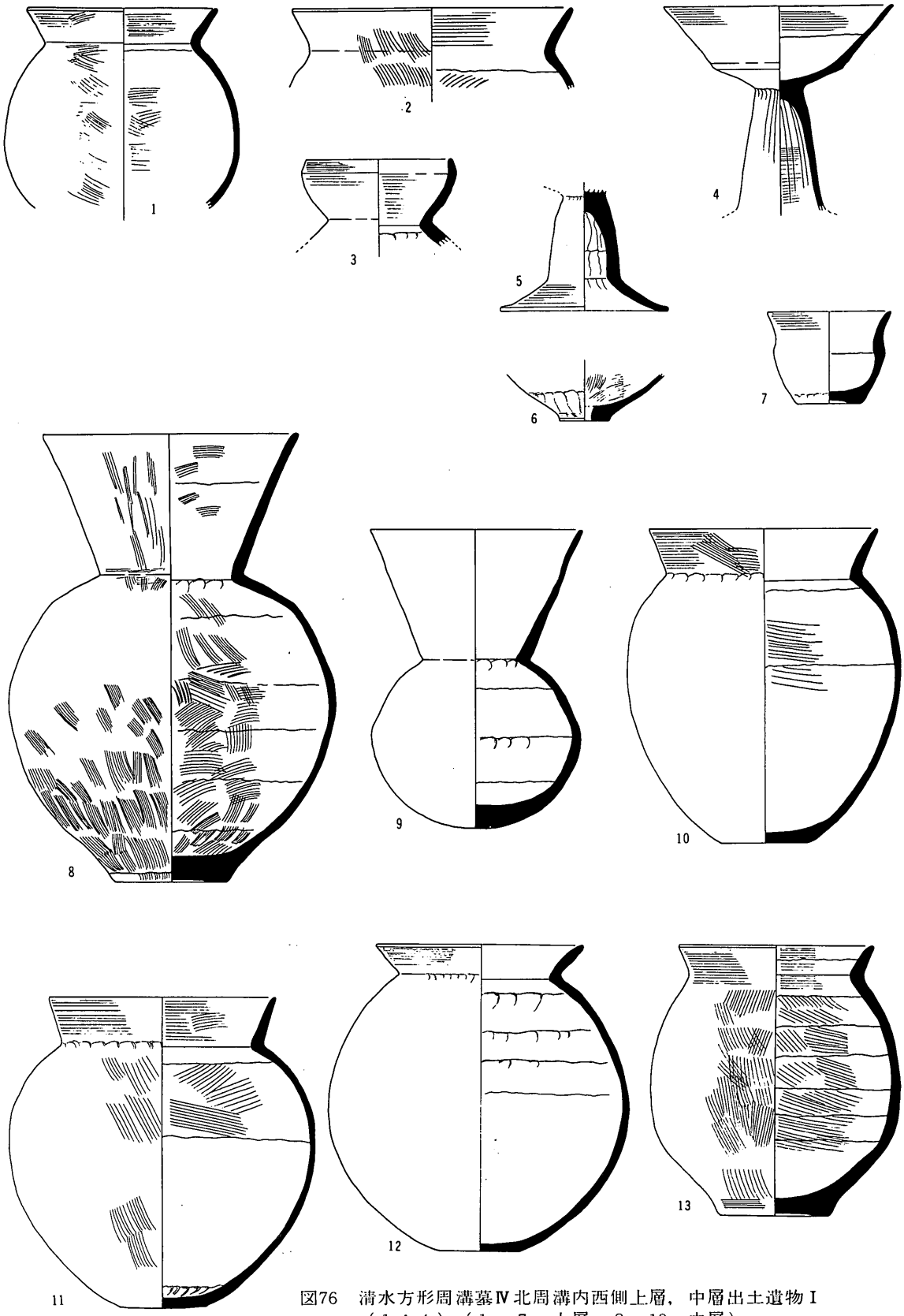


図76　清水方形周溝墓Ⅳ北周溝内西側上層，中層出土遺物Ⅰ
（1：4）（1～7…上層，8～13…中層）

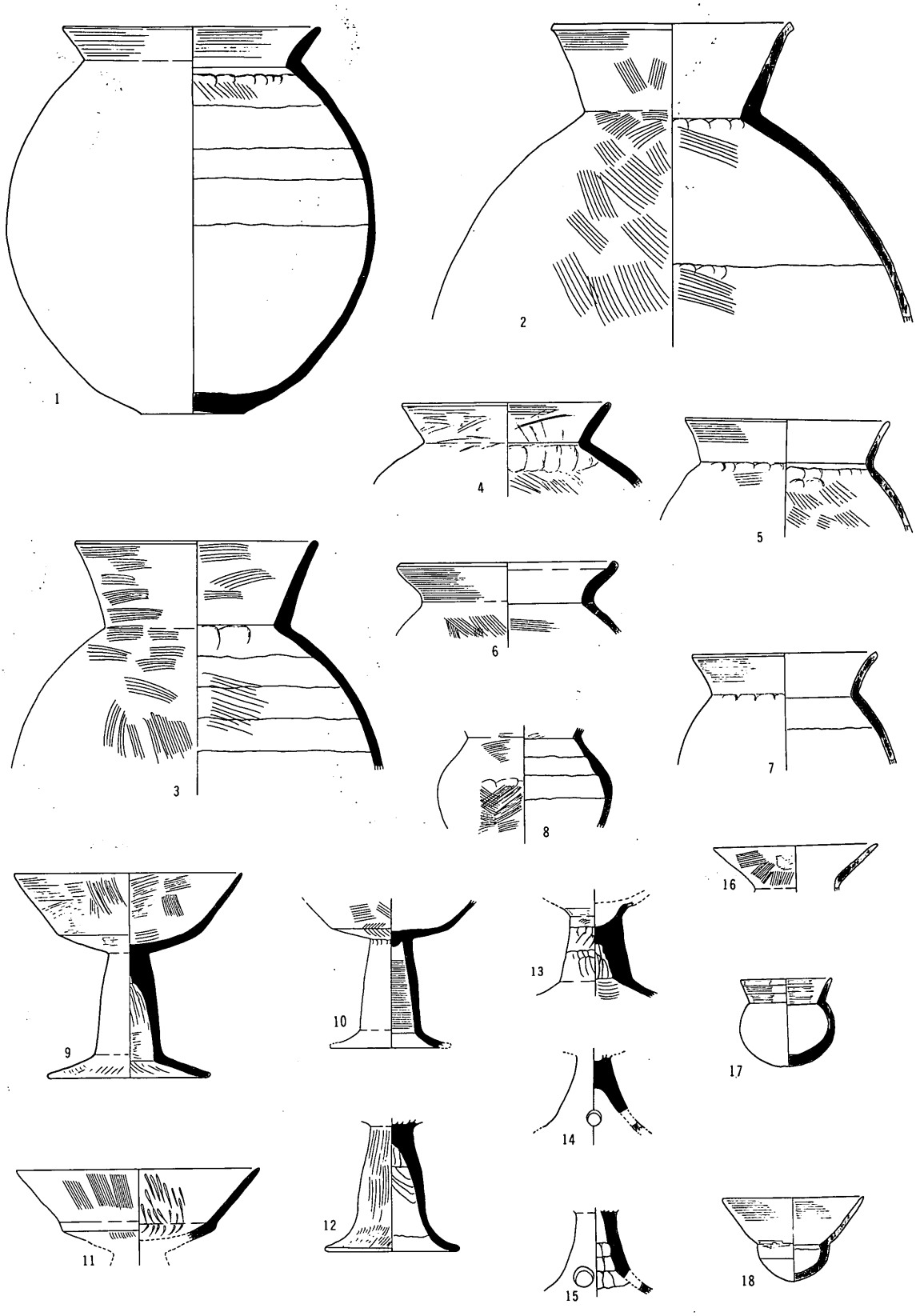


図77　清水方形周溝墓Ⅳ北周溝内中層出土遺物Ⅱ（１：４）

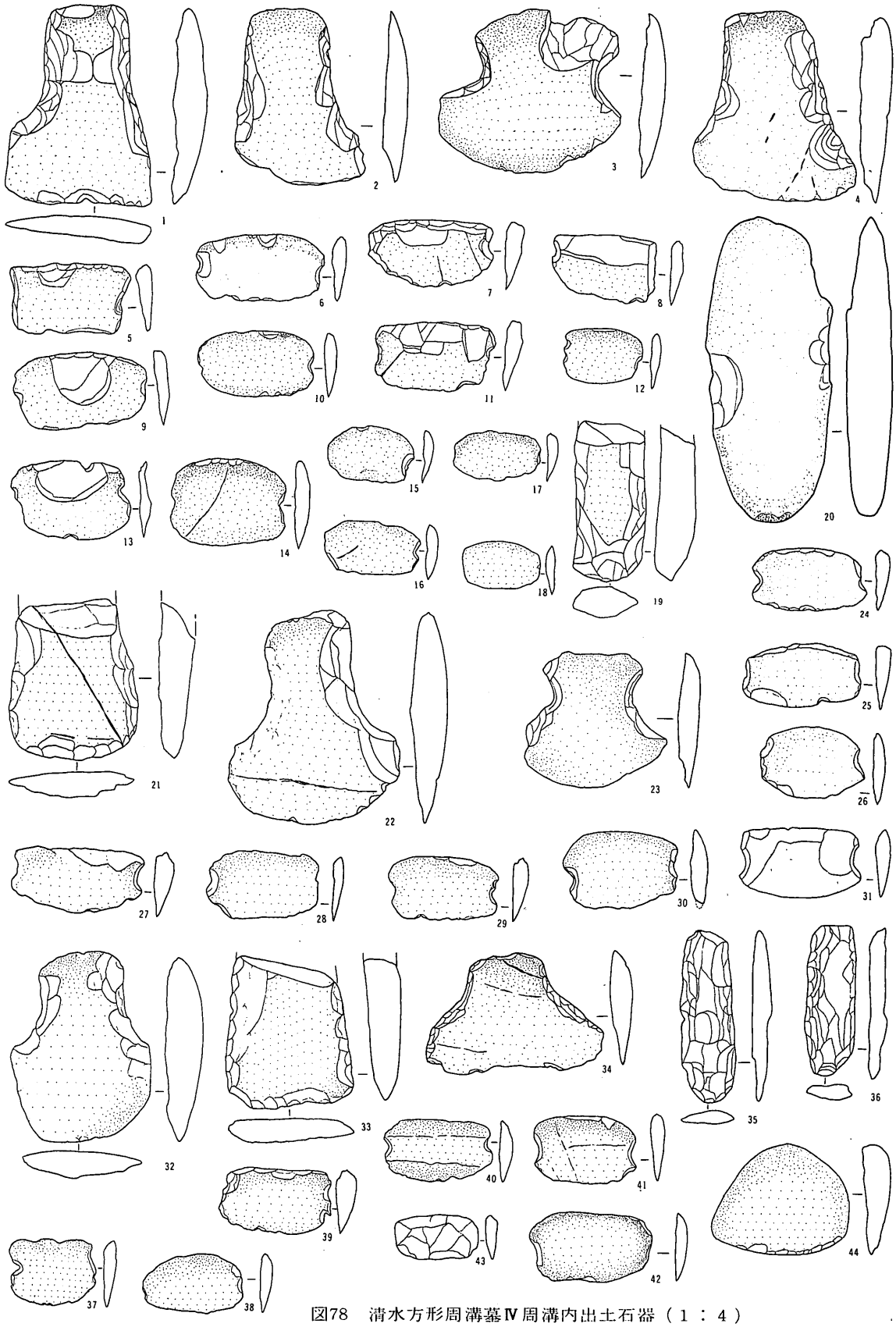


図78　清水方形周溝墓Ⅳ周溝内出土石器（１：４）
（１～20…南周溝，21～31…東周溝，32～44…北周溝）

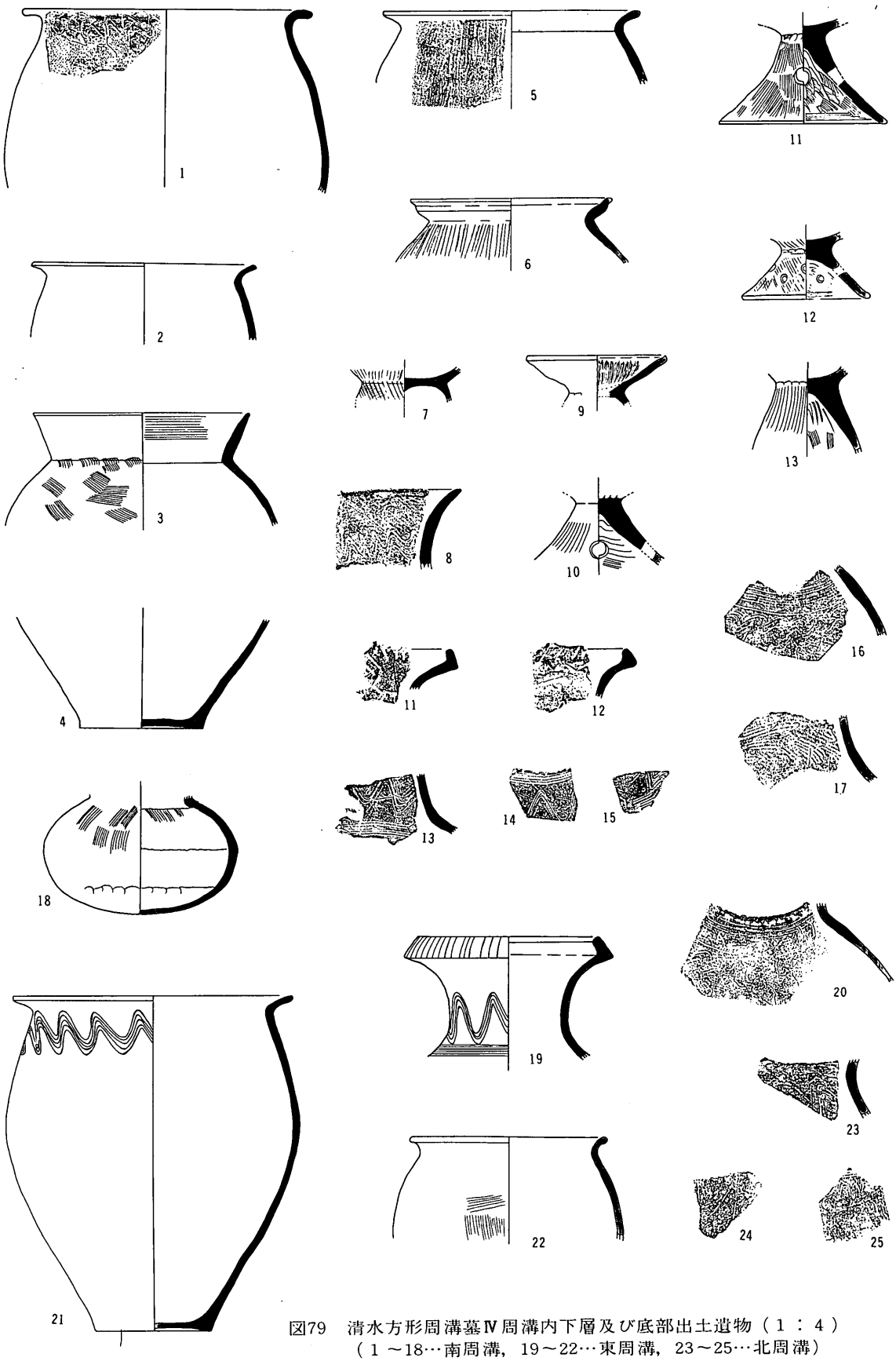


図79　清水方形周溝墓Ⅳ周溝内下層及び底部出土遺物（１：４）
（１～18…南周溝，19～22…東周溝，23～25…北周溝）

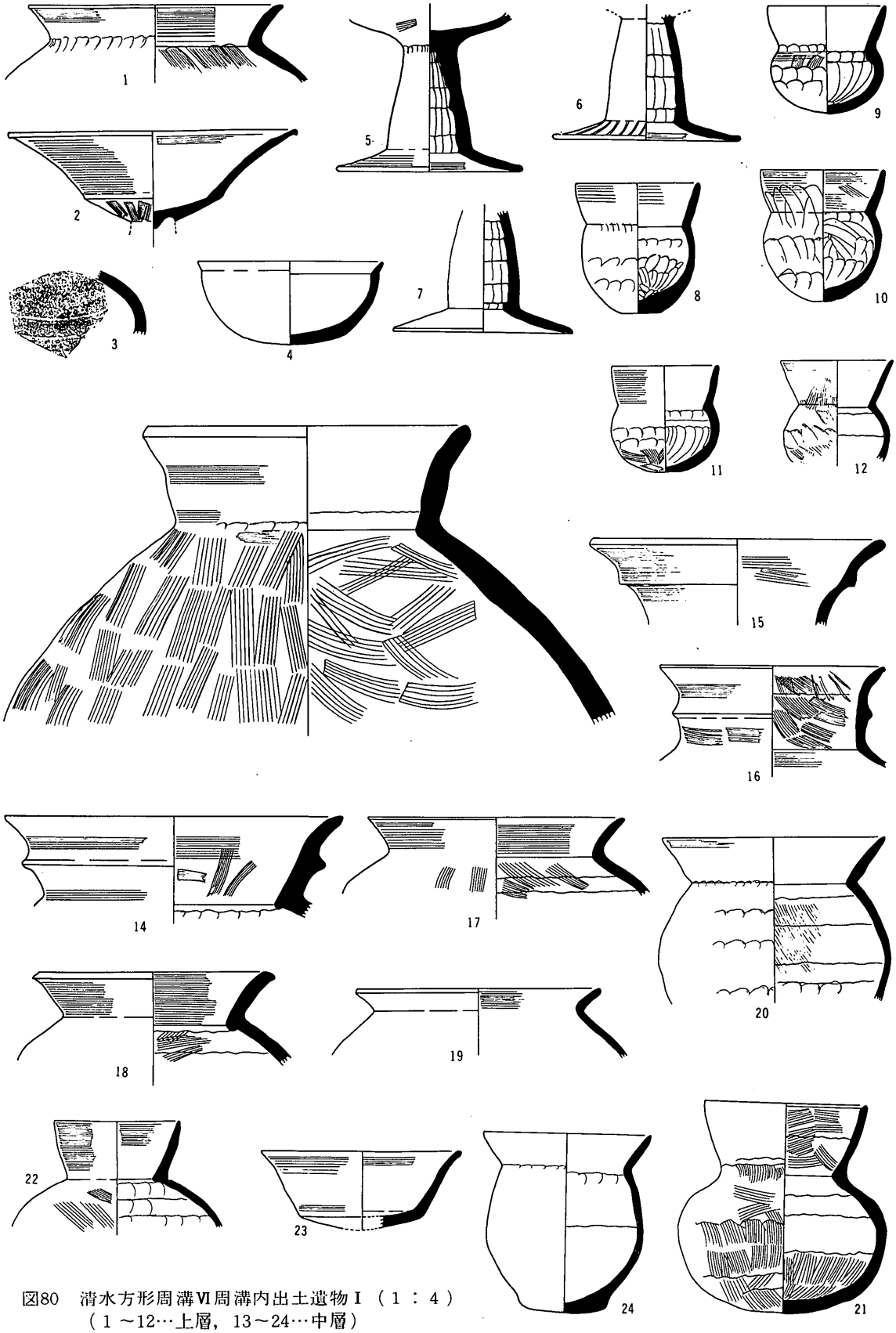


図80　清水方形周溝Ⅵ周溝内出土遺物Ⅰ（1：4）
（1～12…上層，13～24…中層）

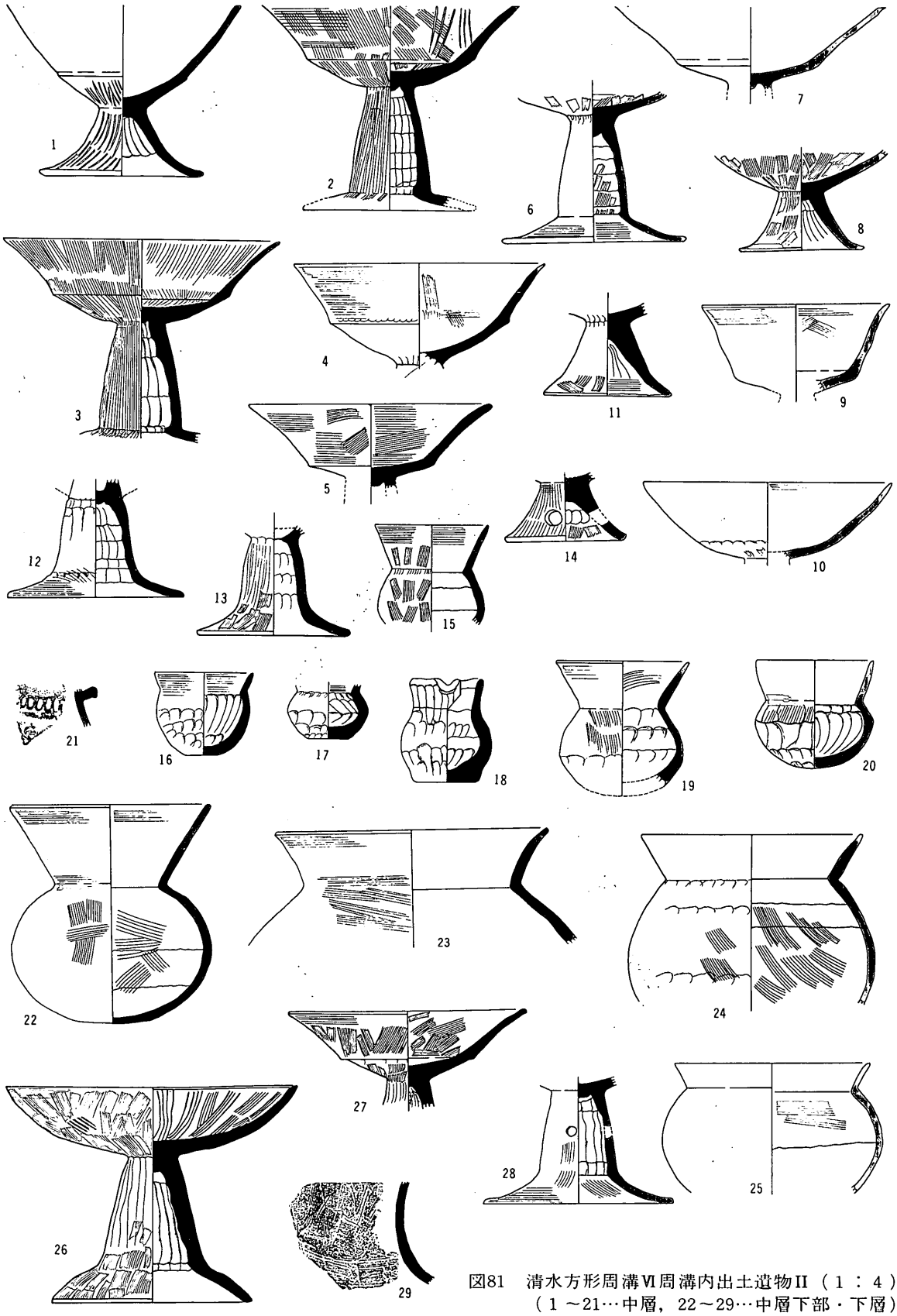


図81　清水方形周溝Ⅵ周溝内出土遺物Ⅱ（1：4）
（1～21…中層，22～29…中層下部・下層）

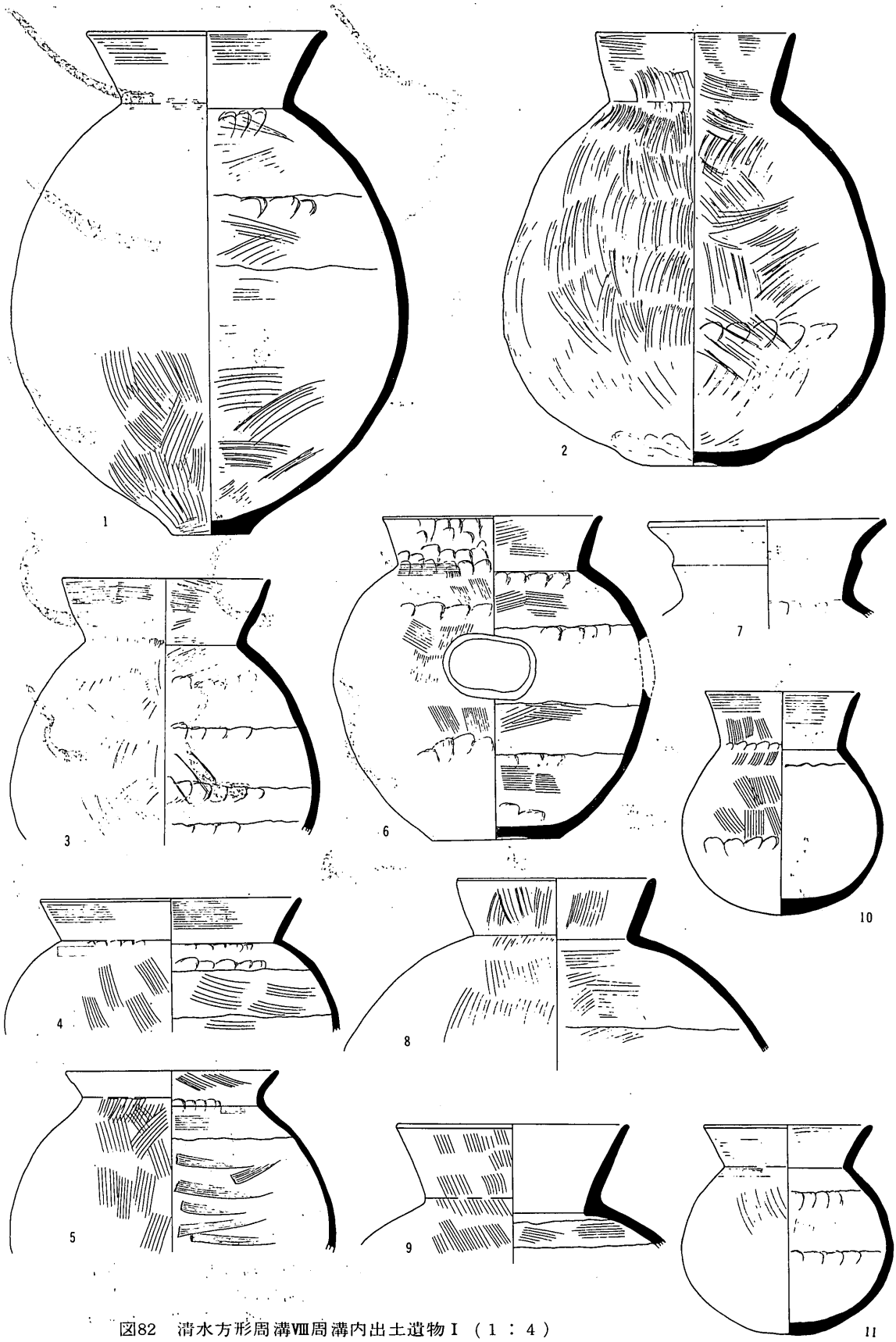


図82　清水方形周溝Ⅷ周溝内出土遺物Ⅰ（1：4）

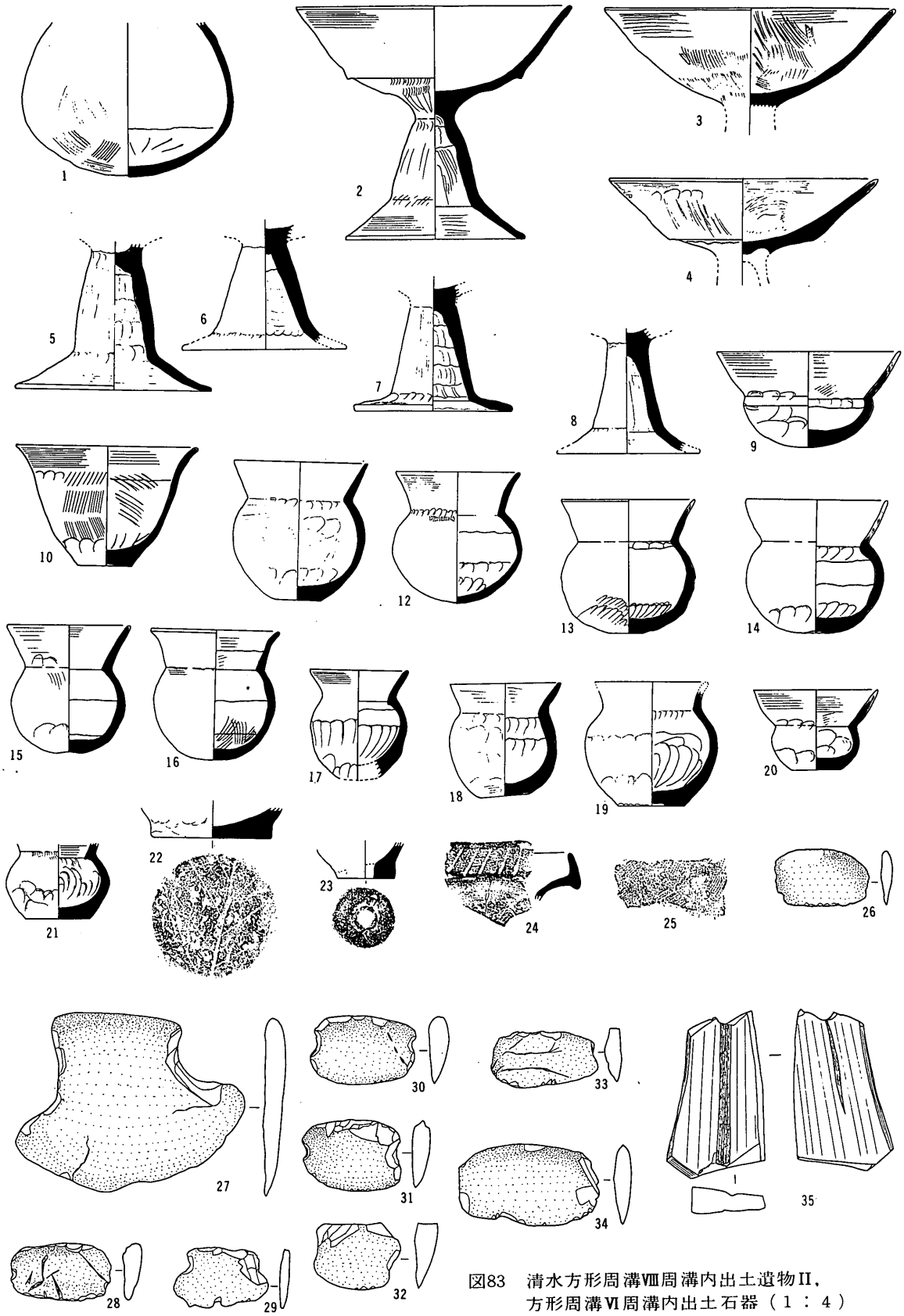


図83　清水方形周溝Ⅷ周溝内出土遺物Ⅱ、
方形周溝Ⅵ周溝内出土石器（１：４）
（１～26…方溝Ⅷ，27～35…方溝Ⅵ）

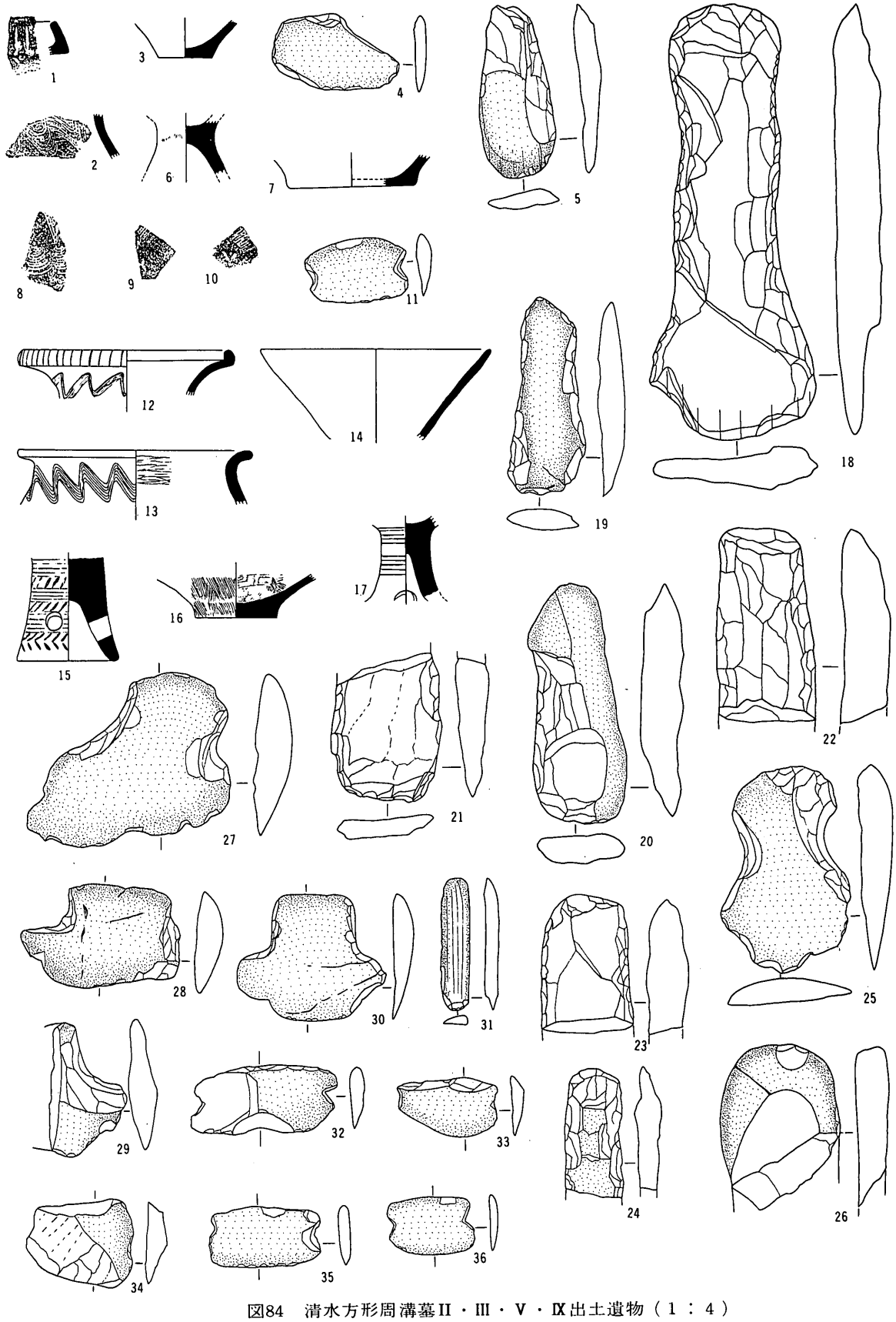


図84　清水方形周溝墓II・III・V・IX出土遺物（1：4）
（1～5…III号，6・7…V号，8～11…II号，12～36…IX号）

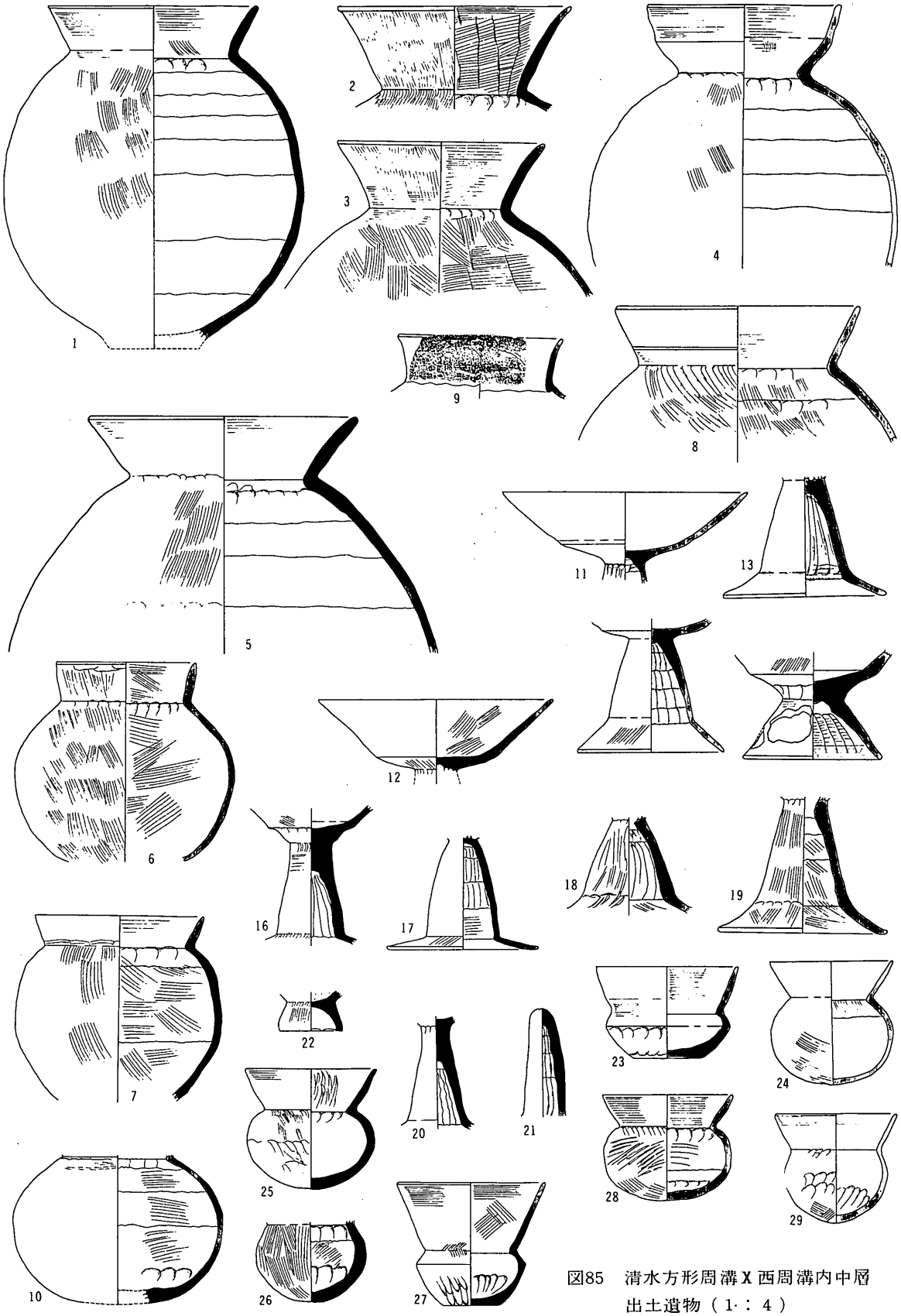


図85　清水方形周溝X西周溝内中層出土遺物（1：4）

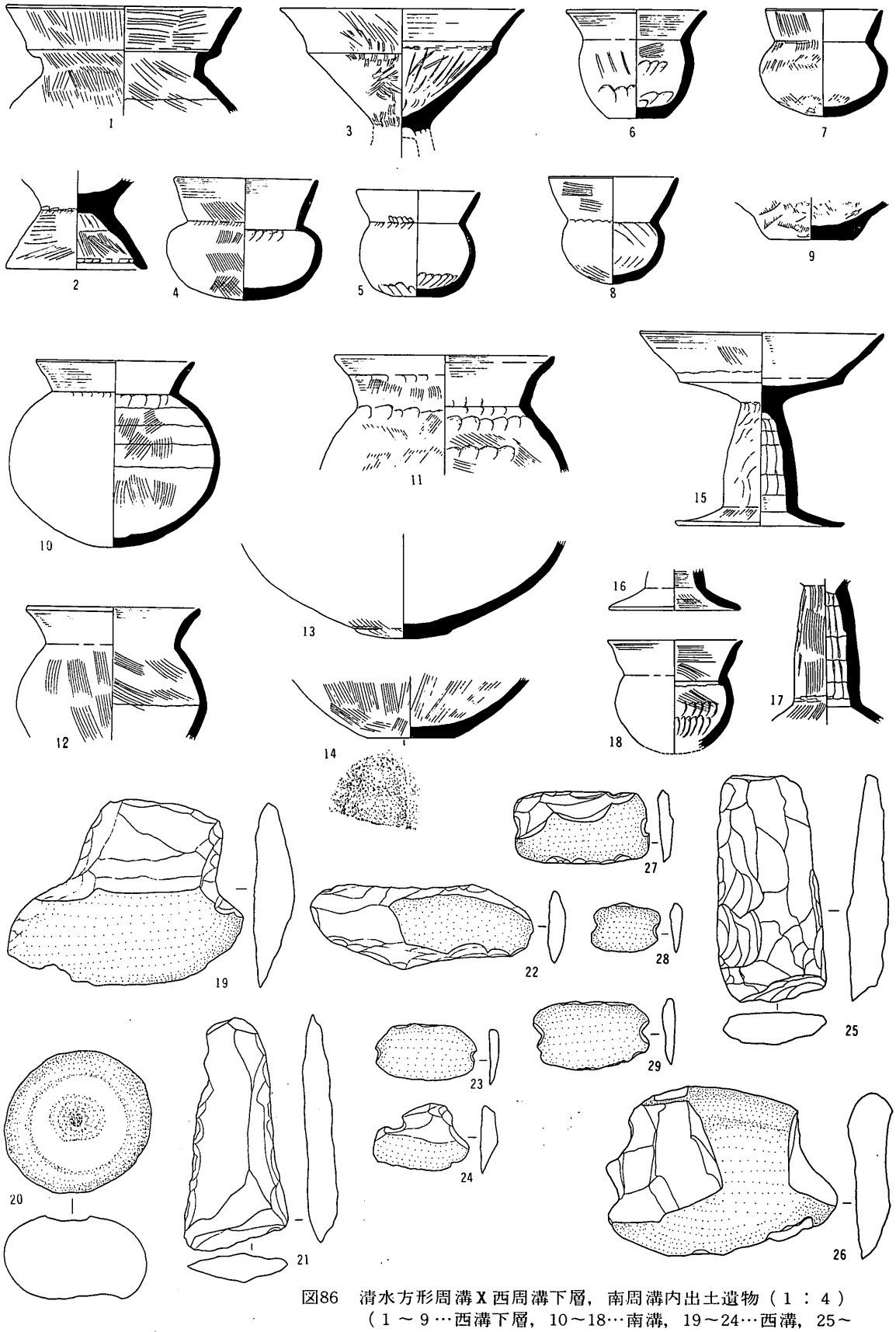


図86　清水方形周溝X西周溝下層，南周溝内出土遺物（1：4）
（1～9…西溝下層，10～18…南溝，19～24…西溝，25～29…南溝）

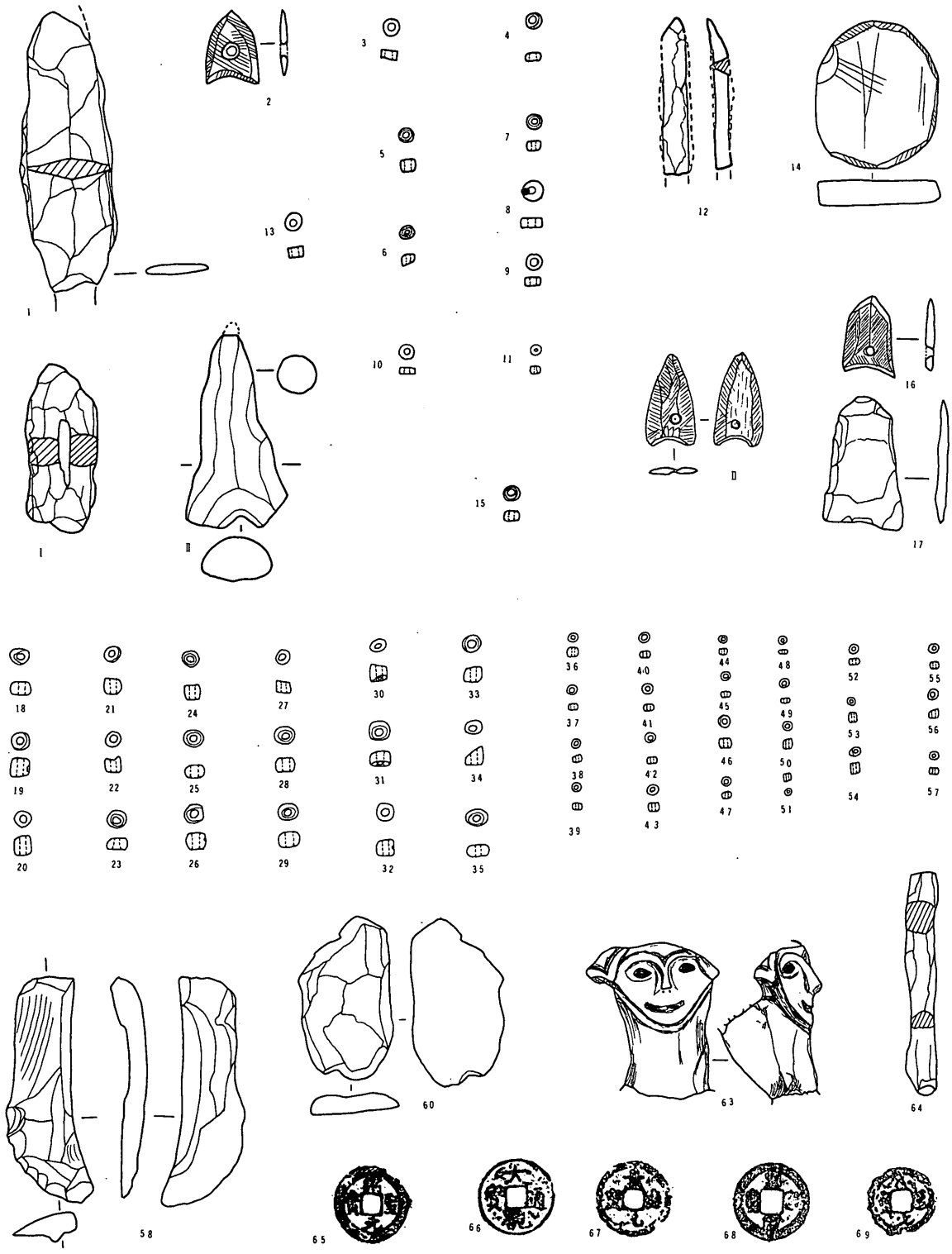
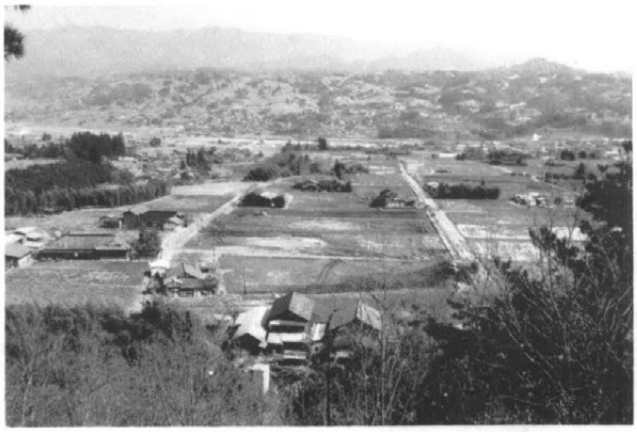


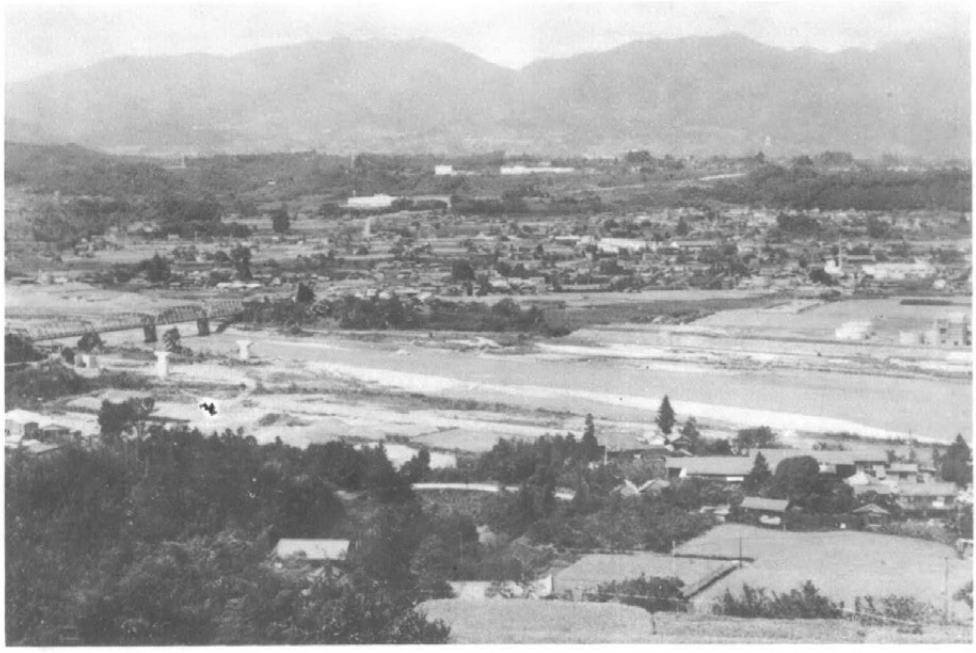
図87　清水遺跡出土　鉄器・青銅器・玉類・古銭・石製品・土製品（1：2）
（1～12…方溝Ⅳ南溝，13・14…北溝，Ⅰ・Ⅱ…方溝Ⅰ北溝，15…方溝Ⅵ，16・17…方溝Ⅱ，18～57…方溝Ⅸ，58・59…10号住上層，60…2号住，61…21号住，62…15号住，63…方溝Ⅹ，64…41号住，65…13号住，66～69…土5，Ⅲ…32住上層）

図版Ⅰ　遺　　跡

工事進行中の遺跡



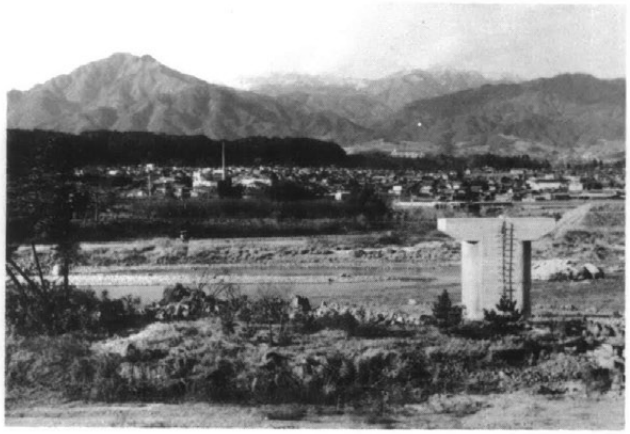
鈴岡城跡からみた遺跡と天竜東岸



工事前の全景 ― 天竜川に接す所から右の煙突の見える工場までが遺跡

天竜川上流からみた遺跡と水神橋

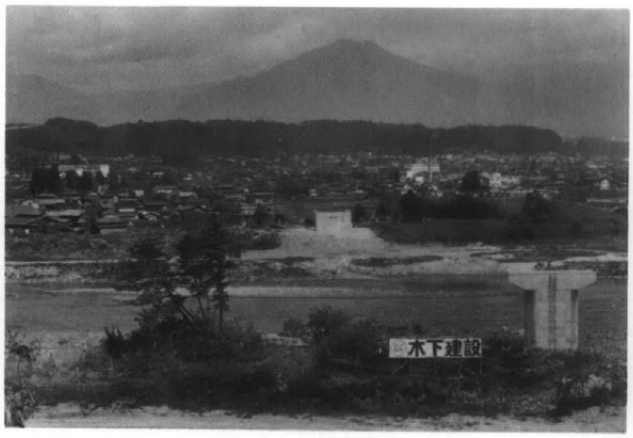
天竜川下流からみた遺跡と水神橋



遺跡近景 — 天竜川に接す梅畑から煙突の見える工場まで，左背後の山は風越山

遺跡近景 — Ⅰ調査区東側……前方は天竜川対岸の飯田市下久堅地区

調査直前のⅠ調査区 — 宅地跡と梅畑



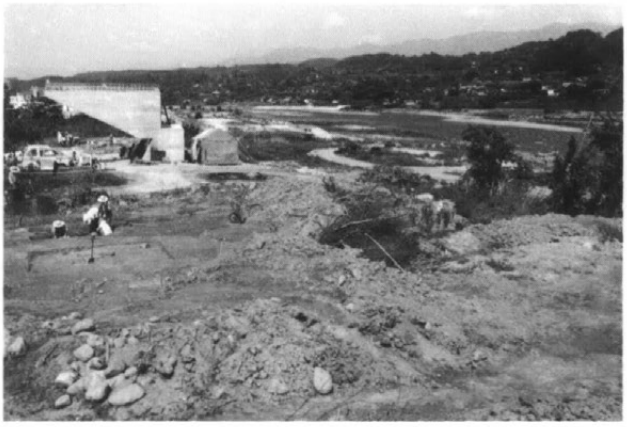
51年度調査直前の遺跡 — 橋脚で一部破壊される

Ⅰ調査区南側 — 水神橋と前方が南原橋（この後新南原橋が架橋される）

Ⅰ調査区北東側 — 右手前は橋脚工事で破壊

III・IV調査区

西方からみた遺跡 — 手前がV調査区

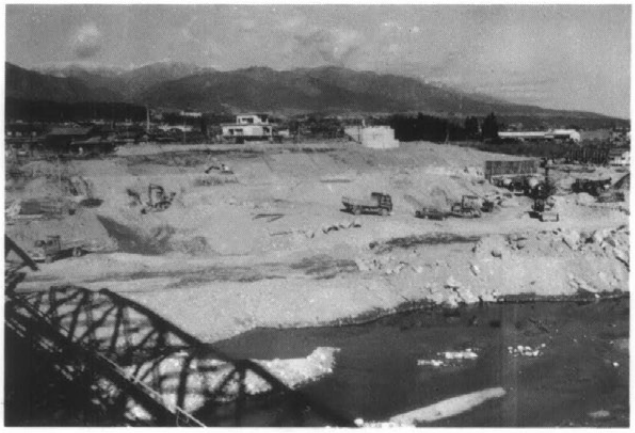


南からみたI調査区

I調査区に発見された天竜川流跡を示す礫層

I調査区東端部の地層調査 — 7回の大洪水の跡を示す（図3参照）

III調査区取付道路切採り面の地層調査（図3参照）

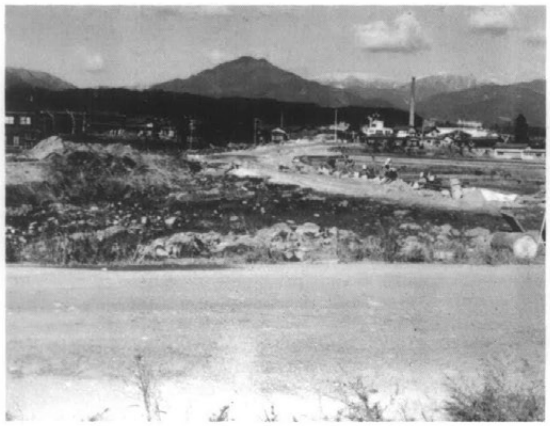


変貌する遺跡１

変貌する遺跡２

変貌する遺跡３

変貌する遺跡４

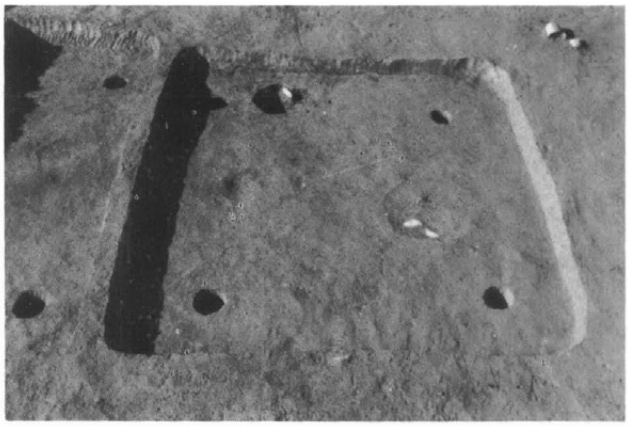


変貌する遺跡５

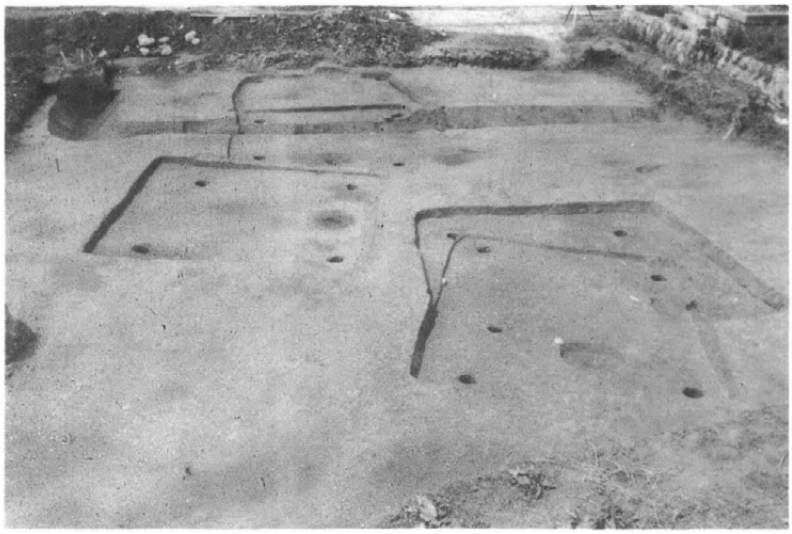
変貌する遺跡６　全景

昭和49年度遺構全景

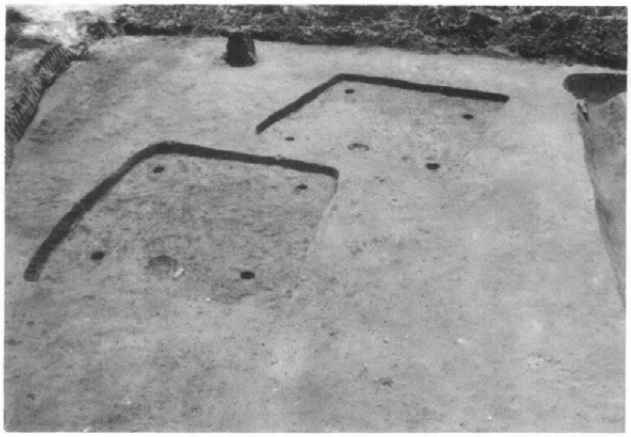
2号住居址 ― 左側の線は方形周溝墓II
が切っている



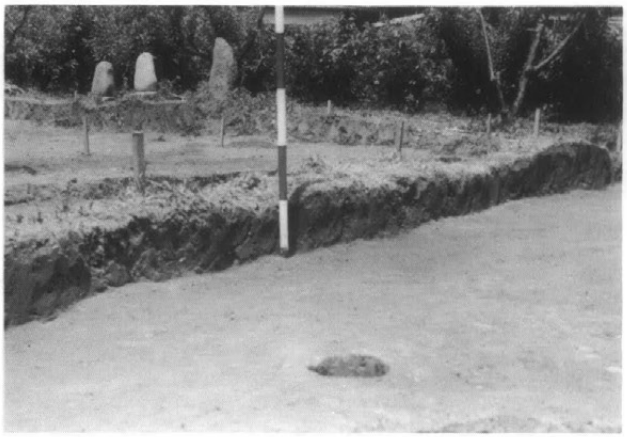
3号住居址 ― 左は1号住居址



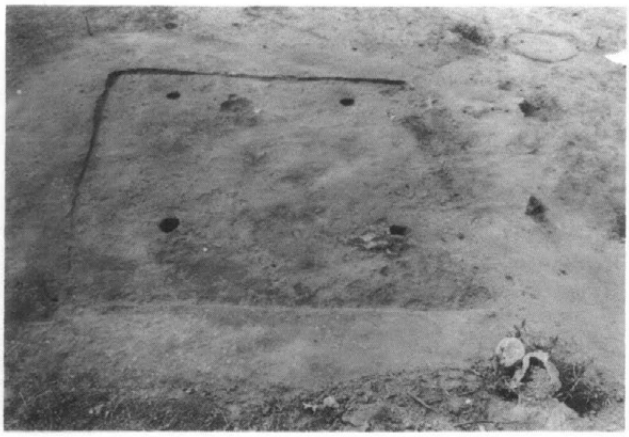
I調査区北の遺構群 ― 北から，中央は方
形周溝墓Iの北溝



4号（左）・5号（右）住居址

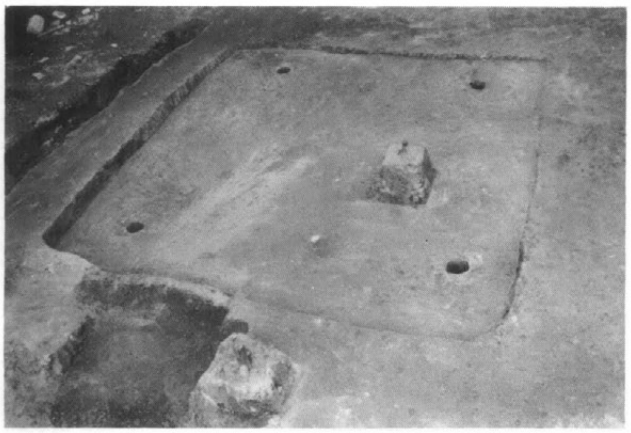


Ⅰ調査区南 ― 耕土の下は住居址の床面となる

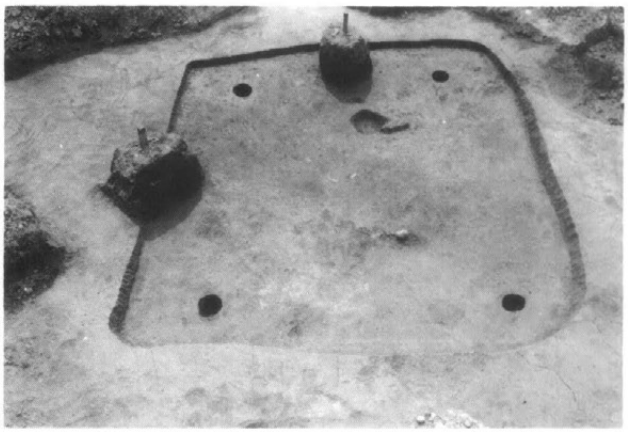


7号住居址 ― 天竜川の洪水で上層は流され，耕土の下に僅かに壁を残す

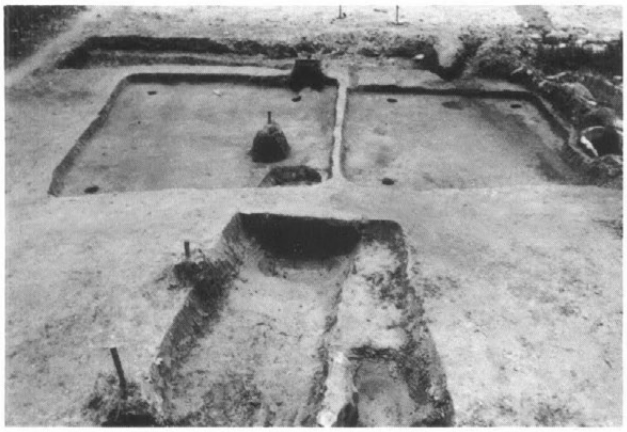
9号住居址 ― 耕土の下に床面があり，グリッド調査で床面を掘りこむ失敗を犯す



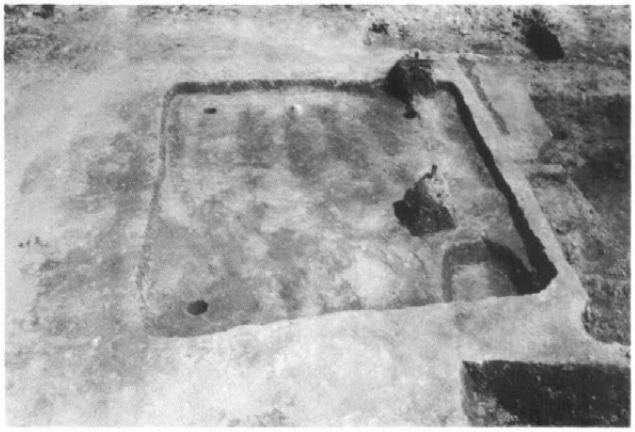
10号住居址



37号住居址

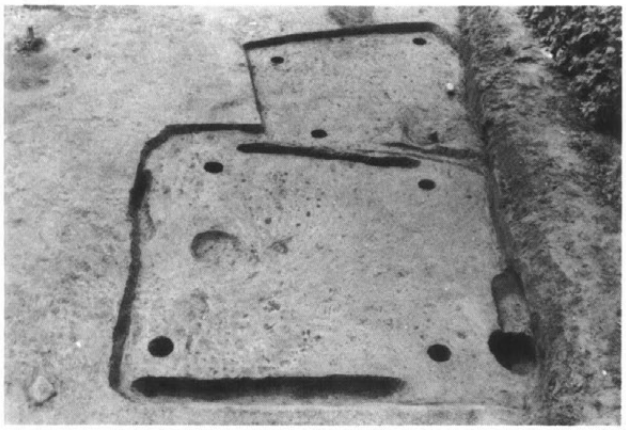


18（右）・17号住居址 ― この下に方形周溝墓Ⅳ北溝がある

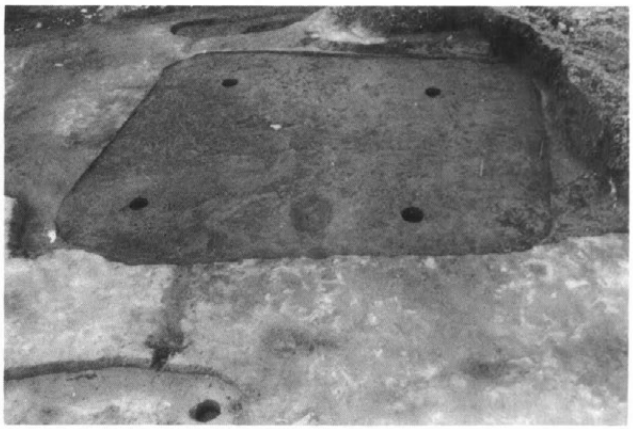


17号住居址

Ⅲ調査区東の遺構群

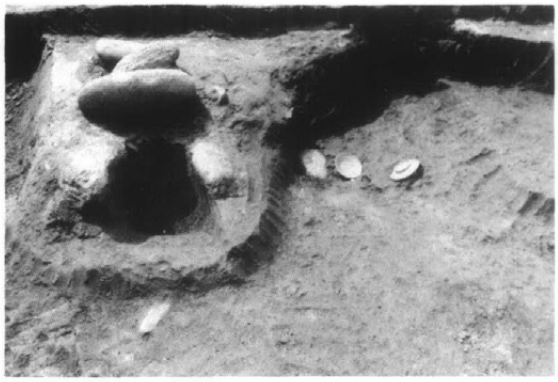


38号（手前）・22号住居址



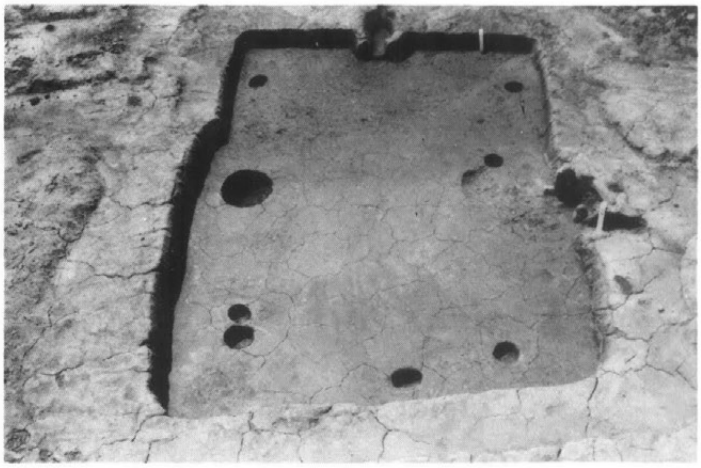
21号住居址

41号住居址 ― 左は用地外

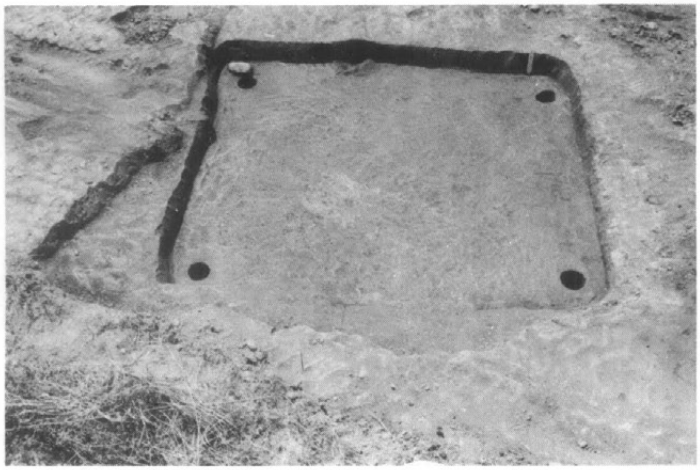


41号住居址カマド横より灰釉陶器皿の出土

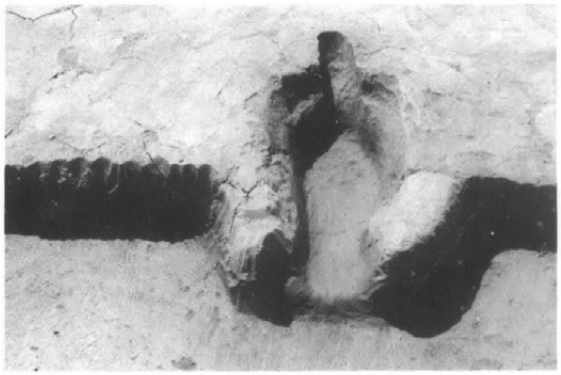
41号住居址カマド



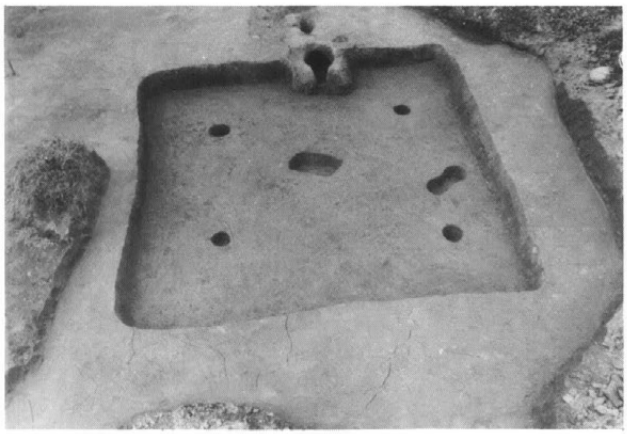
33号（上）・34号住居址



32号住居址



33号住居址カマド

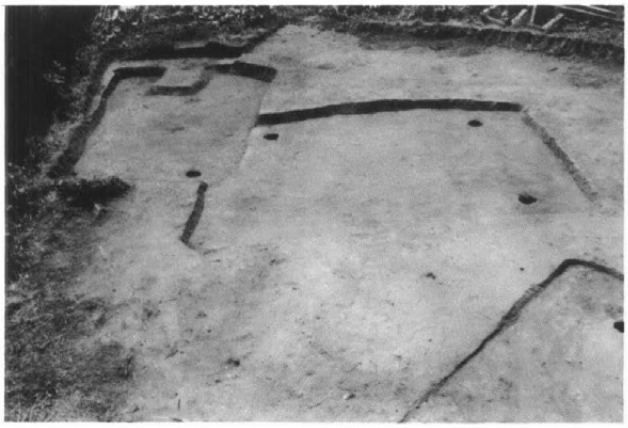


42号住居址

42号住居址かまど

36号住居址

40号住居址

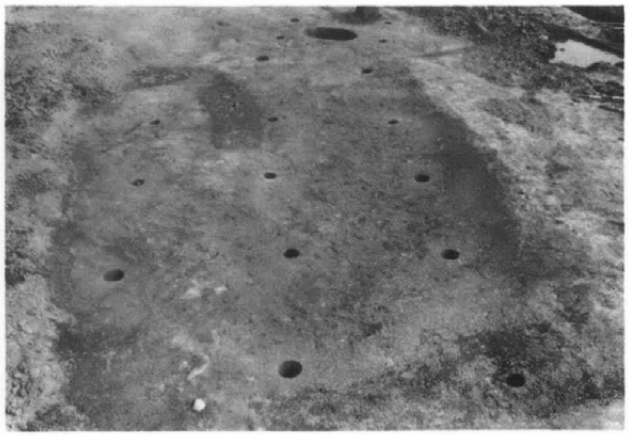


13号（左）・11号（中）住居址 ― 右は
7 号住居址

柱列址Ⅰ・土坑16号

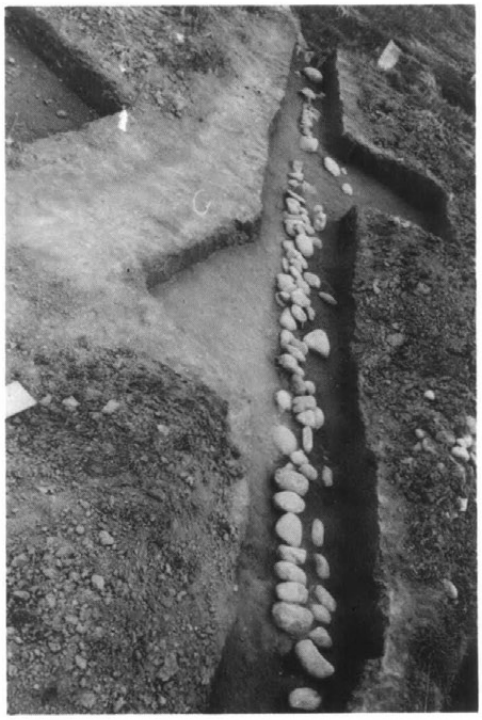
柱列址II

柱　穴　群



柱列址IV（手前）・III — 西より

柱列址III（手前）・IV，土坑15号 — 東より

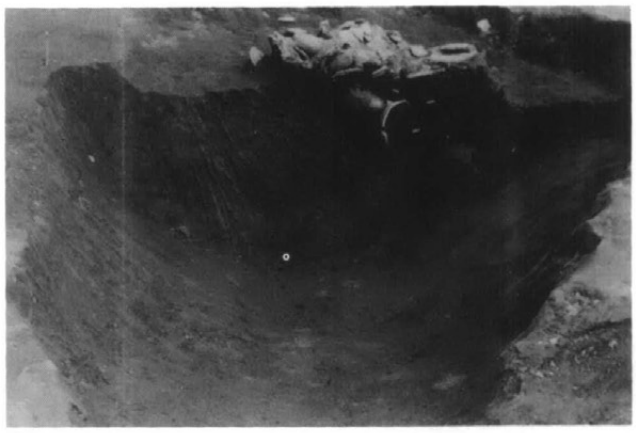


水　路　址　1

水　路　址　2

土器集中坑

土器集中坑断面



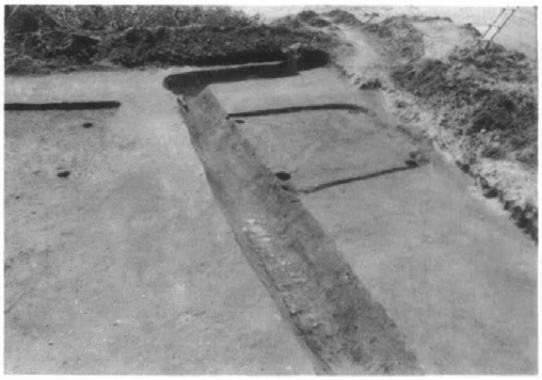
土坑５号 ― 石の下より頭蓋骨出土

土　坑　12　号

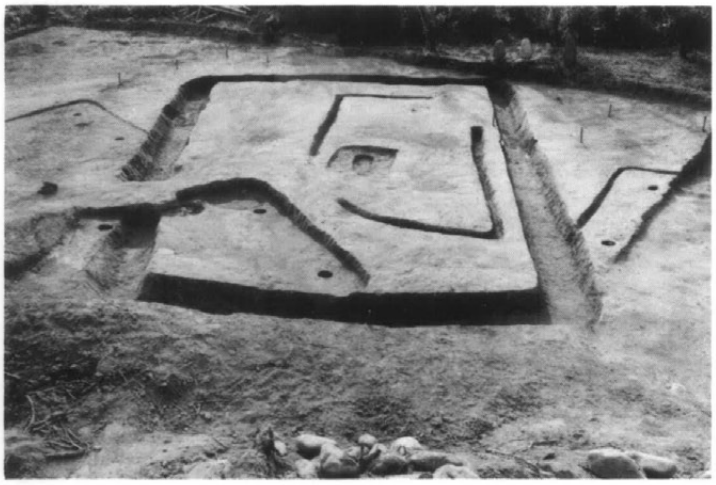
Ｖ調査区墓坑群上部の集石

図版III　遺構 2 ― 方形周溝墓

方形周溝墓Ⅰ ― 昭和49年度調査

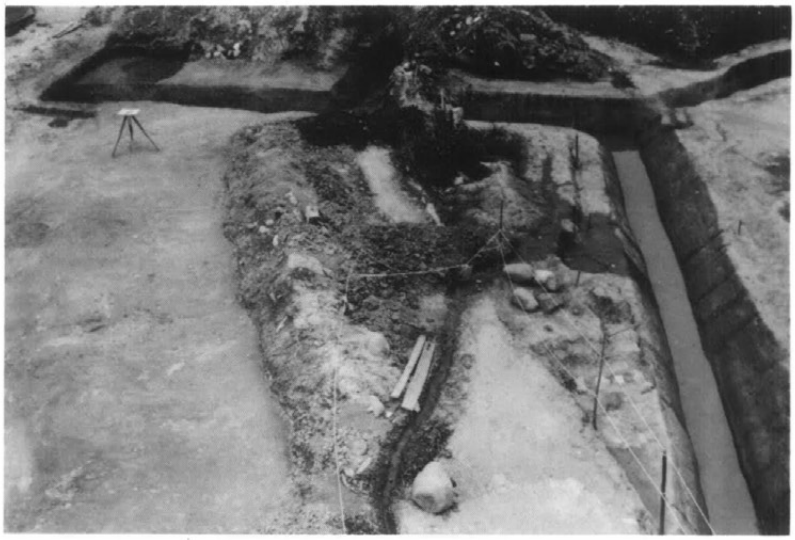


方形周溝墓Ⅰ北溝と東溝の１部



方形周溝墓Ⅲ

方形周溝墓Ⅸ ― 道路中心杭左は土坑14号，右の主体部よりガラス玉　こ出土



方形周溝墓Ⅳ — 南と東溝，右に延びるがⅥ号，上方に延びるがⅧ号

方形周溝墓Ⅳの南と東溝の１部—西より

方形周溝墓Ⅳの南と東溝の１部—東より

方形周溝墓の周溝断面１

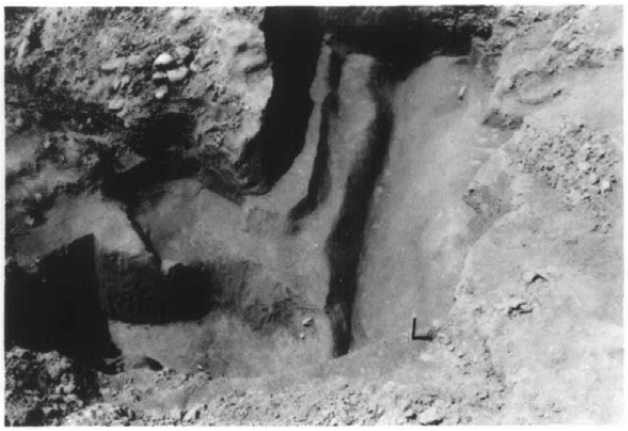
方形周溝墓の周溝断面２

方形周溝墓の北溝と西溝の１部—西より

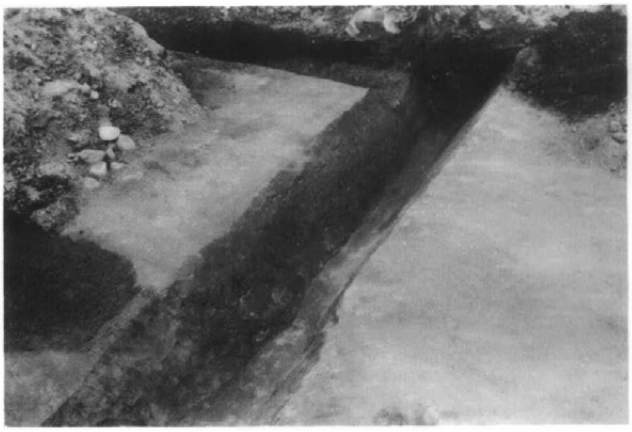
方形周溝墓Ⅳの北溝 — 東より，右にのびるのはⅠ号西溝

方形周溝墓Ⅳの北溝断面

方形周溝墓Ⅳの南コーナーとⅥ号



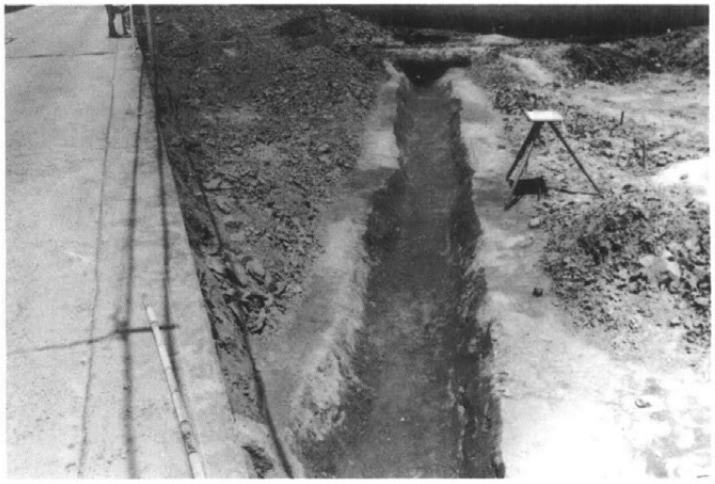
方形周溝墓Ⅵは南と東に分かれる

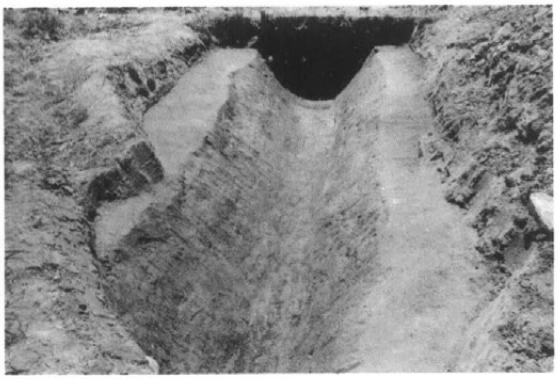


方形周溝墓Ⅷと Ⅳの東溝　左にのびるがⅧ号

方形周溝墓Xの西溝 — 北より，国道152号で切られる

方形周溝墓Xの西溝 — 南より





方形周溝墓Xの西溝 — 北側は用地外コーナー付近とみる

方形周溝墓Xの南溝 — 西より，左上は43号住居址

方形周溝墓Xの南溝・43号住居址・土坑25号 — 東より

図版Ⅳ　遺物出土状況

1　方形周溝墓Ⅳ周溝内遺物の出土

高　坏　出　土

高坏・壺の出土

大形甕の出土

壺　の　出　土

壺　の　出　土

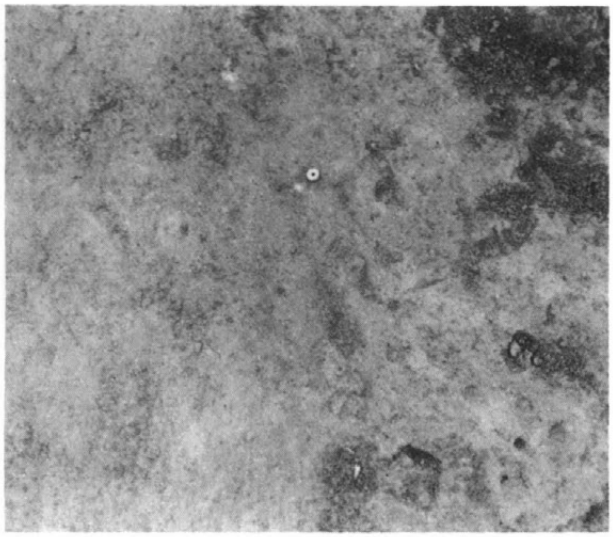
穿孔の坩出土

坩　の　出　土

長頸壺の出土

鉄　剣　の　出　土

石器の出土 — 溝の底より



小　玉　の　出　土

磨製石鏃の出土

図版Ⅴ　遺　　物

1　方形周溝墓Ⅳの遺物

南　溝　上　層

南　溝　上　層

南溝中層上部

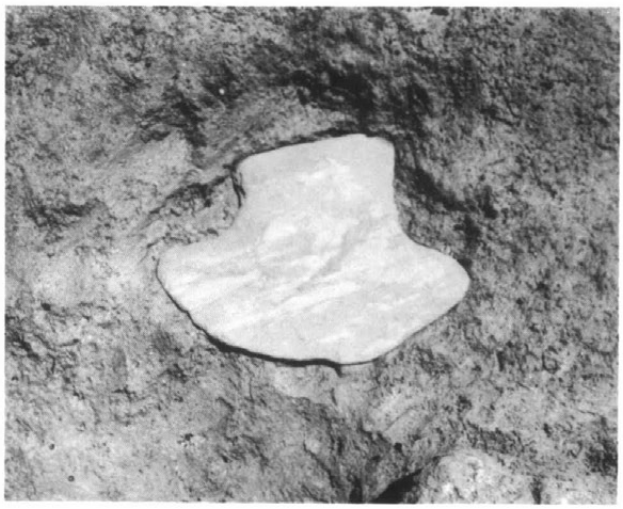
南　溝　中　層

南　溝　中　層

南　溝　中　層

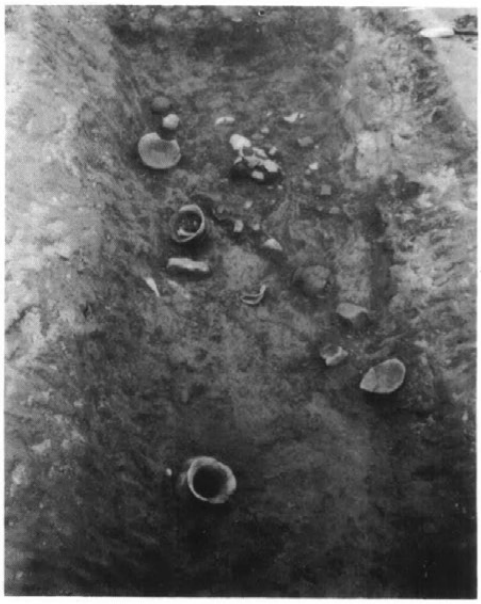
2　方形周溝墓Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ周溝内遺物出土

Ⅵ号，壺の出土



Ⅵ号・石器の出土

Ⅷ号土器出土状況



Ⅹ号土器出土状況

3　住居址遺物の出土

37号住居址壺の出土

10号住居址上層より青銅器の出土

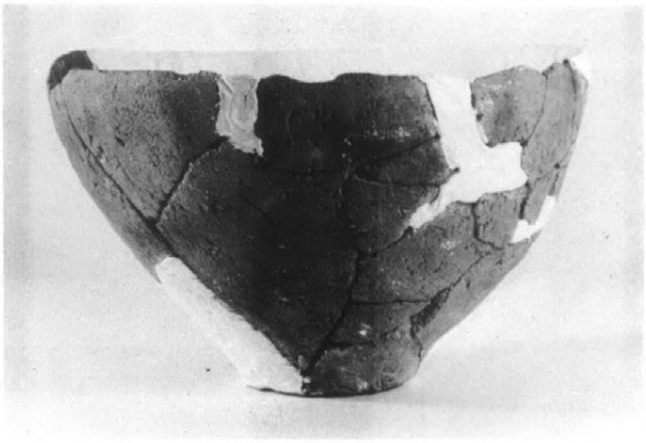
南　溝　中　層

南　溝　中　層

南　溝　中　層

南　溝　中　層

北　溝　中　層



南　溝　中　層

北溝中層下部

北溝中層下部

南溝中層下部

南溝中層下部

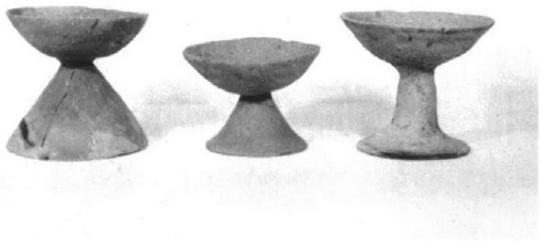
南　溝　下　層

南　溝　下　層

南　溝　中　層

南　溝　中　層

南溝 — 中央は下層・他は中層

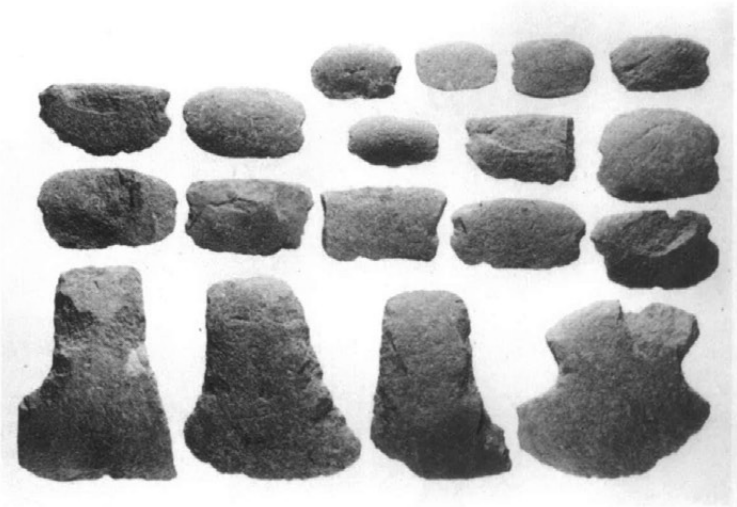


南溝中層下部

南　　溝

南　　溝

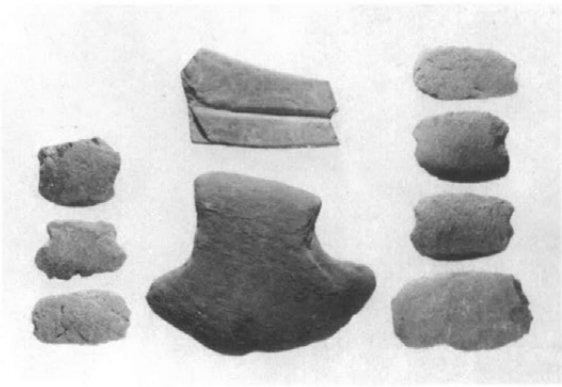
北　　溝



Ⅳ 号 石 器

2　方形周溝墓Ⅵ・Ⅷ・Ⅹの遺物

Ⅵ 号 の 土 器



Ⅵ 号 の 石 器

Ⅷ号中層下部

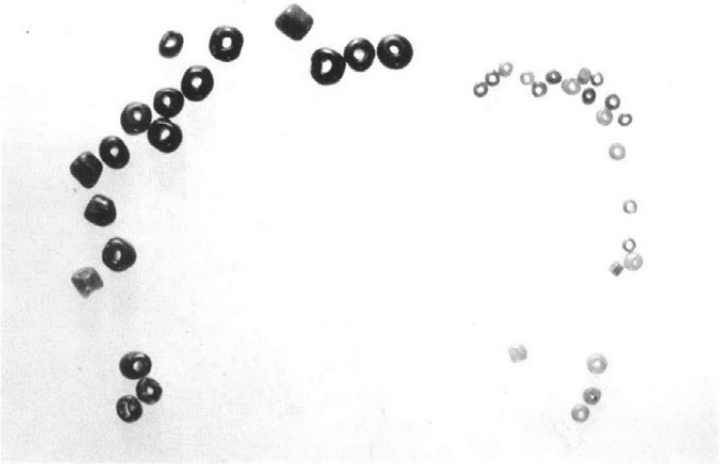
Ⅷ　　号

Ⅷ　　号

Ⅹ　号　西　溝

Ⅹ　号　西　溝

Ⅹ　号　西　溝



Ⅸ号主体部出土のガラス玉

3　住居址・土坑等の遺物

37 号 住 居 址

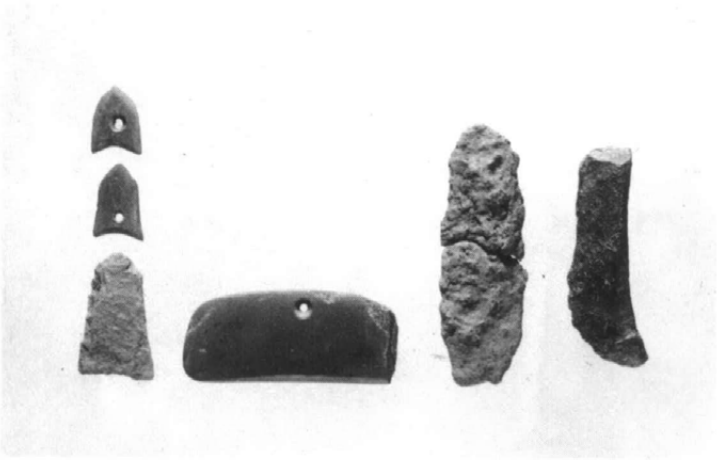
38 号 住 居 址

28 号 住 居 址

22 号 住 居 址

25 号 住 居 址

土 器 集 中 坑



磨石鏃・石包丁・鉄剣・青銅器

26 号 住 居 址

41 号 住 居 址

41号住居址灰釉陶器

図版Ⅵ　発掘スナップ

昭和49年度調査をはじめる

昭和50年度調査をはじめる

方形周溝墓Ⅳの南周溝の調査

方形周溝墓Ⅳの北周溝の調査

方形周溝墓Ⅱの周溝とⅣの主体部をさぐる

Ⅲ調査区の調査

40号住居址の調査

方形周溝墓Ⅹの南溝の調査 ― 飯田高校考古学クラブ員

清　水　遺　跡

—弥生時代後期，古墳時代前・中期，平安時代の集落址，方形周溝墓群—

1976.11

建設省天竜川上流工事事務所
長野県飯田市教育委員会